
Need of Your Heart's Blood 1

彩世 幻夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Need of Your Heart's Blood 1

【Nコード】

N7307F

【作者名】

彩世 幻夜

【あらすじ】

親戚をたらい回しにされ、心を閉ざした少女を引き取ってくれた心優しい人達。……だけど、彼らにはとんでもない秘密があった？

ある日の光景（前書き）

この作品は、吸血鬼モノです。

吸血シーンや宗教的表現、また、バトルシーンにおける多少の残酷表現が含まれます。

恋愛を描いています。18禁表現はありませんが、軽めの性的描写があります。

苦手な方はご遠慮下さい。

ただ今、小説ランキングに参加しています！お気に召しましたら、ランキングへのリンクをぽちっ、と……お願いします！

評価・感想など頂けましたら、嬉しいです。

ある日の光景

強烈な突風。

一昨日咲き始めたばかりの桜の花びらを容赦なく巻き込み、乾ききった校庭の砂埃を盛大に舞い上げる。轟々と音を伴いながら吹き付ける強風は、その風下に建つ体育館へ、花と砂粒とを次から次へと叩きつけて行く。

ガタガタと、全開にされた扉が風の圧力に悲鳴を上げるが、その音すらかき消す悲鳴が、体育館から出てきた制服姿の少年少女たちから上がった。

女子は、綺麗に整えてきた髪型があつという間に台無しになるのを何とか防ごうと、髪を手で押さえながら。

男子は、見る見るうちに真っ白になっていく学ランから、少しでも砂を払おうと、あちこちパンパン叩きながら。

……彼らの後ろから、既に半分ほどズレたカツラを、これ以上飛ばされまいと必死の抵抗を試みながら、年配の男性教師が続いて出てくる。

彼らの胸元には皆一様に花が飾られており、生徒たちは皆校名が綴られた筒を手に行っている。

その表情は皆様々。目を赤く腫らしながら、友人と抱き合う者。世話になつた教師と話し込む者。ずっと憧れていたあの人に、第二ボタンをせがむ者。春休みの予定を友人と相談する者……。

それぞれが、それぞれなりの時の過ごし方をする中、一人集団から外れた場所で、何の感慨も無く冷めた様な瞳で彼らを眺める少女がいた。皆が、それぞれ友人や教師、後輩達と過ごす中、彼女に声をかけようとする者は ただの一人もいない。

吹き付ける強風。生徒指導の教師たちの目をかい潜ってギリギリまで短くしたセーラー服のスカートを、多くの女子が気にする中、一人濃紺色のブレザーを着こんだその少女は、後から出てきた保護者達の群れへと視線を向けた。

母親同士、お喋りに花を咲かせるもの。我が子の担任に挨拶をしに行く者。我が子の元へ駆け寄り、他愛もない話で盛り上がる者。クラス会の幹事を任せられ、他のお母さん方と場所や時間の確認をする者。こちらも人それぞれだ。

しかし、少女はその中の誰かを待つでもなく、一人淡々と重たい学生鞆から手帳を取り出し、電車の時間を確かめた。校門横に立つ時計塔を見上げ、時間を確認し、その視線をほんの僅かの間、級友たちに向けた後、クルリと彼らに背を向け歩き出した。

その足取りに、躊躇^{ためら}う様子はない。強烈な突風に髪を乱されるのにも、制服を砂だらけにされるのにも構わず、彼女はその後にした。

出会い

電車に揺られる事、約三時間半。ただでさえ、特急料金をケチって普通列車を選んだ上に、この強風で徐行運転中との事でダイヤが乱れ、目的の駅へとたどり着いた頃には既に西の空に赤々と燃える太陽が沈みかけていた。

眉間にしわを寄せ、手にしたメモを睨みつける。メモにはバスに乗るよう書いてあるのだが、バスは既に出た後で、次の便はなんと三時間後らしい。

三月も下旬とはいえ、まだまだ朝晩は冷える。加えてこの強風だ。この状況下で三時間も待ちぼうけというのはかなり厳しい。 > i 3
5 1 5 0 — 1 8 3 <

「……君、もしかして咲月くん？」

呼ばれて振り返ると、そこには三十代と思しき男性が立っていた。
「ああ、やっぱり」

男は、ホッとしたように胸に当てた手を、すぐに頭の後ろに持つて行くと、軽い調子で、

「いや、やっぱり来てみて良かった。ほら、今日は風が強いだろう？ この線、よくダイヤが乱れるからさ、もしかして……って思っ
てね。」

と、人の良さそうな笑みを浮かべる。

「……、」

問うような目で、少女は男を見上げた。

「ああ、ボク、今日から君の家族になる、ふたははつき双葉葉月。……でも、

詳しい自己紹介は後でね。こんな寒空の下に女の子を何時までも立たせてる訳にいかないでしょ？」

向こうに車を停めてあるから、と、彼は小さな駅舎に比べて随分広々とした駐車場にポツンと一台停まっている赤い軽自動車を指差した。

「今、車回してくるから。もうちょっとだけココで待ってて？」

そう言い残し、彼は車へと駆けて行った。

「……………」

少女は、無言のまま彼の背を見送った。葉月、と名乗った男が車へと乗り込みエンジンを始動させ、ザリザリと音を立てる敷き詰められた砂利の上でガタガタ揺れる車体を彼女の元へと移動させる間も、時折、瞳に揺らめく感情を押し殺すように無表情のまま目だけで彼を追った。

キツとブレーキが踏まれ、ザツと足もとの砂利がタイヤと擦れる。彼は素早く車を降りるとテキパキとトランクを開けた。

「……………荷物はそれだけ？」

肩から下げたパンパンに膨れて重そうな鞆。その、埃だらけの学生鞆を見て葉月が言った。

「……………」

問いに、無言でうなづく少女。

「重いでしょう？ 今トランクを開けるから……………」

上へと持ち上げたトランクの扉を片手で押さえながら、葉月は空いた方の手を彼女の方へと差し出した。その、彼の仕草に少女は、この日初めて躊躇ためらう様子を見せた。肩から下げた鞆のベルトをギュツと握り締め、警戒感を露わにした眼差しを彼へと向ける。

そんな彼女に、相も変わらず人の良さそうな笑顔を絶やさない彼は、

「寒かったでしょう、車の中は暖まってるから。さあ、荷物を下ろ

して車に乗って」

と、コートも着ずに突っ立っている少女を促した。

「……………」

少女は警戒感をあらわにしたまま、それでも仕方なく肩から荷物を降ろし、彼にそれを手渡した。葉月は、ボロボロになった持ち手の紐に見られる、刃物で付けられた様ないくつもの傷や、バッグの至る所にある『死ぬ』だとか『ウザイ』等と書き殴られた落書きの数々を目にしながら、特に気にするでもなく無頓着にそれを受け取り、丁寧にトランクへと納める。

「さ、じゃあ行こうか？ ……あ、途中、スーパー寄っていい？

年頃の女の子の食の好みが分なくなつてさあ、夕飯のメニューに悩んでてね……………」

少女を車の助手席へと促し、自分はトランクの扉を閉じ、運転席へ戻ると、シートベルトを引っ張りながら彼は尋ねた。

「……………」

が、少女はその問いに答えることなく、無言で俯うつむいたまま膝の上で組んだ両手を固く握りしめている。

「ボクはねえ、焼き魚が好物なんですよ。…………特にニジマスとかヤマメとか、釣ったばかりの魚をその場で塩焼きにして食べるって、最高の贅沢でしょう？」

ハンドルを握りながら、葉月は少女に語りかける。

「休みの日にはよく近くの川へ釣りに行くんだ。…………でもねえ、どうにもボクは下手くそでねえ。ほとんど釣れなくなつて。いつも朔さ海君くみに笑われるんです。あ、朔海君というのはボクの友人でね。年は…………まあ、一応君と同じ…………みたいなもん…………なんだけどね。ちよくちよく遊びに来ちゃ、色々差し入れてくれるんですよ」

カーブの多い国道は、車の影も少ない。スピードは控えめの安全運転ながら、わりとスムーズなドライブになっていた。と、市道と

の交差点の信号が青から黄色に変わり、葉月はブレーキを踏んだ。

「咲月くん、魚は平気？ ……今朝、朔海君が差し入れてくれたヤマメの甘露煮があるんだけど……。やっぱり最近の中高生はそんなの食べないよねえ……。」

「……。」「ああ、味は保証するよ？ ……彼の持つてくる料理にハズレはないから。まあ、とはいえ魚だけじゃやっぱりちよつと寂しいか。肉でも買って帰ろうか？」

車に揺られること約五分。彼はハンドルを左へ切り、スーパーの駐車場に車を進入させた。すぐにサイドウィンドーを開けて、腕を伸ばす。

「今日は寒いし、思い切ってすき焼きとか、どう？」
機械から駐車券を受け取り、遮断機のポールが開くのを確認して、再び車を発車させる。

「……豆腐と椎茸はたしか冷蔵庫にあったから……後は……。咲月くん、君はすき焼きに他にどんな具材を入れる？」

店の出入り口にほど近い場所に空いたスペースを発見した彼は、スムーズなバックで正確な駐車テクを披露しながら、根気よく少女に問いかけた。

「エリンギ、白滝。……春菊と……お麩も美味しいよね。」
「……葉月。すき焼きに麩を入れるのは邪道だといつも言っているだろう。」

エンジンを切った車の屋根を軽くノックしながら、一人の少年が会話に口を挟んだ。

「あれ？ ……朔海君、何でこんな所に？」
「何で、だと？ 自分で今朝、夕飯に誘ったんじゃないか。なの家にいったら留守ってどういう事だよ？」

不機嫌そうに口をとがらせる少年に、
「……朔海君、今まだ四時を少し過ぎたばかりだよ？」

苦笑を浮かべ、呆れたように言った。

「今朝、言ったでしょう。今日から家に女の子が一人来るって」

「……あ、じゃあもしかして、その、隣に乗ってる子が……？」

「そ。……ああ、咲月くん、紹介するよ。この子がさつき言った

ボクの友人、朔海君」

頑かたくなに、俯いたまま動かなかった少女は、彼の言葉にほんの少しだけ顔をあげ、感情の映らない静かな瞳で少年を見上げた。

「この位の年頃の女の子の食の好みなんか分からないからね、一緒に夕飯の買い出しに来たんですよ。良かったら、君も一緒に来るかい？」

「ああ。すき焼きの鍋におかしなもん放り込まれない様に見張ってないとな。」

と、憎まれ口を叩く少年に、葉月は苦笑いを返し、

「朔海君。今日の鍋奉行は君じゃなく、咲月君だよ」
きっぱり言い渡した。

「……好きなもの、何でも言っただけ？」

葉月は車を降りながら、座席から動こうとしない少女に声をかける。

「……。」

少女は、じつと葉月と少年とを見上げながら、無言の答えを返す。

「もう、朔海君がいららない事言うから。遠慮させちゃったんじゃないのお？」

「ちょっと、僕のせいなの？ ちょ、ちょっと待ってよ。僕、まだ彼女と何も喋ってないのに！？ ……っていかさ、葉月。何なのさ、さつきからのその妙な言葉遣いは？ いつものまどろっこしい程の丁寧口調を何処へ忘れてきたのさ！？」

「……む。初対面の女の子相手に小難しい喋り方なんかしたら、敬遠されてしまうかもしれないでしょう。彼女が少しでも馴染みや

すいように、一生懸命練習したんですよ?」

「……不自然。思いつきり不自然だよ、それ。やめときなよ、悪い事は言わないからさ。……絶対に逆効果だと思う。」

考えてもみなよ、と、頭痛を堪えるかのような仕草をしながら少年は、

「見た目三十近い男が、ヘラヘラと軽口叩いてるんだよ? 普通引かない?」

と、葉月に対し反論しながら、

「ねえ?」

と、咲月に同意を求める。

「!?!?」

突然に話を振られた少女は、ビクンと身体を強張らせた。

「……朔海君、話は店に入ってからにしませんか? いつまでも外で立ち話というのはどうかと思いますよ?」

「……あ。……ごめん、つい……」

朔海は、頭を掻く仕草をしながら、ゴメン、と、咲月に軽く頭を下げた。

「さあ、行きましょう。早くしないと、夕飯の買い出しに来た主婦の方々にレジが大変な混雑になりますよ?」

言われて、少女はやむを得ずといった様子で車を降りる。

「あれ、君……えっと、咲月……さん? 上着は?」

車外に出た彼女の姿に朔海が尋ねた。

「まあ、店の中は暖かいですから。」

フォローする葉月に朔海は、

「でも、なあ……」

コートどころかマフラーも手袋もしていない、寒々しい咲月の格好を上から下まで眺め、

「女の子なんだから、身体は冷やしちゃダメだって。」

説教口調になりながら、自分のコートを脱いで咲月の肩に羽織らせ

た。

「！、……っ！？」

「ほら、マフラーも」

男の子の手にしては、白くて華奢な手で、流行の結びを器用に作って見せる。

「……ほお。朔海君、さすがですねえ。」

葉月は、ニマニマ笑いながら二人を見る。

「笑うな、……ほら、行くぞ！」

朔海は、カートにカゴを上下に二つ乗せ、スタスタと先に立って歩き出す。

「……行きましょう。放っておくと今晚の夕食メニューが彼にジャックされてしまいます。」

促され、少女は彼に続き、店の自動ドアをくぐった。

開く、トビラ。

と。中から柑橘系かんきつのさわやかな香りが嗅覚をくすぐった。

「伊予柑いよかんが安いけど、どうする？」

赤いネットに包まれた果物を手に取りながら、朔海が振り返った。咲月の後から店内へ入った葉月は、

「そうですねえ……」

と、少し考え、

「咲月くん、柑橘類は好き？」

前に行く咲月を呼び止め、尋ねた。

奥様方で賑わう店内で、チラチラとこちらを窺うような視線を幾つも感じながら咲月は、

「……嫌い……、じゃ、ない……です……」

ポツリと呟くように言った。

「よし、んじゃ一応買って行こうか。」

初めて答えを口にした咲月の反応に、葉月はニコニコしながら朔海の押すカートのカゴへ伊予柑を入れた。

「次は……ネギか？」

カラカラと車を押しながら、朔海が売り場を見回す。　　が、彼の目には野菜しか映っていないらしい。

「咲月くん、すき焼きは水菜派ですか、それとも春菊派？」

尋ねる葉月の目にも　　やはり、咲月と朔海以外、映ってはいない様子だ。

周囲に溢あふれる、浮足立った雰囲気。

……まあ、無理もない。これだけ目立つ容姿の二人が連れ立って歩いているのだ。　　細身の長身に、黒のビジネスコートを着こな

す葉月の髪はハニーブラウン。華奢なフレームの眼鏡の奥で、人の良い暖かな雰囲気醸し出す、薄茶色の瞳。

……一方の朔海も、背丈こそ葉月にまだ頭一つ半程及ばないものの、その濃紺の瞳と艶のある漆黒の髪色に良く映える白いジャケツトを、紺のアンダーシャツの上から羽織り、下に穿いた黒のスラックスが、その長い脚をより強調している。

そして、何よりも特徴的なのがその白い肌。葉月も朔海も、男だというのに、周りに数いる女性達の誰よりも白く艶やかな肌をしているのだ。

そんな日本人離れした美形の後ろにくつついて歩く、大きすぎる男物の紺のダツフルコートに身を包んだ咲月に、容赦ない嫉妬の視線が突き刺さる。

「あの……、すき焼きって、普通何を入れるものなんですか？」
気まづげに瞳を泳がせる咲月から、逆に問い返された葉月は目を丸くする。

「……あれ、咲月さんて、もしかして関西の人？　そういえば、確か関西では砂糖醤油で肉を焼くんだよな？」

一方の朔海は思案するように言った。

「ええっ、何ですかそれ？　すき焼きは、割り下でお肉とお野菜とお豆腐と……その他色々な具材をグツグツ煮込んで卵に絡めて食べるモノでしょう!？」

シヨックを受けた様な葉月に、

「料理つてのは、全国一様に同じ仕様とは限らないんだよ。ほら、うどんだって地域によって麺やつゆが違うだろっ？」

「……朔海君、詳しいですね？」

「……まあ、ね。……じゃあ、料理の味付けとかも関西風の味付けにしたほうが良かったりするのかな？」

と、視線を咲月へと向けながら、朔海は問いかけた。

「あ……、の、確かに私、関西に居たこともあつたけど……、土地の味付けに馴染むほど長いこと居たわけじゃないから……っ」
そんな二人の会話に、咲月は慌てて割って入った。

「それに……、どっちにせよ私は食べたことないんで……だから、
……あの、」

が、言葉が続かない。消え入るような声で呟いた彼女の申告に、

「え、すき焼き初めて？ ……そうか、じゃあ水菜でいこうよ。春菊もいいんだけどね、クセがあるから好き嫌いが結構分かれるし」「朔海はそう言つて、積まれた水菜をいくつか手に取り見比べると、一番良さそうなものをカゴへと放り込んだ。

「……その癖のある味が、大人の味わいなんですけどね」

「葉月、自分の言つた言葉には責任持つてよね。今日の鍋奉行は咲月さんなんでしょう？ で、肉はどうするのさ。野菜ももちろん大事だけどさ、どんなにいい野菜を揃えたつて肉が硬くちゃ、すき焼きとしちゃサイテーの部類になつちゃうじゃん」

苦笑しながら呟いた葉月の言葉を完全無視して、百グラム当たり千円の和牛のパックを手に取る朔海に、葉月は苦笑を柔らかな微笑みへと変え、

「……朔海君がお肉代を持って下さるなら、好きなお肉をどうぞ好きなだけお買い求めくださいね？」

その表情とは裏腹にまるで斬るような声音で釘を刺した。

「葉月！ ……僕がこつちのお金、そんなに持つてないの分かつてて！ ……後払いじゃダメ？」

「ダメです」

和気あいあいと、くだらない言い争いを繰り広げる二人の後ろで、咲月はふと朔海の言葉に、

「……？」

と、首を傾げたが

「咲月くんはお肉どの位食べます？」

と、葉月に声をかけられて、

「っ！ あ……あのっ、そんなにいっぱい要りませんっ……！！！」

見れば彼が五つも六つもパツクを抱え込んでいて。ギョツとした咲月は慌てて叫んだ。ふと頭に引つかかった疑問はその拍子に頭の隅へと追いやられてしまう。

「遠慮しないでいいんだよ?」

「……朔海君。お金を払うのは私なんですよ? 忘れないで下さいね?」

「でも、実際に作るのは僕じゃないか」

呆れたように言う葉月にそう切り返した朔海は、ササッと咲月のすぐ隣へ立って口元へ手を当てコソツと耳打ちした。

「あのうね、料理の腕はサツパリだから」

「朔海君、聞こえてますよ?」

「でも事実だろ? 僕は親切のつもりで言ったんだけどね。だって……真実を知らないまま葉月の料理を口にしちゃったら」

ぶるるっ、と大げさに震える仕草をしてみせながら朔海は、

「あ、でも大丈夫だよ。ちよくちよく遊びに行っちゃ葉月の家でご飯作ってるの僕だからさ。」

自信満々の微笑みを咲月に向けた。

「……」

どう返したものと戸惑う咲月の後ろで、失礼な、とぶんすか拗すねる葉月。

「……ま、大方の材料は揃ったけど……ついでに飲み物とかも買って行ったほうがいいんじゃない? 今朝見ただけじゃお茶しか入ってなかっただろ、冷蔵庫の中。」

朔海も葉月も、周囲の主婦らに混じりながらも容姿以外の違和感がない程慣れた様子でガラガラとカートを押しながら、店内を巡り歩く。

「……結構な量になりましたね。朔海君、荷物持ち頼みますよ?」
「分かってるよ。んじゃレジ行く?」

「そうですね……ああ、そうだ咲月くん」

カートを押す朔海の後ろを歩いてきた葉月がコートのポケットの中をゴソゴソと探りながら言った。

「ああ、あった。咲月くん、悪いのですが先に車へ戻ってトランクの鍵を開けておいてくれませんか？」

財布と一緒にとり出した車のキーを咲月に渡す。

「あ……、はい」

渡されたキーを、少しホツとしながら咲月は受け取った。レジ周りは店内の何処よりも混雑していた。彼女に刺さる視線は刻一刻と確実に数を増してきている。

「じゃあ、よろしくお願いしますね」

ぺこりと軽く頭を下げてから、早足にその場を離れ、店舗の外へと急ぐ咲月。

「 やっぱり細いよなあ……」

立ち去る彼女のその後ろ姿を見送りながら、朔海がポツリと呟いた。

「そうですね……随分と肩身の狭い思いをしていたようですから……」

車に乗せた彼女の鞆の様子を頭に思い浮かべながら、葉月は言った。

「白露^{はくろ}、ありがとうな。僕の我儘を聞いてくれて……」

とびきり情けない表情をする朔海。

「こらっ、朔海君！ こちらの世界でその名を呼ぶのは止めて下さいといつも言っているでしょう？ ……彼女の事は、私にも責任がありますからね。できる限りの事はさせていただきますよ、王子」

「……ああ。……感謝する」

お返しとばかりにわざと口にした禁句にも反応を見せない彼に苦笑しながら、葉月は彼の頭をポンと軽く叩いた。

そうして待つこと、数分。会計を済ませ、店を出てきた二人を窓越しに振り返り、咲月は思った。車までそう遠くないとはいえカートに入れて持ってくればいいのに……。

飲料や調味料といった重たい水モノも結構な量を買込んだのだから、荷物はかなりの重量があるはずなのだが、彼等は大量の買い物袋で両手をふさがれながらも、それを涼しい顔で持ち歩いているのだ。さらに朔海は、車のトランクを開けるため、僅かな間ながら両手いっぱいに下げている袋を左手一本で持ち上げるという離れ業まで披露ひんげうした。

「ああ、良かった。暖房かけておいてくれたんですね」

運転席に乗り込みながら、葉月は咲月に微笑む。助手席に座る咲月は顔をほんのりと赤らめ、マフラーに顔を埋めた。

「……近頃はだいぶ日が伸びてきたと思ったけど、まだ日の入りは早いね。もう月が明るくなり始めてる」

朔海は、後部座席へと潜り込みながら、空を見上げて言った。

「ふむ。今宵の月もまた一段と美しいですね」

「咲月くんには敵いませんが……とか続けない方がいいと思っよ、葉月」

車窓を流れて行く街の景色の中、追いかけてくる月を横目に眺め、キザなセリフを吐こうとした葉月の言葉を途中で遮り、

「あのね、咲月さん。……この人ね、もういい年なのにこういうキザでサムいセリフを平気で連発するんだよ。料理をはじめ家事はまるでダメだし、朝も弱いし、言葉遣いにも突っ込みドロコ満載の男なんだから」

バックミラーに映り込む咲月の瞳を見て微笑んだ。

「すごく、いいヤツだから」

「……朔海君、そう言う貴方も十分キザだと思いますよ？」

口元を微妙に引きつらせながら、

「ねえ？」

咲月に同意を求めつつ葉月がやり返し、話を振られた彼女は視線を自分の首に巻かれたマフラーへと落とす。

「朔海君の場合、天然だから無自覚なんですよねえ……」

市道から一本入った私道の丁字路を左に折れてすぐの突き当たりで車を止め、葉月はエンジンを切る。

窓から外を窺うと、もう一本先の道の向こうはどうやら住宅街のようで、大小様々な二階建て住宅がいくつも立ち並んでいる。

が、その建物は、そんな街並みとは趣を異にしていた。都心ならば一軒家が三軒は並んでいそうな広さの敷地に建てられた、二階建ての建物。表の玄関には大きく金色の文字で『双葉外科』と書かれており、そのすぐ左隣に少し小さめに、『夜間診療専門』と白い文字で書かれていた。

「……お医者さん……、なんですか？」

「ええ、まあ……。あんまり儲かってはいないんですけどね……。道が袋小路になっているのをいいことに、車を道に停めたまま、荷物を全て朔海に押し付けて、アプローチの石畳を踏みしめ建物の裏手にある自宅側の玄関へと咲月を導いた。

「荷物は後で部屋へ運んでおきますから。……夕食の支度が整うまでシャワーでも浴びてきますか？」

脱いだ靴を揃え、コートについた砂埃を払いながら、

「ちよつと駅まで出かけて、帰りにスーパーへ寄っただけでこれですからねえ……」

玄関先にできた砂だまりを見て、彼は苦笑いをし、

「着替えてさっぱりしてから食事にしましょう。ああ、大丈夫。食事の準備は全部彼がやってくれますから」

パンパンに膨れて今にも破れそうな袋を両手にいくつも抱えて現れた朔海に、葉月は満面の笑みを向けた。

「んー？ 何の話？」

突然話を振られた彼は、問うような視線を葉月へ向ける。

「私は、咲月くんを部屋に案内して、湯殿の使い方を説明して来ますから。 朔海君、後よろしくお願いしますよ?」

「え? あ、ああ……?」

まだ話の内容をよく呑み込んでいない朔海が、曖昧な返事をする。

「え……でも……」

「今日は、強行軍だったんでしょ? …… 自覚は無くても、体は疲れているはずですよ。きちんと休養を取らないと、身体に良くないですよ?」

ためらう様子を見せた咲月に、葉月は柔らかな口調で静かに諭す。
「そうそう、それにこの寒い中ずっとあんな恰好で外を歩いてたんでしょ? ちゃんと芯から体を温めないで、風邪ひくよ?」

葉月の言葉に、朔海も同意するように頷き言った。

「 だけど葉月? あんたは用事が済んだら当然、手伝ってくれるんだよね? 料理に関しちゃ勿論僕がやるけどさ、ガス台出したり皿並べたり位はできるだろう?」

「私もシャワーを浴びて、サツパリしてから食事にしたいのがねえ……」

「埃が気になるなら、着替えてくればいいじゃないか。ちょっと駅まで行っただけだろう? 身体を冷やしたんじゃないなら、それで充分だろう?」

朔海にジロリと睨まれ、がっくりと肩を落として溜息をつく素振りを見ながら、

「 朔海君も、キッチンに立つ前に着替えた方がよさそうですね」

朔海の足元にうつすら積った砂粒を見て葉月が言う。

「朔海君。着替えはいつもの所に置いてありますから」

玄関先に並んだいくつもの袋のうち、一番軽そうな袋を右手に一つ、左手に一つ選んで手に取り、

「さあ、行きましょう　咲月くん」
複雑な表情で俯く咲月に声をかける。

「……」

戸惑う瞳で葉月を見上げ　後ろで微笑んでいる朔海に視線を移し　咲月はマフラーに顔を埋めて小さくうなずいた。

温もり

小さいながらもピカピカに磨きあげられた洗面台。この湿度の高い部屋にありながら曇り一つない鏡。そう広くない脱衣所に押し込まれた洗濯機と揃いの乾燥機も、型こそ古いが、元はかなり良い物のようだ。

……そんなつもりはないのに。つい、視線が下へと落ちる。

首元を温める白いマフラーの結び目へ手をかけ、それを解きながら、鏡の中の自分の姿にチラリと視線を向け　　ため息を漏らす。

朔海に借りたコートを脱ぎ、洗濯機の脇に置かれた棚に山積みになされたクリーニング店の色とりどりの針金ハンガーを一本抜きとり、丁寧に肩を合わせて掛け、マフラーを巻き付けるように引っかける。が、砂だらけの制服は、ブレザーもスカートもブラウスもなく適当に脱ぎ棄て脱衣籠へ雑に放り込んだ。

……無意識のうちに鏡へと向かう視線。それでも。なるべく鏡が視界に入らない様に、そそくさと風呂場のガラス戸を押し開ける。

途端、むあつと湯気が脱衣所へとなだれ込み、生ぬるい空気が咲月を包み込んだ。

水蒸気を多分に含んだ空気に混じる、濃厚なバラの香りが彼女の鼻をくすぐる。……入浴剤でも入れているのだろうか？ と、バスタブを覆うフタをパタパタ丸めて脇へ押しやり、中を覗いた咲月は思わず家主の趣味に疑いを抱いた。

長身の彼が余裕で足を延ばせる、広めのバスタブにたっぷり張られたお湯に浮かんでいるのは　　赤やピンク、淡い黄色、白色とりどりの薔薇の花　　それも、造花などではない。上品な香りを放つそれは、真正銘の薔薇の花びら。

呆気にとられる彼女の脳裏に浮かんだのは、この湯船に身を沈める家主の姿。

「……………、っ、……………」
思わず吹き出しそうになるが。だが、彼のあの容姿を思えば……画的には何ら問題はない。どころか、むしろ絵姿を描かせてくれと言いつく画家すら出てきそうな勢いで似合っている気がする。無論、彼の友人だという朔海もしかり、だ。

「むしろ、似合わないのは私の方……………、か」
大量の湯気が充満した風呂場で、それでも曇ることなくピカピカに磨かれた大きな鏡に映る自分の姿に、咲月はポツリと呟いた。滅多なことでは感情を映さない彼女の瞳が戸惑いに揺れる。嚴重に閉じ込めたはずの感情が、僅かな隙間から泡の様に浮かんでくる。

咲月は、水面へと浮上しようとする感情を打ち消そうと、蛇口をひねり、熱い位の湯を洗面器に溜め、それを豪快に頭からかぶった。顔にかかった水滴を片手で払い、チラリと脇の壁を見やる。洗剤の壁面に取り付けられた収納棚に一まとめに置かれたシャンプー類は、当然ながら全て男性用であった。

一瞬、自分で持ち込んだ石鹸とそれらとを見比べ、彼女は迷うような表情を浮かべたが、数泊考え込んだ後、洗面器に満たした湯に石鹸を潜らせた。

湯で濡らした石鹸を、掌の上ですり合わせ泡立てる。程なくミルクの香りのする泡が両の手を包み、彼女はそれを頭へ運び、指を髪に絡ませ泡を髪全体に馴染ませていく。

うなじがギリギリ隠れるくらいの短い髪は、二、三回梳いただけで泡が髪全体に行き渡る。ついでとばかりに同じ石鹸の泡で顔を洗う。

本来、ボディ用の石鹸である。再び頭から湯を被り泡を洗い流しても、髪はゴワゴワだし、肌もすべらかとは言い難い仕上がりである。

しかし、咲月はそれにはまるで構う様子も見せず、持ち込んだ手ぬぐいに石鹸を擦りつけて泡立て、ヒリつく痛みに顔をしかめながら、傷だらけ、痣だらけの痛々しい痩せた身体を白い泡で覆い隠していく。

こんな風に、過去も覆い隠し、洗い流してしまえたらいいのに。

曇ることのない鏡が映し出す真実を、あの優しい人達は何処まで知っているのだろう。もしも何も知らないでいるのなら。……知られたくは……なかった。身体に残るいくつもの傷跡も、その訳も。これまで自分の歩んできた道のりも。

とぶん、と赤や黄やピンクや白が文字通り花を添える湯船に身を沈める。

「今度は、どれ位ここにいられるのかな……」
と、いつもならあり得ない思いが閉じ込めきれずに口をついて出た。呟いた言葉に、咲月は自分で驚きを覚えた。

つい今朝がた、義父の従兄の家からあの鞆一つで放り出されてきたばかりだというのに。……いつも新しい家で思うのは、いつここから出ていけるのかと、そんなことばかりだったのに。
あれからほんの数時間のうちのいつたいいつの間こんな事を思える程の心境の変化があったのか。その、心当たりが気付きたくなくて。咲月は考えを振り切るように慌てて湯船を出る。

身体を洗うのに使って濡れた手拭いを適当に絞ったそれで、そんなに身体を拭い、そそくさと着替えを済ませて、咲月は自室へ向かった。

風呂へ入る前に、一通りの間取りは説明されていた。教えられたとおりに玄関を入れてすぐの階段を上がり、二階の廊下をまっすぐ行った突き当たりの部屋の扉を開ける。

日はとつくの昔に沈み、外は夜闇の支配の中、散らばる星々と月とが淡い光を地上へと投げかける。暗闇の中にも、うすぼんやり明るい南側の部屋。

ほのかに香るお日様と真新しい畳の青々とした香りと、ぼんやり残った暖かみ。扉の脇の壁を手さぐりで部屋の明かりのスイッチを入れれば、日中ならば日当たりは抜群に良さそうな八畳間の和室に、ぽつんとポロポロの鞆が一つ置かれていて。

後ろ手に、木製の引き戸を閉め、畳に腰を降ろす。家具のないがらんとした部屋で、咲月は鞆のファスナーを開けた。

カバンの中に入っているのは。着替えが三組、歯ブラシと歯磨き粉、コップ、箸とアナログ式目覚まし時計が一つ。それと、無造作に突っ込まれた中学の卒業証書。それが、彼女の荷物の全てだった。咲月は、荷物の中からコップと箸とを手に取り、立ち上がる。部屋の明かりを消し、一階の台所へと足を向ける。

と。

「ねえ葉月、僕は卵を『出して』って頼んだんだよ？」

朔海と葉月が押し問答する声が二階まで響いてきていた。

「な、んで、僕や彼女の分の卵まで皿に盛られているのさ？
しかも割られて！」

カウンターキッチンから身を乗り出し、朔海は憤りながらテーブルに並べられた皿を指差す。見れば皿には無残に崩れて流れたオレンジがかった黄身が、散らばる殻の欠片の下に浮かんでいる。

「ま、混ぜて溶いてしまえば分かりませんよ、きつと……」

テーブル脇でにこにここと、悪びれる様子も無く菜箸さいばしで皿の中身をかき回す葉月。

「ああっ、何てコトするんだっ！……そんなことしたらっ、ああほらっ！！崩れた黄身は誤魔化せても、卵に混じった殻の欠片がもつと小さく割れて散らばって……除けるに除けられなくなるだ

るー!!!」

見てもらえない、とばかりに朔海はキッチンからテーブルへつかつかと移動し、

「良いじゃないですか、カルシウムが効率よく摂取できて……」

「冗談じゃないよ！ 噛むたびにジャリジャリおかしな歯ごたえのあるすき焼きなんて！ 折角の肉の味が台無しになるじゃないか！」と怒鳴り付ける。

……本人達にしてみれば真剣なのだろうが、傍はたから見ればまるでコントだ。言い分は圧倒的に朔海の方が正論なのだが、それを飄々（ひょうひょう）とかわす葉月の涼しげな顔と、頬を赤らめ憤る朔海の顔とを見比べてみると、どうも朔海が葉月の掌の上で弄ばれているように見える。

「……」

下手に口を挟む事もできず、キッチンの入り口で思わず立ちすくんでいた咲月だったが、彼らのやり取りを眺めるうち、自然と口元が緩んでくる。

「それ、責任持って全部片付けるよ、葉月」

「ええー」

「……気持ち悪い反応するなよ！ カワイイ振りしたって見た目がおっさんじゃキモいだけだったのに……。なあ、今日は何かテンション変じやないか、葉月？」

紺の長袖Tシャツと、ジーンスのズボンの上から白いフリフリレースのエプロンを着けた朔海が言う。

……本来なら、突っ込むべきところなのだろう。だが、そのあまりの似合い様には何も言えなくなってしまう。

それに比べて、小豆色をした冴えない学校指定ジャージを身に着けた咲月は、何となく声をかけづらくて、その場に突っ立ったまま彼らの言い合いを眺めていた。

「もうそこはいいから、ガス台用のガスボンベを出して来てよ」
ぷりぷりしながら、朔海が葉月から器と箸とを奪い取った。
からかうような、葉月の表情。

「……っ、ぷっ、」

思わず吹き出した咲月に気付いた朔海は、

「あっ、咲月さん！」

濃い山吹色やまぶきいろをした卵に混じった大小様々な褐色の欠片を小器用に箸で掬い取りながら、開けっ放しの扉の敷居の外に立つ彼女を振り返り、笑顔を向けた。

朔海の視線が自分から外れた途端、葉月は孫を見守る祖父の様な眼差しで彼の背を見つめ、軽くため息をつきながら苦笑いを浮かべた。

「……あー、もしかして今の見てた？」

「……あ、えーと……、あの……」

お互い、微妙に視線を泳がせ、

「……あの、何か手伝いましょうか？」

おずおずと咲月が申し出た。

「んー、じゃあ卵を割って貰ってもいい？ ……葉月が割った分はホラ、この通り使い物にならないから」

苦笑を浮かべる朔海の前で、咲月は頷き、テーブル上の卵のパックに手を伸ばす。一つ、手に取り、皿の縁に軽くぶつけてヒビを入れ、風呂上りで温もり少し赤みを帯びた指をヒビから挿し入れる。そのまま真中から左右に引っ張り、中からこぼれ落ちるドロツとした白身とぷっくりした黄身を深めの器で受け止める。

「ほら見る、葉月。卵を割るってのは、こういうのを言うんだよ」
一つ、二つと割られ、きれいに並ぶ黄色の目玉を指差し朔海が言う。

「……材料の準備はもうできてる。後は鍋を火にかけるだけだ。さあ、葉月はガス台とガスボンベを早く持ってきて。それで、

咲月さん、ちょっと来てくれる？」

朔海は咲月の手を取り、台所の外へと彼女を連れ出した。

太く、短い指。霜焼けやあかぎれ、ささくれだらけでポロボロの手を、躊躇ためらいなく包み込む、白くて綺麗な手。細く長い指が暖かく、指の間に絡み合う。

朔海は彼女の手を握ったまま、彼女がついさつき通って来た廊下を突き進み階段を上り、咲月の部屋の一つ手前の扉を開けると、中へと導き入れた。

訳も分からぬまま、咲月は辺りを見回した。六畳程の洋室にシングルベッドが一台、我が物顔で陣取り、余ったスペースに押し込まれる様にタンスが大小一台ずつと、チェストが一台が置かれ、東側の壁に、申し訳程度と言つべき小さな窓が一つ。

と、突然に視界が遮られ、目の前が白く染まった。

何事かと驚く咲月の頭上に柔らかなタオルが降って来た。それをその状況を、理解するかしないかのうちに、十本の指ががっしりと彼女の頭をタオル越しに鷲掴んだ。あの、華奢な指とは思えない力強さでガシガシと彼女の髪を滴る水気をタオルに吸わせていく。「ダメじゃないか、こんないい加減な乾かし方のままフラフラしちゃあ……」

ガシガシ力任せに手を動かす彼の様子は、一見乱暴に見える程。しかし、指先の動きは丁寧で、痛みを感じるようなことは全くなかった。どころか、ツボを心得てでもいるのか、結構気持ち良い。

「部屋の中は暖房利いてるけど、そんなんじゃ風邪引くよ？」
あらかた水気を吸ったタオルをどけ、

「ほら、ここ座って」
ベッドを指差す。腰の高さほどのチェストの上に置かれた籠の中から、くしとドライヤーを手にして、

「ああー……、折角元は綺麗な髪なのに……。いったい何を使って

洗ったの？」

咲月の肩を押し、彼女を半ば強制的にベッドに腰かけさせる。朔海はその前に立ち、ドライヤーのスイッチを入れた。

熱い風が、短い黒髪をなびかせる。風に揺らめく髪にくしを入れ、傷んだ髪の本一本を繊細な手つきで梳すき梳とかしていく。

優しく頭皮に触れる風に、咲月は身体を強張らせ下を向いた。

その表情は真っ赤に染まり、目は過度な潤みを帯びていた。

「はい、できた」

ドライヤー三分、アフターケアに五分。丁寧に梳くしられた髪は、ちつともサラサラ感の無かったついきに比べ、髪質こそ変わらな
いが、それでも随分指通りが良くなっている。

「さっ、じゃあ夕飯にしよう。さすがにもうカセットコンロの準備も整った頃だろうし」

ポン、と肩を軽く叩き、朔海は固まる咲月の手を取る。

「今日は君の歓迎会だ。遠慮せずにガッツリ食べろよ」

賑やかな夜

「ああ、朔海君。どこへ行っていたんです？ ……せっかくコンロをセツトしたのに……」

咲月の手を引いたまま台所へと戻った朔海に、葉月が声をかけた。「ん、ああ……まあちよつとな。さあ、じゃあ葉月、火を点けてくれよ 中火でな。今鍋を持つてくるから」

キッチンのコンロに乗せられた、平たく、底の浅いすき焼き用の鍋をピンクのミトンをはめた両手で持ち上げ、

「鍋、熱いから気を付けて」

湯気が上がり、食欲をそそる香りが鼻をくすぐる。煮汁はグツグツ煮立ち、ネギや肉が良い色に仕上がったそれを、青い炎が点々と円を描くコンロの上に乗せる。

「やあ、美味しそうですねえ」

「……葉月。これ、新しい卵」

見事な片手割りを披露し、朔海は新しい皿を葉月に手渡す。

「おや、いいんですか？」

「……ホントは良くないんだけどね。卵三つも無駄にしてもったいないし……。でも、お祝いの席で一人つままないのも楽しくないだろ？」

朔海は、炊飯器をテーブルへ運びながら言った。

「咲月さん、お茶碗貸して？」

炊飯器をテーブルに置き、蓋を開ける。たちまち白い湯気が立ちのぼり、炊き立てご飯の香りがすき焼きの匂いと相まって皆の胃袋を刺激した。

「……テーブルには茶碗と箸が三人分、すでに並べられていた。白磁はくじに青い花柄が描かれた、深めの大きな茶碗と。

紺に白色で描かれた矢絰やがすりもよつ模様の、まるで井を小さくしたような形の茶碗と。

そしてもう一つ。他の二つと比べればやや小ぶりながら、白磁にピントの花柄のラインが細かく丁寧に描かれた茶碗と。

そして箸も、三組。

赤みを帯びた深い色合いの木製箸と。

黒地に金箔で花が描かれた、少し長めの箸と。

そして、自然な木目調の表面に何匹もの白ウサギが踊る、かわいらしい箸と。

どれに手を伸ばすべきか、戸惑う様に咲月の手が宙を彷徨った。

見るに、ピンクの花柄の茶碗と、白ウサギの箸とが自分に与えられた物なのだろう事は理解したものの、それをまず先に手に取る等、咲月にとっては絶対にありえない行為だった。

故に、咲月の手は手前に置かれた青い花柄の茶碗と矢絰模様の茶碗との上を所在なげに彷徨う。

果たして、自分に声をかけた朔海の茶碗を先に取るべきか　はたまた、ここはやはり家の主である葉月の茶碗から、というのが無難だろうか？

だが、見た目だけではどちらがどちらの物なのか等、分かるはずもない。

重たく、張り詰めていく空気を背に感じながら、咲月は必死にどう行動すべきかをその中から読み取るうと必死に頭を回転させる。

きつと。普通の人なら、こんな事にいちいちここまでの気など回さないのだろう。

適当に手前の茶碗を取って渡せばそれでいいじゃないか、と、軽く言い捨てるのだろう。

でも。……咲月は、知っていた。

ほんの些細なミスで、あつという間に壊れて行くもろい絆を。

本当に　ほんの少しだけ、気を抜いた隙に　空気を読み違え

てしまった。それだけで、急激に冷えて行く希薄な繋がり。

優しい人達だからこそ。珍しく、長居をしたいと思えた場所だからこそ。間違える訳にはいかなかったから。

……そんな風に固まる咲月の背に、朔海はかける言葉に詰まる。

もどかしげな表情をする彼に苦笑を深めながら、代わりに声をかけたのは葉月だった。

「ああ、それなんですがね。……見ての通りうちは男所帯でして女の子に使ってもらえるような物など今まであつたためしなかったもので……、ね。昨日、ちょっと隣の百貨店まで足をのばして買って来たんですが」

彼の助け船に、朔海は一瞬ホツとした表情を浮かべたが　葉月のその言葉にハツと我に返り顔を上げた。

「え、何それ、初耳。」

釜の飯をしゃもじで返し、かき混ぜ、ふっくらさせて。

「……はあ、葉月を一人で行かせたのは失敗だったかもね。まあ、この茶碗と箸は合格だけどね、……何を買ってきたのかまだ聞いてないけど……何か変なものを買い込んでたり、逆に必需品をすっかり買い忘れたりしてないか、すんごく心配」

ほんの少し、悔しげな表情で憎まれ口を叩く朔海に、葉月は自分の茶碗を渡しながら、からかうようにわざとらしいため息をついた。

「朔海君がだんだん口の悪い意地悪なお姑さんに見えてきました……」

「葉月っ！　変なこと言ってないで茶碗を貸せ！　……ああ、葉月のじゃないよ、咲月さんの。今日の主賓は彼女なんだからさ」

ジャージのポケットに入れたきりだった、落書きだらけの携帯用の箸箱が、中の箸と触れ合い、カチャリと小さな音を立てる。

葉月は、手にした矢絰模様の茶碗を置き、手前に置かれた咲月の茶碗を取り朔海に渡す。受け取った朔海は、手慣れた様子でほ

かほかのご飯をふんわりこんもりよせい、

「取りあえず、こんなもんでいい？」

碗を少し傾け、咲月に中身を見せながら尋ねた。

「えっ、あ……、はい……」

「じゃあ、はいこれ。遠慮しないでどんどんおかわりしてよね。

まだまだあるから。」

咲月に茶碗を渡し、手元に置かれた葉月の茶碗を手取る。

「葉月は……こんなもんでいい？」

「いえ、もう少し貰えますか？」

「ん、こんなもん？」

「ああ、はい。ありがとうございます」

最後に、青い花柄の自分の茶碗に手を伸ばし、山盛りによせい入
れ、

「さあ、食べよう。冷めないうちにさ。葉月、飲み物とつて。乾杯
しよう」

咲月にはオレンジジュース、朔海はストレートティー、葉月は緑茶
を、それぞれグラスに注ぎ、

「葉月、音頭を取つてよ」

朔海が言った。

それを受け、葉月はコホンと一つわざとらしい咳払いをしてから、

「では。我が家に新しく、咲月くんという素晴らしい家族がで
きた事をお祝いして……、乾杯」

と、厳かに述べ、続けて朔海が、

「カンパニー！」

高々とコップを掲げる。二人の視線を受け、咲月もおずおずと自分
のコップを差し出す。

「……あ、えー、……と。……か、かんぱ、……い……」

差し出されたコップに、葉月と朔海とがそれぞれ自分のコップを僅
かに触れ合わせる。

カラン、と。ガラスとガラスの奏でる楽しげな音色と一緒に

グラスを傾け、中身のドリンクを一口、口に含み、味わいながら飲み込む。

差し出したコップに伝わる確かな触れ合いの手ごたえ。

……こうして、人と食卓を囲むなんて、いったいいつ以来だっただろう？

良く冷えたオレンジジュースに口をつけながら、グツグツと旨そうに煮える鍋を見る。

「うん、もう食べ頃だよ。あんまり置いとくと肉が硬くなるから。どんどん食べよう」

「そうですね。咲月くん、お先にどうぞ」

隣に座った葉月がお玉と菜箸とを咲月へ差し出し、

「肉も野菜もまだまだ沢山あるから。好きなものを好きなだけ取っていいからね。遠慮は一切無用だから」

向かいに座る朔海が笑みを浮かべて言った。

「……そ、それじゃあ」

……二人とも、にこにこ微笑んでいるはずなのに。口調も物腰も柔らかなのに。……何故だろう、有無を言わせぬ雰囲気は漂う。

それでも、いきなり鍋の真ん中をつついて大ぶりの肉を取る勇氣はなく、鍋の端の肉の切れ端を、シイタケや豆腐と一緒に摘まむ

が……殆ど切れっ端みたいなのをわざわざ選んだつもりだったのに、ほとんど千切れかけた脂身で繋がったかなり大きな肉片がずると、引きずられて一緒にくっついてきた。

豆腐やシイタケやネギや白滝やらの下に沈んでいた肉を引きずり出したことで、鍋の中身が荒らされ、なんだか随分欲張ったみたいなの事になり、咲月は無意識に口の端を引きつらせた。……背中には、冷たい汗が伝う。

まさか今さら鍋に戻すわけにもいかず、ドキドキしながら、卵を溶いた取り皿に盛り、恐る恐る顔をあげて二人を見る。

温かな笑みが消え、冷めた視線が突き刺さる。そんな風景を覚

悟した咲月の目に映ったのは……輝度を増した二人の笑顔で。その瞳は、むしろ嬉しげな感情を映していた。

水菜、シイタケ、ネギ、白滝……。器を満たすまで鍋をつつく。器が満ちるごとに、彼らの表情は曇るところか、さらに笑顔に深みが増していく。

「あ……、あの、次どうぞ」

もしもの恐怖に震える心に、戸惑いを覚えながら咲月は、隣に座る葉月に箸を渡す。

「ねえ、咲月さん。明日は何か予定はある？」

葉月が鍋をつつくの眺めながら朔海が尋ねる。

「もし、特に予定がないのなら、街へ買い物へ行かない？ ご近所の案内も兼ねてさ」

「あ……、でも私、今手持ちがあんまりなくて……。なるべく早く仕事を見つけたつもりではいるんですけど……」

シイタケをかじりながら、咲月は気まずげに目を泳がせた。

「ああ、バイト探してるの？ だったら大丈夫、いい仕事があるよ。ね、葉月？」

しかし朔海は、チラリと向かいに座る葉月に目配せし、にっこり笑って言った。

「咲月さんも見たでしょう、さっきのタマゴの惨状をさ。……でもね、あんなのはまだかわいい方だね。本当に、家事全般まるでダメなんだよ、この人」

やれやれと、大げさに困った仕草をして見せながら、

「今までは僕が無償で色々フォローしてきたんだけどね。……もし良かったら、この家の家事を手伝ったらいいよ。もちろん、無償じゃなく、ちゃんと葉月に給金をもらってさ」
と、葉月に話を振った。

「……そうですね、それは良い考えかもしれませんが。ただ小遣いを渡すより、咲月くん自身も気兼ねしなくて済みそうですね」

「どうです？ と、葉月に瞳で問われ、

「はい、……お願いします」

特に断る理由もない咲月は軽く頭を下げた。

「それでは咲月くん、明日からよろしくお願いしますね」

「はい……」

丁寧な頭を下げられた咲月は、こそばゆい気分になりながら、自然と緩んでくる表情のままに答えた。

「では、明日の買い物はそのための必要経費として勘定致しますから。必要なものは必要だと言って下さいね？」

「そうそう。まずは上着だろ、……まだしばらくは肌寒い日も続くだろうし。あとは身の回り品の細々したものだよね。シャンプー類とか」

ちろりと葉月へ半眼の視線を向ける。

「あつ！ しまった……忘れてました……。ああ、何か忘れていたような気がしてたんですが……」

その、彼の指摘に葉月が渋い顔をした。

「……まあ、葉月にそういう気配りは期待してなかったけどさ。」

ため息をつく朔海に、

「いえっ、石鹸は持ってきてるんで！」

咲月が慌ててとりなした。が、

「ああ、それで髪も洗っちゃったの？ もしかしていつもそれで洗ってる？ ダメだよー、ちゃんとシャンプー使わなきゃ……髪が傷んじゃうよ？」

朔海は真剣な表情で諭すように言と、むむ、と、宙をにらみながら明日の買い物、本人である咲月より余程真剣に一つ、一つ、指折り数えながら挙げていく。

その前で、どこから取り出したのか、葉月がいつの間にかメモ帳をスタンバイさせて朔海の挙げる品々を漏らさず、さらさらと書き出していく。

「さあ、欲しい物を早く言わないと……、あなたの私物が全ての彼の趣味で揃えられてしまいますよ?」

「う……」

これまで、欲求という感情ものの類に関しては、我慢するのが当たり前で。そんなものは存在するだけで、心を辛く苦しくさせるだけのものだった。

……そんな彼女にとって、それはとても難しい要求だった。

気持ちを殺し、想いを誤魔化して。……それを日常としてこれまで生きてきた。そうでなければ、とつくに心が壊れてしまっていただろう。……まあ、すでに亀裂はいくつも刻まれているけれど。その、心に刻まれた傷口を撫ぜる様な問い。だが、その痛みも今はくすぐりたい。

「あの……、コタツ……とか……」

「え? ……コタツ?」

返ってきた予想外の答えに朔海がオウム返しに聞き返した。

「あつ、……いえ、ちよつと言ってみただけなので……。あの、……ごめんなさい。やっぱり今のナシで……」

咲月は赤面して両手を振り、前言撤回を申し出た。

「え、何で?」

「ええ、構いませんよ。コタツですね?一応、寝具だけは用意して押入れに入れておきましたが、他に何が要り様か分からなかったので、部屋の家具も何も用意しなかったんです。机とか、タンスとか 必要でしょうか?」

不思議そうに目をパチクリさせる朔海に、葉月が隣で頷いた。

「布団、買ったの? 葉月が? ……ううん、なんかちよつと心配だなあ。でも……そうだね、いいんだけどさ。何でコタツなのか ちよつと訊いてもいい?」

「あ、はい。その……ずっと、憧れてたんです」

「コタツに?」

首をかしげる朔海に、咲月は笑って答えた。

「……コタツそのものに、ではなくて、コタツが作る温かな時間に……憧れていたんです。一つのコタツに集まってくる人たちに……いわゆる家族団らん、みたいな空気に……」
何かを誤魔化すように笑いながら、

「だから別にコタツでなくても構わないんです。例えば鍋とか焼肉セツトとか……何かのゲームとか。本当に、何だっというんです、この際、雀卓じゃんたくだつて。……でも、貰ったお部屋が豊じやんたくだったから……
っい」

何か言い訳でもするような咲月をよそに、

「よし、葉月。買い物リストにトランプとUNO追加！」

朔海が葉月に指示を出す。

「はいはい、トランプにうの、ですね？」

すらすらとペンを滑らせて、リストにそれらを書き出してゆく。

と、途中で手を止め

「……ところで朔海君、“うの”って何ですか？」

尋ねた葉月に朔海が答える。

「カードゲームの名前だよ。……なんでこっちで暮らす葉月が知らないんだ？」

「と言っか朔海君、誰とやったんです？ そんなゲームを」

「ん、ああ……テレビゲームでちよつとな。何かそういうソフトがあつたんだよ、コンピューターとでも対戦できるやつが。」

そんな彼らの会話に、スーパーでも気になつた疑問が再び咲月の脳裏に甦る。

「……あの、もしかして、外国の方……なんですか？」

遠慮がちに尋ねた咲月の問いに、日本人離れた容姿の美形二人はほんの一瞬、僅かながらに、不自然にピクリと固まった。

……が、すぐに誤魔化すように、

「え……ま、まあ似たようなもん……かな？ 一応……」

と、目を宙に泳がせた朔海が答えた。

明らかに何か隠している風な答えに、当然不審を抱いた咲月だったがそれ以上踏み込んで尋ねる事はしなかった。

「あの、葉月……さん……、食べ物が好き嫌いとかは……？ その、今後の参考にしたいので……」
当たり前障りのない話題。

誰にだって、聞かれたくない事はある。それを我が身にいくつも抱える咲月はその事を誰よりも良く知っていた。

自分に良くしてくれる、親切な良い人達。そもそも他人である自分に十分、良くしてくれているのだ。いきなり生活圏に飛び込んできた相手には話せない事等ざらにあるだろう。当たり前のことだ。

だから、咲月は深く追求もせずあっさり話題を変え　咲月はその場を流した。彼らの重大な秘密を知ることのないまま　。一方の二人はホッと胸をなでおろした。

運命（ものがたり）の始まり

「 困りましたね……」

はあ、と一つ大きなため息をついて、男は言った。

「でも、放つとく訳にはいかないだろ？」

他に誰もいない、閑散とした道。一本隣の大通りは様々な商店が軒を連ねる繁華街で、大いに賑わい込み合っているのだが、その店の裏口が並ぶ狭い“通路”と呼ぶべきである通りは、あちらの喧騒けんそうが建物に遮られて随分静かなものであった。

そうでなければ、気付けなかつただろう。

いくつも空の段ボールが無造作に積み上げられた中の一つから、赤ん坊の声がするなど……。それもまだ、生まれて間もない本当について数刻前に生まれたばかりと察せられる赤ん坊がぐずって出した弱々しい泣き声など。

「王子。……この子はおそらく人間の子供です。こんな場所にいるなど、到底普通ではありえない。そんな厄介と分かりきったものに、貴方を関わらせるなど出来ません」

「……王子って言うなよ、白露。それに、僕がどうなったところであいつらは何とも思わないさ。でも、僕にはこの子を見捨てていくなんて出来ないよ」

「王子、それはとうに捨てた名です。こちら側でも、できれば向こうと同じに呼んで貰えるとありがたいんですけどね。」

白っぽい長めのコートに瘦すく躯を包んだ男が、微妙に顔をしかめて連れの少年に言った。

「……まあ、そうおっしゃるだろう事は予想してましたけどね。

ですが王子、ではこの子をどうするつもりでおられますか？」

「え？」

「 貴方の屋敷に連れ帰りますか？ 人間の赤ん坊を、貴方が

一人で育てられますか？」

「……う」

男の問いに、少年は答えを詰まらせた。

人気のない通りを、ザアツと生温いのに酷く冷たい風が吹き抜ける。風が男のコートを弄び、裾すそが煽あおられ翻ひるがえる。

だが、二人は大して寒そうな素振りそぶりも見せない。対して、ビクツと身体を強張らせ僅かに息を詰まらせた赤ん坊を前に、彼等は問答を続けた。

「確かに、我々がこのまま見て見ぬふりを決め込めば、この子供はほぼ間違いなくじきに死んでしまうでしょう。……さすがにそれは寝覚めが悪い。ですが、我々はこの子を育てるのに相応ふさわしいとは言えません。そうでしょうか？」

「……でもつ、それじゃあ！」

「王子、……今日の所はもうお帰り下さい。この子は、私が責任を持ってあちらへ連れ帰り、然しかるべき場所へ連れていきましょう。」

男は逸はやる少年を諭しながら、上着を脱ぐと、ボロ布を簡単に巻きつけられただけの赤ん坊をコートで包み、丁寧に抱き上げた。

「……然るべき、場所つて？」

「児童福祉施設です。親を亡くしたり、その他様々な理由で親元で暮らせなくなった子供たちを預かり、育ててくれる場所です。」

大丈夫ですよ。人間たちの作ったシステムです。私達が育てるよ、よほど上手く育ててくれるでしょう」

まだ首の据わらない、目も開かない赤ん坊を慣れた手つきで抱え、男は言った。その彼の言葉に納得はしたものの、名残惜しそうな表情を浮かべる少年に、男は苦笑を浮かべた。

「まあ、とは言え。このまま名無しのままでは可哀想ですね。王子、彼女に名前を付けてあげたらどうです？ 記憶には残らなくても 貴方は確かに彼女の命の恩人なのですから」

「王子って言うなって言ってるだろ、葉月。……ていうか、何で彼女だつて判るんだ？」

「今さっき、確認しましたから」

悪びれもせず男はぴらりと巻きつけた布を緩めてはだけて見せる。「うわっ、わっ、何してんだよ！ 赤ん坊とはいえ女の子なんだから！？ いきなりそんな！」

少年は慌てて叫び、赤面する。

「……相変わらず、初心ウツと言うか何とというか。まあ、良く言えば紳士なんでしょうけどねえ。でも、いざという時はむしろ甲斐性なしって言われちゃいますよ？」

そんな彼の反応に、男は更に苦笑を深めた。

「僕が役立たずの甲斐性なしだつて事くらい、皆もう知ってるじゃないか。今さらだろ？」

少年は苦虫をかみつぶしたような表情で反論する。

「咲月。月が咲くって書いて、咲月」

少年は、空を見上げて呟いた。

墨で塗りつぶしたような漆黒の闇夜に浮かぶ、金色こんじきに輝くまん丸の月。

「咲月。とても綺麗な、良い名前ですね」

「そう、僕とは正反対の名前だ。きっと……きっと、幸せになれるように」

「……朔海君」

目を伏せ俯きながらも、優しい眼差しを赤ん坊に向ける少年に、男は彼の名を呼んだ。

「大丈夫だよ、葉月。……分かってる。今の暮らしはまあ……悪くないし。あっちも百年近く音沙汰ないし。僕は……大丈夫だよ」
はくちっ、と小さなくしゃみが葉月の腕の中から聞こえた。

風は、ひっきりなしに吹き抜けていく。生まれたばかりの赤ん坊には相当堪えるのだらう、身を小さく固まらせている。

「おっと、そろそろ行かないといけませんね。いつまでもこんな所で立ち話をしては風邪を引かせてしまいます。まだ生まれたばかりで抵抗力も弱い子どもに風邪など引かれたら命にかかわるかも知れない」

男の台詞に少年が頷いた。

「ああ……そうだな。頼むぞ、葉月」

「では」

言うが早いか、葉月の身体を淡い金色の光が包み込む。と、次の瞬間、ゴツと風が唸り小規模なつむじ風が彼を取り巻くように渦を巻く。

「ああ」

朔海が、彼にかけた返事が終わるか終わらないかという間際、風が弾け、彼の前髪を突風が乱した。咄嗟とつさに舞い上がった砂埃から目を庇う様に翳あざした手を退ける頃には、人気のない道の何処にも、赤ん坊を抱いた男の姿は無かった。

ふう、と小さくため息をつき、朔海はクルリと体の向きを百八十度回転させた。一步、二歩、三歩。誰の姿も無い通りに靴音を響かせ歩く。

歩きながら、バサリと音をたてて背に羽根を生やした。まるで、巨大な蝙蝠コウモリを背負っているかのような羽を。

ふわりと、足が地面を離れて宙へと浮く。羽根を羽ばたかせ、空へと舞い上がり

ピピピピ……

耳元で鳴る、電子音アラーム。

「う……」

今の今まで体感していた雰囲気をぶち壊す、無機質なアラーム音に、朔海は目を開けた。

寝返りを打ち、時計に手を伸ばす。

朝の六時ちょうど。

アラームを止めて起き上がり、あくびをかみ殺しつつ思い切り背伸びをする。

「ああ、そうだ……今日は」

夢の世界から、現実の世界へと頭をシフトさせ、徐々に昨日までの記憶が蘇ってくる。

「どおりで、あんな夢を見る訳だ」

ペタペタと、板張りの廊下にスリッパの音の響かせ、洗面所へ向かう。鏡に映った、起抜けのだらしない自分の姿。ササッと手早く顔を洗い、歯を磨き、髪を整える。

「さて、行こうか」

誰に言うでもなく、朔海は呟き　文字通り、屋敷を飛び出す。

そう、今日は。

「……やあ、朔海君。随分と早いですねえ」

いつもなら、まだまだ安らかな眠りを楽しんでいたであろう所へ訪ねてきた“友人”である朔海に、葉月は不機嫌を隠そうともせず皮肉った。

「確かにね、今日は隣町まで出かけるつもりでしたよ？　ですけ

どね、ほとんどの商店は、十時にならねば開かない物なのです。百貨店に至っては、十一時まで開かない所もあるのですよ？　こんな朝っぱらから早出しなければならぬような場所ではありません。」

キッチンに立ち、朝食の用意をする咲月の前で、二人は食卓に向かい合わせに座る。

「昨夜は休診でしたから、まだ良かったもの……。いつもなら、私はこれから睡眠時間を戴くのです。朔海君も、ご存じでしょう？」

刺々（とげとげ）しい口調で朔海をつつく葉月は、まだ眠そうなあくびを繰り返している。

「あの、朝ごはん出来たんですけど……、葉月さん……どうしますか？ もしお休みになるなら、ラップして置いておきますけど」

盆に、朝食を乗せた皿を並べた咲月が尋ねた。

「あ、美味しそう。豆腐と油揚げの味噌汁に出し巻き卵……。ああ、ちゃんと和食にしてくれたんだね、朝食」

昨夜、朝食は和食派なのと言った葉月のリクエスト通り、鮭の塩焼きをメインとした、れっきとした純和風の朝食が、食卓に並ぶ。

「あの、すいません。冷蔵庫の食材、勝手に使っちゃって……」

「いえ、構いませんよ。好きに使って下さい。後で給料分とは別に、食費も含めての生活費を渡しますから、材料費ですとか、他に必要な物に使って下さい。やりくりで余った分は、そのまま小遣いにして構いませんから」

葉月の言葉に、咲月はえっと目を丸くした。つまりそれは咲月にこの家の財布を握らせるも同然なのではないだろうか？ もち

ろん、それが収入の全額ではないのだろうが……それでも、日々の生活費というのは月々の収入の中からの支出分の割合としてはかなりの率を占めるはずだ。

「そうですね……、取りあえず月十万ほどお預けしますので、よろしく願いますね」

そんな彼女をよそにさらりと言われた金額に、咲月は更に驚いた。……確かに、二人分の生活費に加え、ちよくちよく訪れる朔海分の食費などを合わせて考えれば、生活費としてはほぼ妥当な金額ではあると思う。

だが、これまで十万などと言う どころか万単位の金など、とんと縁のなかつた咲月にとっては、未知の金額だった。

「明日からのお金は、後でその戸棚の引き出しに封筒にでも入れて、置いておきますから。必要な時に、必要な分だけ抜いて使って下さいね。今日は貴女の身の回り品を揃えてしまいましたよね。」
「おいおい、戸棚の引き出しって……。不用心が過ぎないか？泥棒とか入ったらどうすんだよ」

突っ込む朔海に、葉月は意味ありげな笑みを返した。

「大丈夫ですよ。それなりに“気を使って”ますから」

「……なら、いいけどさ」

チラリと、戸棚を見やった朔海は納得したように一人頷いた。

「そうだ、朔海くん。昨日渡しそびれたアレ、いつもの所に入ってますから、後で持って行って下さい」

「ああ、助かる」

裏に含みのある会話にも、咲月は特に興味を示さずテキパキと朝食の準備を整える。皿を並べ、炊けたご飯を茶碗によそう。

ホカホカと湯気の立つ、温かな朝食。

「……やはり、こういった献立は新鮮な感じがしますね」

目の前に並べられた皿を眺めながら葉月が言う。

「冷めてしまう前に、いただきますしよう」

「そうだね、じゃあさっそく」

いただきます、と、行儀よく手を合わせて、二人は箸を手に取りました。

「あ、卵は出し巻きなんだね」

「……久しぶりですね、出し巻き卵。朔海君の作る甘い卵焼きも悪くないのですが」

「まあ、葉月の好みからしたらこっちの方が好きそうだよね。うん、美味しい」

惜しげもない賞賛を浴びながら、咲月は少し居心地悪そうな表情をしつつも、自分の朝食に箸をつけた。

今までも、預けられた先で食事当番を任された事は何度もあった。けれど、こんな風に面と向って「美味しい」と褒められた事はなかったから。

朝食を口に運びながら咲月は、その幸福をしっかりと噛みしめじつくり味わう。甘く、とろけそうな、その幸せを。

始まったばかりの幸せを、失くしてしまわないように。

湧き出すもの

葉月の運転する車に揺られる事約一時間半程。春休み中の土日とあって、郊外型の大型のショッピングモールは大いに賑わっていた。建物の屋上のほか、建物の周囲に広がる広大な駐車スペースに、色も形も大きさもまちまちな車がずらずらと並べて停めてある。

早めに出てきた甲斐あって、運よく屋上駐車場に入れた咲月達は、さっそくショッピングへと繰り出した。

駐車場を抜け店舗入り口の自動ドアを潜り、エレベーターを待ちがてら、脇に設置されたパンフレットを三部抜き取った朔海が、葉月と咲月とに一部ずつ渡しながら自分の分のパンフレットを開いた。「へえ、凄いねえ、これ。昔のデパートなんか目じゃないじゃん。全部の用がここで済んじゃうよ。」

細かな文字で綴られた百以上の店舗名を斜め読みした朔海は感心したように言った。

「大半は服屋と食べ物屋らしいけど、家具屋や書店も入ってるみたいだね。あ、電気屋もあるんだ、え、ペットショップも入ってるの？」

「まずは、家具など大きなものを先に買ってしましましょう。あいつた物なら、持ち帰らずとも後で宅急便などで送ってもらえますからね。その後でお昼を食べて、小物など見に行つて、最後に夕飯の買い物をして帰りましょう」

自分の分のパンフレットをサブバックにしまい込み、後ろから朔海のパンフレットを覗きこみながら、葉月が言う。

「ああ、そうだね。荷物ぶら下げたままうろろするのも面倒くさいし。でもさ、食べるところだけでも結構いろいろあるよ、これ？ どうする？ 何食べる？」

「……朔海君、さっき朝ごはん食べて出てきたばかりでしょう？」

何も今決めなくとも、そんなの後で考えればいいじゃないですか」
五基並んだエレベーターの、一番右端の扉脇のランプが点滅し、
直後静かに扉が開いた。

まだ開店したばかりのせいか、降りる客はなく、ガラガラのエレベーターに悠々と足を踏み入れた。

「ん、とすると……、家具売り場は　ああ、三階の端だな。今乗ったエレベーターがここだろ？　ううん、結構歩くなあ」

階数表示が一つ減って五階を示し、チンと小さな音とともに下降が止まる。扉が開き、どどと人がなだれ込んできた。朔海は慌ててパンフレットを畳むと、壁際に寄った。壁に手をつき、確保したスペースに咲月を庇う。

その一連の動作は、あまりに自然すぎて　。咲月が、慣れない扱いに戸惑う暇も無く、人混み押しつぶされるといふ事態から当然のように庇われていた。

香水、^{コロン}だろうか。ふわりと甘いシナモン似た香りが彼の身に着けた衣服から香ってくる。

田舎とはいえ、この近辺では一番大きなショッピングモールである。乗り込んできた家族連れや十代、二十代くらいの女性客達は皆それぞれめかし込んできている。昨日のように、靴はつつかけ、部屋着に上着を羽織っただけ、エプロンも着けたまま　の、近所の奥さん方で賑わうスーパ―とは訳が違う。

にもかかわらず、やはり彼等は目立っていた。

身だしなみには気を遣っても、ファッションに気を遣っているわけではない。……例え、趣味の良い紺のハイネックTシャツに白のパーカージャケット、紺のデニムパンツがどれだけ似合っているように、本人にその意識は無いのだから。

だが、そのルックスと合わせて見れば、周囲の視線を集めるには

十分すぎた。

量産品・安物のだぶだぶパーカーにスウェットパンツといった出で立ちの自分が、悲しくなる程に。

そう思うと、突然心もとないような気分になってくる。ここに居てはいけない様な……。

今までだって、そんな気分になった事はあった。と言うよりむしろ、そう思わない事の方が珍しかった位だ。

だってそもそもが、自分の存在自体が邪魔だったのだから。

居て、欲しくない、……と。

そう思われるのがもう、当たり前前に思えていたから。

何時崩れるかも分からない不安定な居場所でも必死に心のバランスを取りながら、それでもいつしか慣れて当たり前になってしまえばもう、“喉元過ぎれば熱さ忘れる”と言うのが正に、感覚がマヒしてきて、一々気に留めなくなっていただけなのだ。

記憶にある中では初めて安定した居場所を見つけて。今までずっと無意識・意識的問わず麻痺させていた感情が次から次へと湧き出てくる。

こぼこぼ湧き出す感情は、小さく浅い咲月の器には到底収まりきらない。発育不十分なキャパシティを越えた分の感情が器から溢れ出し、とめどなく流れては、咲月の心を揺るがし不安な気分になせるのだ。

エレベーターは四階を停まらず通過。階数表示が四から三へと変わったところで、チン、とまた音がして扉が開く。

「すみません、降ります」

人混みの向こうで、葉月の声が聞こえた。

「咲月さん、僕らも行こう」

先に降りた葉月が、エレベーターの戸袋に軽く手を添え扉を押さえている。朔海が先に立ち人混みをかき分けてくれるおかげで、咲

月は込み合ったエレベーターを難なく降りる事が出来た。

と、ここまでの駐車場階とは違い、賑やかなBGMの流れる広くて明るい空間がそこには広がっていた。

ホールのすぐ前にあるエスカレーターホールは吹き抜けになっていて、下をのぞくと一階にある店舗まで良く見えた。 > i 2703
— 425 <

葉月は、ホールに設置された案内板に目を落とした。左右に細長いフロアーのちょうど中央付近に赤く矢印があり、現在地と書かれている。

矢印の脇に人差し指を置き、葉月はツツと指を左の方へと流した。フロアーにはちょうどこのこと同じような吹き抜けのエスカレーターホールがあと四つあり、一つはここから右に行った所であり、残りは左にある。ほぼ等間隔に並んだそのの、一番左端のホールを過ぎたところで指が止まる。

「なるほど、本当に端ですね……」

葉月は顔を上げ、目的の店舗があるはずの方を見やるが、多くの人が行きかう通路に溢れる人影に邪魔されて、長身の彼でも向こうの端までは見通せなかった。

「まあ、仕方ないさ。とにかく行こう、ここでこうしても始まらないし。それにほら、あの店の前に飾ってあるコート。咲月さんに似合いそうじゃない？」

カジユアル系ブランドの店の前に居るマネキンが着ている服を指差し、朔海が言った。

咲月がそちらを見ると、そこにあっただのはコートと言うよりはおそらくカーディガンの部類に入るのであろう、毛糸で編まれた長めの白い上着だった。

なるほど、これならば春先でも問題なく着られるだろう。マネキンの後ろには、色や細部のデザインの違う服が何着か掛っている。

「あ、これ。こういう色のが似合うかな？」

朔海がウキウキしながら真っ赤な色のそれを手に取った。

女性の、こういう買った買物に付き合わされてウンザリする男性の図、というのは割と良くある光景だが。

意気揚々と品定めする男性の隣で、戸惑う女性の図、と言うのはかなり珍しい光景な気がする。

ちなみに、咲月はこんなブランド系のショップで服を買ったことなどなかった。むしろ、着る服を特に選んだことすらなかった。咲月が服を買ったとしたら、もっぱらスーパーのセールやバーゲン品で服を買う時に気にすることと言えば値段とサイズと洗濯表示のみという、十代の少女らしからぬ基準。

勧められて受け取った服に付いた表示を、つい癖でぺらりとめくって見れば

「さ、¥35,000!？」

表示された値段の額に、思わず目を見張った。こんな値段の服など、手に取ったことすらない。どんなに高くてもせいぜい五千円位までの服しか知らなかった咲月は、怖くなって慌てて商品を戻した。そんな彼女の反応に、少しマズかったかもしれないと表情を僅かに曇らせ焦る朔海を後ろから眺めていた葉月が、やれやれといった表情をしながら助け船を出す。

「朔海君、それもいいですが、今日は先に家具を見ようと今言っただけでしょう?」

「あ……やあ……ごめん。こういう買い物って久々でさ、なんかつい浮かれちゃった……。」

苦笑いしながら誤魔化すように頭をかいて、朔海は商品を戻した。

「ごめんね、咲月さん」

明るく笑いながら謝る。

「確かに、こう色々並んでいると目移りしてしまう気持ちも分からないではありませんが。昨日は臨時休業にしてみました。今日は通常診療ですから……。そう急^せく必要はありませんが、あまり

長居もしていられませんからね。早めに用事を済ませてしまわないと、食事をするにも混んでしまいそうですし。さあ、行きましよう」
促され、二人は店の前を離れ歩き出した。

それでも、目だけは入れ替わり立ち替わり流れていく店頭の色とりどりの服や雑貨などへと向けられる。朔海はもちろん、咲月も。今まで興味を向けてこなかったとはいえ、咲月も年頃の少女である。つけられたブライスカードの表示は正直恐ろしいが、かわいい物を見て心がときめかない訳がない。

衆目を一身に浴びる二人の隣を歩きながら、昨日から感じていた不安感を思えば尚、かわいい格好をしたいと思うのは当然である。

微妙な表情を浮かべる咲月に気付いた葉月がフォローを入れる。

「食事を済ませたら、二階に入っている『Spica』という店へ行ってみませんか？ あそこなら、手ごろな値段で趣味の良い服が一通り揃いますよ」

「ああ……、たしかジャンヌダルクってデザイナーが手掛けてるブランドだよな？」

「あ、聞いたことあるかも……」

そうだ、クラスの中でもお洒落な娘たちのグループの中で話題になっていたブランドだ。ティーンズ雑誌にもよく取り上げられていて有名なブランドらしいが、当のデザイナー本人は名前だけが有名で、決して表には出てこないのだという。

一応、フランス人女性だという事になっているらしいが……。

「へえ、あの人こつちでも店を出してるのか……。しかも流行ってるんだ？ さすが、逞しいねえ彼女」

複雑な表情で遠くを眺めながら苦笑する朔海。

「え？ ご存じなんですか、ここのデザイナーさんを……」

「ん、ああ……直接の知り合いじゃないけど、顔と名前と……略歴位はまあ……」

かなりの有名人だから、という最後の言葉を寸で飲み込みつつ

朔海は答えた。

「僕も結構世話になつてるからね、ここのブランドには」

「ハイネックTシャツを掴んで軽く引つ張りながら、葉月を見、葉月のそれもそうだろう？」

昨日着ていたものと同じ黒のコートを指して尋ねる。

「ええ、あその物は値段の割に質が良いので長持ちしますから」

「まあね、自尊心プライドの高い人だから。下手な物売ってクレームが来るのを何より嫌がるんだよね。だから、商品は最後まで責任もつて目を通して。デザインに関しちゃう人それぞれの好みだからあれだけど、品物の質に関してマイナスな批評は聞いた事がない」

「今では、あの方のお気に入りですもんね……」

「え、葉月さんも御存じなんですか？」

「ええ、一部の者達の間では結構な有名人なんですよ。本人はご存じのとおり露出を嫌うので、決して口外せぬように緘かんづ口令つれいが敷かれていますから、実際の情報はあまり表には出ませんが」

昨日から度々（たびたび）ある、“彼らの事情”を含めた言い回し。毎度、あえてスルーし続けた咲月は、今回も特には突っ込まずに流した。

とはいえ、内心ではやはり気になっていた。……その“一部”である彼らは、一体どういった人間なのか。

ふと、定かではないがあながち外れていなさそうな答えにつき当たると。

もしかして、モデルでもやってたとか？

このルックスだ。そうだと言われれば大半の人間は疑いもせず納得するに違いない。それにファッションモデルならば、ファッションデザイナーと顔を合わせる機会もあるだろうし……。

うーん、でも葉月さんはお医者さんなんだよね？

完全に不可能ではないのだろうか……、医師になる勉学かたわの傍らにモデル業など咲月からしたら離れ業すぎて想像も出来ない。もちろん

ん、医師として就業しつつ　ともなれば尚更だ。

では、朔海の方は？

そう言えば、歳以外の事について詳しい事は聞いていなかった。例えば、どこの学校へ行っているのかとか。

……この春、同級生だった者達は皆それぞれ高校へ進学して行ったが。

学費に、当てのなかった咲月に進学という選択肢は無かった。かといって、就職するにも身元を保証する保護者というのが当てにならず、やはり上手いかなかった為、とりあえずバイトをして生活費を稼ごう位にしか考えていなかった咲月にとって、それを尋ねた後で返ってくるだろうと同じ問いが怖くて。

咲月には、どうしても訊けなかった。

遠いぬくもり

約十四年前の話だ。

とある児童福祉施設の前に、白い男物のコートに包れた赤ん坊が捨てられていたのは。

……ここまでならば、そこまで珍しい出来事ではなかった。つまりは、捨て子だ。この施設には、そんな過去を持つ子供は沢山いた。他にも、虐待されたりだとかで親元で暮らせない子供たちも沢山いた。

上は高校生から、下は幼児まで。……そのまま、あの施設で育てていたなら、今頃はどこかの公立高校に進学できていたかもしれない。……親無し子と、苛められる事はあったかもしれないけれど。

自分を里子として引き取りたいと、施設へあの夫婦が訪れたのは、ちょうど小学校にあがる直前だったから。おおよそ九年前の事だった。

夫婦共々子供好きだったが、奥さんの方は病気のせいで子供が産めない身体になってしまったのだとか。代わりに、施設から子供を引き取り、養子にしたいという事だった。

そして、彼らの目に留まったのが、咲月だった。

夫婦は、とても親切な人たちだった。いっぱい優しくしてもらったし、毎日おいしい手作りご飯も食べさせてくれた。休みには旅行へも連れて行ってもらったし、習い事もさせてくれた。学校行事にはいつも揃って来てくれた。

……あのままの生活がもし続いていたらなら、大学まで行かせて貰えていたかもしれない。

しかし、自分を引き取って僅か二年半後。ちよつと、近所のスーパーへ買い物に行った帰り道、飛び出してきた子供を避けた拍子に反対車線へ飛び出し、対向車とぶつかって交通事故を起こしそのまま、帰らぬ人となった。

人の良かった夫婦の葬式には、多くの人が集まった。実子のいなかった夫婦の、少しばかりの財産を目当てに、親戚らも大勢来た。そして、その葬式場で、夫婦の遺言を預かっていた弁護士が、それを発表し　大騒ぎになった。

咲月を引き取った者に、彼女の養育費として財産の一部を分け与える。

喉から手が出るほど欲しい遺産と、邪魔なことこの上ない子供。

人々の頭の中で、それぞれ天秤やら算盤やらが活躍し、利益と不利益とをはじき出す。

……正直、子ども一人の養育費を引けば、残る財産はそう多くはない。こんな素性も知らない子供を引きつける面倒を考えれば、そんな少しばかりの財産では割に合うわけがない。と、そう考えた者が大半を占めた。

だから、咲月を最初に引き取ったのは、ギャンブル好きが高じて作った借金に追われて、その僅かな財産がどうしても必要だった、養父の従弟だった。

割に合わない、子どもの面倒をみる事などしなかった。洋服も滅多に買っては貰えず、年々小さくなるつんつるてんの服を学校へ着て行つてはクラスメイトにからかわれた。

食事も、何かと理由をつけて抜かされる事が多かった。

そうして浮かせた分のお金を、彼は全てギャンブルにつき込んだ。

そんな生活が、彼がパチンコ屋でけんか騒ぎを起こして警察沙汰になるまで続いた。

男による、虐待があった可能性があると疑う警察に対し、世間体を気にした養母の姉が咲月を引き取ったのだ。

ご飯は、普通に食べさせてもらえた。洋服も、三つ上の義姉あねのお下がりながら、ちゃんとしたのを着させてもらえた。

しかし、ぽつと出の咲月の存在が気に食わなかった義姉の執拗しつような嫌がらせに耐えながらの生活であった。

親の見ていない隙に、咲月の私物を荒らしたり、殴る蹴るの暴力も受けた。

が、ここでの生活もそう長くは続かなかった。

夫の浮気が原因で、親が離婚したのだ。……義姉は、母親に引き取られることであっさり決着がついた。揉めたのは、咲月の引き取り手だ。

さんざん揉めた挙句、咲月を引き取ったのは養父の両親だった。が、そもそも子どもの出来ない体の養母との結婚を猛反対していた親だ。身元の知れぬ子どもを引き取る事にも決していい顔はしなかった。

結果、事故で息子を早くに亡くした彼らは、心底咲月を嫌っていた。それを引き取ったのは世間体の為だけ。

食事は、自分で自分の分だけ作って食べるよう言われた。その他には、月に千円渡され、それですべてをまかなうよう言われた。そうして、後はもう、咲月などいないものとして扱われた。

会話に加わる事は、許されていなかった。

かなり高齢だった義祖母が倒れたのは、それから約一年後。

元々糖尿を患っていた義祖母は、脳の血管を詰まらせ、意識不明の重体に陥った。命だけは取り留めたが、当分の入院生活を余儀なくされた。

昔堅気の間人である義祖父一人では、食事も洗濯もままならないやろうと思えば咲月ができたが、彼はそれを断固拒否したため、彼の娘は彼を老人ホームへ入所させた。

そして咲月は　またしても、居場所を失った。
行く先々で不幸を呼ぶ厄病神　。

それから、半年以上同じ場所にいた記憶はない。

誰も、引き取りたがらなかった咲月を、一度は児童福祉施設へ預けるといふ案もあった。

正直、咲月としてはそちらの方が余程有難い気がしたが、世間体が悪いとその案はあっさり一蹴された。

さんざん揉めた挙句、それぞれ三カ月だったり、半年だったりとノルマを決め、持ち回りで咲月を預かるという事で合意したのだ。

嫌々、義務として預かり、ノルマ分が済んだらとつと追い出すもつ、自分を引き取ったのが養父母の某なにがしかなんて、一々気にする気にもなれないほどあちこちを渡り歩かされた。

だから、今回も彼らが何者かなんて、全く考えもせずに来たのである。

こんなに良くしてもらった今、彼らが何者かなんて気にするつもりもなかった。少なくとも、彼らの口から聞くまでは……。

パンドラの箱

ツルの恩返し、という有名な昔話がある。

「決して覗いてはいけませんよ」

そう言われたのについて覗いてしまい、ツルは帰って行ってしまつたという、あの話。

ふと、昔絵本で読んだあの話を思い出したのは、つい今しがた聞いたばかりの彼の台詞が妙に耳に残ったせいだった。

「診療時間中は、何があっても決して診療所へ来てはいけませんよ？」

買い物から帰り、少し早めの夕飯を済ませた後、葉月から告げられた言葉だ。

「夜間診療専門の外科医院なんですがね、そう大がかりな手術が出来るとな設備も入院施設もありませんから、救急指定されているわけでもなくて。自然、ウチに来る患者さんの殆どがワケありな人達になってしまつて……」

言いくそくに苦笑を浮かべて頭をかきながら、

「場合によっては診療室がだいぶ賑やかになる事もそう珍しくないんです」

と、申し訳なさに続ける。

「そんな中に、女の子を巻き込む訳にはいきませんから……」

彼らが何者かなんて気にするつもりはなかった。

でも。

……絶対に見てはいけませんよ　だなんて。

そんな風に言われて、気にせずにいられる人間なんて存在するも

のだろうか？ たいていの人間は、そんな風に言われたらむしろ余計に気になると思うのだが……。

そう、物語の中で「見てはいけない」「開けてはいけない」と言われた人物の大半は言いつけに背いて、良くない目にあうのだ。「浦島太郎」しかり、「パンドラの箱」しかり。

……彼らは一体、何者？

ここへ来て、二日目の夜。

部屋の明かりを消し、布団に体を横たえて数刻。

昨夜の静けさが嘘のように、階下は賑やかだった。うめく声、ドツタンバツタンと暴れるような物音。怒鳴る声。

……なるほど、葉月の告白通りである。身を起こし、カーテンを僅かばかりずらして窓越しにちらりと下を覗けば、いかにもな黒塗りペツカペカの車が停まっている。

つまり、彼の言っていた“ワケあり”とはヤクザ御用達ごようだちという事……、なのだろうか？ そういえば……車の脇でタバコをふかしているサングラスの男の風体はまるで……昔、養父の従弟の家に行った頃度々やって来ていた借金取りの様……。

え、まさか葉月さん……、堅気カタキの人間じゃない……とか？

……なワケないか……、あの華奢な身体じゃねえ……。

あの、モデルでも通りそうな白く細い腕で、例えばあの屈強そうな男を殴り飛ばしたところでどれだけの効果があるだろう？

どっかのドラマか映画で“マフィアも今は頭を使う時代だ”なんてカッコつけた親分ボスが言っていた気もするけれど。それにしたってあの人のよさそうな優男にはおおよそ似合そうにない職業（？）である。

聞いてみたい気持ちと、聞きたくない気持ちが、心の天秤をゆらゆらと揺らす。

と。窓の外でぽそぽそと小さく囁くささやような声が聞こえた気がした。

「あの娘が例の？」

「そうらしいな。アイツはともかく、坊ちゃんのほうはだいぶ執心の様だぜ？」

カーテンの向こうに揺らめく、小さな影が二つ。

「でも、実際はどうなのかしらね？」

「さあね、どうなる事やら……」

そろそろと窓辺へ這い、そろりりとカーテンの裾をつまみ、息をひそめて、そうっとめくってみる。

「どこまで隠し通せるもんか……。もし正体が知れたらどうなるだろうな？」

黒い綺麗な毛並みの猫が、長く細い尻尾をくねらせる。

「逃げ出す？ それとも現実逃避に走るか……。それとも退治を試みるのか……」

「あら、受け入れる という選択肢もあるはずよ？」

それに応えるように真っ白な毛並みの猫がとがった耳を動かしてハツとしたように視線をこちらへ向けた。

「にゃあ」

猫として当たり前前の鳴き声を、その白猫は警告の様に鋭く発し

ビクリと一瞬身体を強張らせた黒猫は慌てたようにベランダから飛び降りた。

「じゃあ」

白猫は、もう一度猫語で鳴いて黒猫の後を追って闇へと消えた。

ええと、……私、よっぽど疲れているのかしら？ ……今の

は、夢？ 幻？

猫が、人の言葉を話すなど……。普通に考えたらあり得ないけれど……。

もし正体が知れたらどうなるだろうな……。って、どういう事？

一向に収まる気配のない階下の騒ぎ。

窓辺を離れ、布団に転がる。咲月はもう、それに関して完全に無関心を貫く事は……。できそうになかった。

タブーの中身

「見られた？」

最後の患者の処置を終え、表にかかった“診療中”の札を“休診”と書かれた側へと裏返ししながら、彼は足元でしおしお項垂れる生き物達を見下ろした。

一瞬、現実逃避をするように腕時計に視線をやる。時刻は、午前五時。明け方と早朝との狭間の時刻。ほんの数日前にはまだまだ星の輝く闇夜だった空も、今はまだ地平線の向こうにある光の源から溢れる僅かな明るさに星たちは早くも埋もれかけていた。

「ま……、まあ……確かに見られはしたけどよ、でもすぐ気付いてトンスラこいたし……、大丈夫……だろ？」

ふにふにしたピンクの可愛い肉球のついた前足でまあまあと彼のご機嫌を落ち着かせようと、葉月の足をぽんぽん叩く黒猫の隣で、白猫はそれをたしなめる様に長い尻尾でピシヤリと黒猫の尻を叩いた。

葉月は、疲れた溜息を一つ吐き出しながら、頭痛を堪えるように額へ手を当てた。

「別に、君達の姿を見られたって困ることはありませんよ。……どう見てもただの猫ですからね。」

ジロリ、と二匹を睨みながら彼は言う。

「ですが、そのただの猫が人語を喋ったとあれば話は別ですよ」

「そりゃあな、普通の猫じゃねえし」

「何せ、何百年も前からお前に仕える使い魔であり、お前の命の恩人様　っ、ふぎゃっ!!」

黒猫は得意げに尻尾を振ったが　その尻尾を、不気味な笑顔を

貼り付けた葉月に思い切り踏みつけられ、悲鳴を上げた。

「……そうですね、形はどうかあれ一応人間相応の脳みそが詰まってるはずなんですがねえ……、何で、どうしてわざわざ彼女の部屋の前なんですか」

葉月は、黒猫の首根っこを掴み上げ、自分の顔の高さまで少々乱暴に持ち上げる。

「そりゃあ、あの娘に興味があったからだろ」

足元で、白猫がきまり悪そうに視線をそっぽへ向けた。

「……やっぱり彼女には何も話さないの？」

ぼつり、と白猫が呟く。

「一つ屋根の下で同居しているのよ？ ……いつまでも隠して誤魔化してはられないわ。例えどんなに気をつけていたって、必ず綻びは生まれる。なら、不本意な形で知られてしまふ前に、きちんと説明するべきだと思っただけど？」

静かに立ち上がり、くるりと身体の向きを変え葉月に背を向けて静かに歩きだしながら、彼女は言った。

「……さつき、あちらからの使者がお見えになったわよ。書状だけおいてすぐお帰りになったけれど」

瞬時に、鋭い視線を葉月は彼女に向けた。

「何……？」

「……まあ、気づかなくて当然さ。あの大騒ぎの最中に蝙蝠一匹の羽音を聞きわかるなんて、いくらあんたらでも余程気をつけてなきや無理だろ　っ、て、おい！」

緊張を露わにする葉月をフォローしようとする黒猫を投げ捨てるように放り出すと、彼は診療室の奥に設けられた事務室の扉を乱暴に押し開ける。ごく狭い部屋に事務机を押し込めただけの部屋の中、デスクの上に散乱した大量の書類をかき分け、その中から一通の封書を手に取った。

その封蝋に施された刻印を目にした瞬間　彼の周囲の空気が一瞬にして凍りついた。

「　　つ、分かつてはいましたが……とことん鬼ですね……」
「……まあ、実際“鬼”の一種みたいなもんだからな。冗談でなく。で、どうすんだ？」

結構乱暴に放り出された割に大してダメージを受けた風でも無く飄々と彼の後をついてきた黒猫が、いつの間にか口にくわえていたモノを彼の方へと放りながら尋ねる。

「……考えが、……無いわけではないのです」

疲れたようにズルズルと、キャスターのついた椅子に腰かけながら、放られたそれに手を伸ばして彼は答えた。

「けれど」

それを口にくわえて、一度言葉を切る。それを　　その中身の液体を、ゆっくり嚙下しながら　　葉月は目を閉じた。

「私には分からないのですよ……正直、どうするのが正しいのか……」

「まあ、一般論を言うなら当人同士の気持ちの問題だろ？」

重苦しいため息をつく彼に、黒猫は軽い口調で返す。

「ですが、私達はその“一般”のくくりには当てはまりません」

「……だが、あの娘だって“一般”人じゃありえないだろう。」

“そもそも”の事情の事はもちろんだが、俺たちの姿が視えたって事はそういう事だ」

黒猫が、ふと壁に掛けられた額縁を見上げた。飾られているのは、何の変哲もないただの風景画だ。……有名な画家の作品でもない、そこらの百貨店で数千円程度で売られていた安物の絵が、殺風景な部屋の中に申し訳程度に飾られているのだが、明かりもつけない部屋の中で今は隣の診療室から漏れる光を絵を保護するシートが反射して、半ば鏡の様に部屋の様相を映し出していた　　が、その鏡像の中、黒猫の姿だけが無い。

「確かに、彼女はいわゆる一般人の中ではどちらかといえば少数派に属しているかもしれませんが……、その程度でしたら、わざわざ我々の世界に関わらずとも、普通に幸せになれるはずですよ。まあ、

ちよつと不幸な偶然で先日までかなり苦勞をされたようではありましたが、きちんと一人立ちできる力を得られさえすれば何も問題はないでしょう」

ちらりと黒猫の視線を追い、その事実を目にしつつも彼は表情一つ変えることなく、手にしていた空のバックを机の脇に置かれた小さなプラスチック製の屑籠くすかごへ放り投げた。投げ捨てられたバックは屑籠の淵に当たってバコツと音を立て、その衝撃に屑籠が僅かに傾いた。屑籠にヒットしたバックはしかし、勢い余って思った方へは返らず、屑籠の外にペシャツと落ちる。

コントロールを誤り渋い顔をする葉月に黒猫は、ため息をつきつつも鋭い視線を彼に向け、

「……だが、それまでに一体どれだけの時間を要する？」
簡潔な問いを投げかけた。

「今、彼女は何歳いくつだ？ 十四……十五？ そんなもんだつたよな。で、今この国の法律で成人は確か二十歳だつたはずだ。とすると五六年つてとこか。まあ、あんたたち一族からすりゃ百年なんざあつという間、十年の年月は瞬まはたき位の感覚なんだろうけどな。だが、それはあくまで時の流れをただ傍観しているだけだつた場合の話だ。あんた達の普段の時間感覚がどうあれ、一時間は六十分、一日は二十四時間で、一年は三百六十五日なんだつて事實は、俺達にしる、あんた達にしる、彼女を含め人間達にしる、その他どんな存在に対しても、変わることはない。そうだろう？」

「……………」
その問いに、葉月は押し黙る。

「そうだ、お前が一番良く知ってるはずだよな？ 白露」

黒猫は、あえてその名を口にしながら、更に言葉を重ねる。

「これまでここが平穩だつたのは、あちらさんが無関心を貫いていたからだ。……一部、例外も居たとはいえ、な。だが、連中がその気になつたのなら」

「……ええ、騒がしくなりますね。今までの比ではなく」

皮肉を含んだ苦笑を浮かべた葉月がため息とともにそう呟いた。

「そんな中で、守り通せるのか？ 何も知らせないまま、何もかも隠したままで」

「守り通して見せますよ、何としてみても。彼女が私達の手を必要としなくなる、その時まで」

「それで、坊ちゃんは納得してるのか？」

「嫌でも納得していただきます。下手に情を移してしまわない内にね」

「……要らぬ傷をこさえる前に……ってか？ 知ってるか、そういうのを過保護って言うんだぞ？」

嫌味を口にする黒猫に、葉月は涼しい顔をして言い返す。

「何とでもお言いなさい。……あの人は、もう十分過ぎるほど傷を負ってこられた。これ以上、余計な重荷を負わせたくはないのですよ」

そして、この話はもう終わりだと言わんばかりに立ち上がり、部屋から出て行くこうとする。

「あんな……、あの時の様な思いをするのは私だけで十分です」

そう呟いて部屋を出ていく主の後ろ姿を見送りながら、黒猫は彼と入れ違いに部屋へ入ってきた白猫を見下ろした。白猫はデスクへ飛び乗り、黒猫の隣で腰を下ろす。

「相変わらず、頑なよね」

「……まあ、半分は俺達のせいでもあるけどな」

「ねえ、この知らせ、やっぱり向こうにも行ってると思うっ？」

ピンポン、と、見計らったかのようなタイミングで自宅側のチャイムが鳴らされた。

「いや、まだだろう」

黒猫は机を飛び降り、屑籠のそばに転がされたままのパックを屑籠へ捨てながら答える。

「あの坊ちゃんの性格を考えればな……。今、あえて知らせるのは得策じゃないだろうっ？」

慌てたように階段を駆け降りる足音に、ピクリと耳を動かし、白猫は呟いた。

「……………これから忙しくなるわね」

「……………ああ」

開けっ放しの扉の方へと歩きだしながら、黒猫が静かに同意の返事を返す。

「事態がどう転ぶにしろ、……………あんな思いを味わうのは俺達だけで十分だって事だけは、俺も同意見だ。俺達の時みたいな事態にだけはさせねえ。」

静かに、だが力強く彼は言い残し、部屋を後にした。

部屋に残された白猫は、

「それは、もちろん。でも、その為にはこのままで良いはずないわ……………」

誰に言うでもなくそう呟いた。

「だって、私がそう思うんだもの。きっと彼女だってそう思うはずよ。ねえ、白露……………」

「それにしても朔海君。昨日といい今日といい、なんでこんな朝早くから来るんですか……」

一人考え込む咲月をよそに、ため息をつきつつじろりと隣の席を睨んだ葉月に、

「え、だって昨日作ったおかずが余ったから、お裾分けしようと思っただけさ」

邪気のない笑顔を返す朔海。

「冷蔵庫に入れといたから、お昼にどうぞ」

「それはありがとうございます。でも、だからってこんな朝早く来る必要はないでしょう?」

そう言っただけで葉月が眺めた先にかかった壁掛け時計はまだこれから七時になるところだ。

「どうせ家に居たって暇だからさ」

「……こちらはいい迷惑ですよ。昨日も言ったでしょう、私はこれから休むところなんですよ?」

表情を引きつらせる葉月にかまわず、

「ごちそうさまでした」

綺麗に空になった食器を前に箸を置き、丁寧に手を合わせて朔海が言う。

そんな彼にわざとらしく盛大にため息をついて見せながら、彼もまた空の皿の前で手を合わせ、

「ごちそうさまでした」

そう言っただけで椅子を引いた。

「では、すみませんけど……昼まで休ませてもらいますね。もし、どこかへ出かけるようなら、玄関の鍵をかけて出てください。鍵は玄関の脇の物入れの引き出しに、ハンコと一緒に入ってますから。」

立ち上がり、自分の使った食器を流しへと運びながらこちらを振り返り、

「ああそれと、」

さりげなく付け加える。

「診療所のほうへは立ち入らないくださいね。一つ扱いを間違えば大変な事になるような劇薬や、危険な医療器具などありますから……」

さりげなさを装いながらも、念を押すような彼の忠告に、

「あ、はい……」

咲月は素直に頷いて見せる。……が、診療所へと通じるたった一枚の何の変哲もないただの扉が、その一言によつて彼女にとってそれ以上の意味を持ったのは言うまでもなく。

葉月が自室へと戻った後、朔海と二人で食器を片づけながら、彼との会話もそこそこに、咲月は一人考え込んだ。当然、気にならないはずはない。だが、彼らの親切に対して、それを仇で返すような行為はしたくないのも事実。

それに。

一応、当面の収入は目処がついたものの、まさかこのままずっとこの家に居座り続けるわけにはいくまい。無理に急ぐ必要は無くなつたが、それでもなるべく早くに一人で生きていける術を得なければならぬ。

将来のことなど、今まで考える余裕もなかったが……。真剣に考えなければならぬことは、いくらでもあった。

「今日は天気も良いし……、洗濯物を干したら少し近所を散策してみようかな」

閉じられたままの分厚いカーテンを捲り、外を眺めながら咲月はつぶやいた。……徹夜明けの目に朝の陽ざしは眩し過ぎるのだろうか、ただでさえあまり多くない屋敷の窓という窓は全て分厚いカーテンが掛けられており、もうじき十時になるというのに屋内は薄暗かった。

「せつかく寝てるのに、掃除機なんかかけたらやっぱり迷惑だもんね……」

と、すれば洗濯さえ済ませてしまえば昼食時までは特にやること

も無い。特にすることも無くただ家にいれば、どうしたってあの事が気になつてしまつたらう。

ならば。

咲月は悶々とする思いを無理やり頭の隅へと追いやり、朔海に断つて片付けの済んだ食堂を出て洗濯機のある脱衣所へと移動する。

「ついでにお風呂も洗つて……、ああそつだ、洗濯機回してる間に玄関先くらいは掃いておこうかな」

一昨日の強風で砂だらけのアプローチを思い浮かべつつやるべき事を考える。

そして半ば上の空のまま脱衣所の引き戸を開け　咲月はギョツと一点を見つめたまま固まつた。

洗濯機の隣に置かれた脱衣カゴ。その上にちょこんと座っているのは　まぎれもなく、昨夜見た真つ白な猫。　いや、昨日の猫かどうかは微妙かもしれない。暗闇の中だったし、似たような猫なんかいくらでもいる。それに、一緒に居た黒猫は室内をどう見ても居ない。

白猫は、固まつた咲月の目をじっと見上げたまま動かない。

「あ……、えつと……、もしかしてあなた、葉月さんの飼猫？」
咲月は恐る恐る尋ねた。

「……」
が、当然といえば当然だが、猫は沈黙したまま動かない。

「うつかりしてたよ、咲月さん、その洗濯機の使い方が分かる？」
説明書を片手にやって来た朔海が、不自然に固まる咲月を見て、

不思議そうに室内を覗きこんだ。

「あれ、紅姫べにひめ？　こんな所で何してるの？」

咲月の視線の先に、その白猫を見つけた朔海が呼びかけた。

「紅姫……、つて、あの猫の名前ですか？」

振り返り、尋ねた咲月に朔海は驚いたように目を見張り、

「え……、もしかして視えて　」

呟きかけた言葉を慌てて嚙み、

「あ……、ああ、そう。葉月の猫だよ」と、誤魔化すように別の言葉を口にした。

「もしかして、もう一匹、黒い猫も？」

しかし、更に続けて問われた朔海は、またも驚き慌て、

「え……、青彦……？」

と、良く知るその知人の名をポロリと漏らした己の口に急いで手を当て塞いだ。

「……彼を、どこで？」

が、塞いだ手の隙間からもごもごと、今度は逆に朔海が咲月に問いかけた。

「昨夜、ちょっと……」

しかし、咲月もやはり猫が喋ったのを見た等とは言い出せず、語尾を濁した後で、ハツとしたように言う。

「あの、猫の事、葉月さんは何も言っていなかったけど、世話は……、エサとかあげた方がいいと思いますか？」

「ああ……、え、と……、できれば、気づいてない振りしてあげて？」

困ったように視線を彷徨わせながら、取り繕うように朔海が答えた。

「ほら、今まで男の一人暮らしだった訳で……、侘しかったのか何なのか、猫を飼い始めたんだけど、良い年した大の大人の男が猫を可愛がるなんて決まり悪いとも思ってるのか、僕にも秘密のつもりで飼ってる猫なんだ」

まあ、こうしてバレてる訳だけど。苦笑いを浮かべて朔海が言う。

「大丈夫、一通りの世話は葉月が自分でやるから。だから、気づいてない振りしてあげて」

咲月の脇をすり抜けるように部屋へ入り、洗濯機の上へ持っていた説明書の冊子を置き、代わりに猫を抱えあげる。

「ほら、行くぞ」

されるがままの白猫は、じつと朔海を見上げたまま、にやあと鳴いた。

「ごめん、僕はもう帰るけど……、大丈夫？ 他に、何か聞いておきたい事とかはある？」

やんわりと微笑んだ朔海が言う。

「……い、いえ、今のところ特には……」

喉どころか舌の先、唇の手前まで出かかった疑問を辛うじて噛み殺し、咲月は答える。

「そう？ じゃあ、葉月をよろしくね？」

静かに引き戸を閉め、朔海が猫を連れて部屋を出ていくと、殺した言葉はため息に変わり、咲月の口からこぼれ落ちた。

葉月の飼った猫と言う、朔海は言う。……もちろん、あの挙動不審な彼の言葉を額面通り受け取り、納得した訳ではない。あれは、明らかに嘘だろう。

だとしたら、あの猫達は一体何なのか？

少なくとも、葉月と朔海はそれを知っている。それは、彼の態度ですぐに分かった。

「紅姫と、青彦……」

身体の色と同様、対の名を持つ、不思議な猫。

せつかく、別の事を考えようとした矢先だったのに。

咲月は再び悶々とした想いを抱えながら、しばらく扉に背を預けて立ち尽くすしかなかった。

100年ぶりの知らせ

「……そうか、視えちゃったのか」

重苦しいため息をつきながら、一人で寝るには広すぎるキングサイズのベッドに置かれたふかふかの枕に顔を頭ごと埋め、朔海は呟いた。

あれは、常人 特殊な力を持たない唯人^{ただひと} の目には決して映らないモノ……あの世界の理^{ことわり}から外れた存在だ。

ある意味、自分や葉月もそれに準じた存在であるが、元々はあちらの世界の生物の一種であった自分達一族は、あちらの世界での擬態^{たいたい}に、こちらの世界に存在する他種族に比べて、必要な労力が格段に少なく済む。

葉月の場合は更に特殊な事情で、むしろこちらの世界に居るより馴染んでいる。

しかし、自分達が彼女とは違う生き物であることは、間違いない……と、思っていたのだが。

「……どの位、こちらと関わりあいのある血なのか……。やっぱり調べた方が……いいんだよな、本当は」

無論、通常の手段で調べるには無理がありすぎる。いくらあそこが特殊な場所であったとはいえ、その特殊な条件を満たすものであれば誰でも行き来が可能な場所だ。あの日、あの近辺に居た者の全てを洗い出し当たっていくなど、どう考えても不可能だ。

だが、彼には一つ、それを簡単に知る事のできる手段があった。が、その手段を使えば、どうしたって自分の正体を彼女に明かす事になる。

「嫌われるのは……やっぱり嫌だよ」

いずれ、また手放さねばならないのだと分かってはいても。

「もうしばらくは……そばに居たいよ」

咲月が、二匹の使い魔猫達の喋る姿を目撃し、すでに自分達の正体に興味を持ち始めている等とは知らない朔海は、ため息を連発しながらあの日を思い返す。

あの時、彼女を葉月に任せしたのは、彼女が人間の子供だったからだ。力なき者にとつて生きづらいだけのこの世界に、自分のエゴだけで留めてしまうのが、彼女にとつてどれ程不幸な事なのかを身を持って知り尽くしていたからだ。

けれど、彼女が持つ力の如何では、あちらの世界で暮らす事の方が逆に合わない可能性もある。

「もしそうなら、ずっと一緒に居られる？」

紅姫が自分達の事情の全てを、彼女に明かそうとしている事も知らず、朔海は呟いた。

「ねえ、僕はどうするべきなのかな……？」

ガタン、と寝室の窓ガラスになにか軽いものがぶつかった音がした。朔海が枕から顔をあげ、何かと窓を眺めて 即座に顔色を変え、ベッドから飛び降り、勢いよく窓を開けた。

キキツ、と耳障りな声とパササツと、軽い羽音と共に開けた窓から飛び込んできたのは血色の蝙蝠。窓にかかるカーテンを吊るしたカーテンレールにぶら下がり、啞えた封書を床へ落とす。

ヒラリヒラリと宙を舞うそれを、朔海は嫌そうな表情を浮かべながら掴み、封を乱暴に引きちぎり、中身を改める。

朔海が、封書の中身に目を通し、視線を蝙蝠へと向けた瞬間、血色の生物は同色の霧と化し、周囲に霧散して消える。

「嫌な手紙だ」

一枚きりの紙切れに、簡潔を通り越してただ殴り書いただけの文章を一瞥いちべつしただけで、朔海は紙切れを力任せに握りつぶし、壁へと投げ付けた。

「……百年ぶりの便りが、何だってこんな時に来るんだ」

ズキン、と、忘れていたはずの痛みが胸を焦がす。

今朝早く、葉月の元にも好ましくない知らせが舞い込んだ事すら知らず、朔海は苦しげな表情で呻いた。

「……行きたくない……けど……」
一つ、今まで連発した分を全部足しても足りないほど重いため息をつく。

「仕方ない……か……」

朔海は、サイドテーブルの引き出しを開け、中からペーパーナイフを取り出した。

カチカチっ、と刃を出し、その刃先を袖をまくって露出させた己の腕に当て、躊躇なくその白く綺麗な肌へと食い込ませ、景気良く引き裂いた。

刃が通過した傷口からどっと溢れ出す血。

血に染まったナイフをサイドテーブルに置き、空になった手でだら流れる血を掌に掬い取り、ぐっと拳を握りしめた。

目を閉じ、精神を集中させる。再び開いた手の中には、蝙蝠が一匹。

開いた掌から即座に飛び出した蝙蝠は、開け放しの窓から表へと飛んでいく。

そしてもう一度、大きくため息をつき、今しがた蝙蝠が飛んで行ったばかりの窓の枠に片足をかけ、自らもまた、翼を広げて飛び出す。

王から帰還の命を受けた。咲月を頼む

蝙蝠に託された伝言を、葉月が受け取ったのはその日の昼過ぎ。

“出かけてきます”と書き置きメモと共に用意されていた食事を、遅い昼食として食べていた時だった。

そして。

「ふうん、アレが例のオヒメさま？ 何だ、大した事ないじゃん、

あいつ何であんなの構うんだ？」

「まあ、あの“綺羅星”だからねえ」

「けっ、つまんねえの。まあ仕方ねえか、命令だからな。とっとと仕事済まして遊ぼうぜ」

「ああ、久々の人間界だ。思う存分御馳走にありつけるぞ」

小さな児童公園の前の通りを一人歩く少女を、植え木の陰で気配を殺しながら眺める二対の視線が追う。

王子の頼みと、わたし我の命令と、どちらでも好きな方を選ぶと良い。
……白露

「……選ぶまでもありませんよ」

自分以外、誰も居ない静かすぎる家の中、ぽつりと呟かれた言葉。

お前の命と娘の命。お前は、どちらを私に差し出す……？

「当然、どちらもお断りですよ　クソジジイ」

らしからぬ汚い言葉を吐き出しながら、葉月はゆるりと笑った。
不気味な事この上ない、般若はんにゃの笑みを。

闇夜の襲撃

この家へとやって来て、三度目の夜がやって来た。今夜も診療所を開けるため仕事場へと続く扉の向こうへと消えたこの家の主、葉月だったが、随分と賑やかだった昨晚の事が嘘のように静かだった。昨夜は度々診療所の玄関先へと入れ替わり立ち替わり車がやって来たのだが、今日は車どころか玄関先に近づく者すら誰一人いない。窓にかかるカーテンを僅かにめくり、こっそり外を覗き見ながら、咲月はため息をつき、机の上に並べられた色とりどりの冊子へと視線を落とす。

一つは、バイト情報誌。一つは、お稽古けいこやスクールの案内雑誌。さらにこの近隣の高校や専門学校の進学案内の冊子の束。もう一つ、自動車学校の案内もあった。

それらは全て、昼間、悶々としながらも当初の予定通り散策に出かけて見つけた近所の商店街で本屋へ寄って手に入れてきたものだ。……近所、とはいえそこは田舎だ。片道だけで軽く二、三十分は歩いた。一昨日行ったスーパーは確実に車なしでは遠すぎる。バイクをするにも、何をするにも、まずは足が必要だった。

だが、その度に葉月を付き合わせるには気が引ける。四輪車は十人にならねば免許が取れないが、二輪車なら……、と思い貰って来たのだが……。

「ええ？ 免許取るのにこんなにお金がかかるものなの！？」
料金表を見て仰天する。

更にスクールの案内、学校の案内……と順繰りに眺めてため息をつく。

「どれもこれも、なんでこんなにお金がかかるの？」
この世の中、後ろ盾を持たない人間にはとことん辛辣しつぱんにできている事を、これまでの経験で嫌というほど己おのが身で学習させられてきた咲月は、ここで改めてそれを痛感する。

バイト情報誌をめくってみても、

「これは高校生不可、これも……、これもダメ」

……高校生、ではないけれど。

「やっぱりこの場合、十八歳未満でくくりになるんだろうなあ」
「渋い顔をしながら冊子を机の脇に積み上げ、咲月は布団の上にごろりと寝転がった。」

その頃、外では。

「ああ、やっと日が沈んだか……。他の連中と違って耐性がある
とはいえ……、やっぱりキツイな、向こうに慣れてた身体には」

星の輝く夜空を見上げながらぼやいたのは、どう見ても日本人と
は思えない外見の男。

「全くだ。ちつとナメてかかりすぎた……。まさか日向ひなたに出た途端
に眩暈がするなんてな。いくら相手が非力な人間の女子供とはいえ、
こつちがふらついてりゃ話にならん。」

それに答えたもう一人の男も、やはり日本人ではないだろう。

「だが、忌々しい太陽は地平線の向こうに消えた。今、俺達の本領
を發揮するのに邪魔なものは何もない」

見た目だけはいかにも貴公子然とした金髪碧眼の男が、微かに笑み
を浮かべて言う。 黒い、笑みを。

「ターゲットは？」

初めの男に比べるといささか地味な、茶髪の男が、髪と同じ茶色の
瞳を隣の男に向けて尋ねる。

「ほれ、あれだろ？ 二階の、あの明かりのついてる部屋」

「あの男は？」

「一階だろ」

「よし、俺が奴を足止めする。その間に娘を殺やれ」

男たちは互いに頷きあい、隠れていた電柱の陰から素早く飛び出し、
目の前の建物へと疾走し

「おいおい、さっそくか？」

と、足元から唐突に聞こえた声にギクリと足を止めた。

「本当、いつになく迅速な対応ね。どうやら王家でも何か動きがあったみたいだから……、余程欲しくて堪らないらしいわね」

慌てて視線を落とせば、闇からすうつと静かに姿を現したのは、白と黒の猫が二匹。

「今日は随分客入りが悪いと思ってたが、この調子じゃ」

「ええ、こいつらにのされたんでしようね」

「……こんな小物の雑魚にか？　　たたく、奴らなまり過ぎじゃないか？」

前と後ろ、男二人を挟むように立ち、二匹は会話を交わしながらジリジリと包囲を狭めていく。

突然掛けられた声に驚いた男たちだったが、その声の主がちつぽけな猫だったと知り、彼らは嘲笑ちやうしょうの笑みを浮かべた。

「何だあ、てめえら魔獣か？　　……たかが獣の分際で、俺達一族に適うとも思ってたのか？」

「あんまり、自分の力を過信しすぎない方がいいぜ？」

黒猫　青彦の金の瞳が、その言葉と共に一瞬で、まるでサファイアの様なブルーに染まる。その、美しい瞳の光に思わず目を奪われたほんの僅かの間に、目の前から黒猫の姿が掻き消えた。

「！？」

反射的に後ろを振り返る　と、瞳をルビーの赤に染めた白猫

紅姫が小声で何やら呟いている。と、首輪に下げた飾りが不意に青白い燐光を帯びた。鈴か何かだと思っていたそれは、よくよく見ると何やらやたらと細かく文字や模様が刻まれている。

「うわ？」

臨戦態勢を整え、身構えた男たちの足元に、突如虚空が開けた。

男たちは、まるで落とし穴にでも落ちたように真つ逆さまに虚空へと落ちていく。

紅姫は、何の迷いもためらいも無く、彼らの後を追って自らが開

いたそれへと飛び込んでいく。その後を追うように、青彦も続いて飛び込んだ次の瞬間には虚空の穴は消滅し、何事も無かったかのようになり以前と変わらぬ風景が残るのみ。

それまで耳を濟ませ外の様子を窺^{うかが}っていた葉月は、外の喧騒が収まったのを知り、ホッと息をついた。直後、胸を撫で下ろした手で、掻きむしるように服の胸部を弄^{まひく}り、床に膝をついて苦しげにうめいた。

這いずるように、診療所に置かれた薬などを保管するための冷蔵庫を開け、輸血用の血液パックを一つ掴^{つか}みだし、チューブを差し込むはずの部分をハサミで切り、口に咥えて中身を吸い出し、飲み込む。

脂汗をびっしりかいた顔を、白衣で乱暴に拭う彼の瞳は　煌々（こうこう）と、手にしたパックの中身のそれよりなお赤い、鮮血の赤い光を放っていた。

「　ここは!?!?」

虚空の穴へと墮ち、どことも知れない場所へと放り出された二人の男は、手ひどくぶつけた腰や鼻頭をそれぞれさすりながら、辺りを見回す。

まず彼らの目に飛び込んできたのは

「　……沼……、湖?」

薄く霧がかり、視界が悪い中、目の前に広がるのは透明度の高い綺麗な水を湛^{たた}えた湖。

「　そんなのはどっちでもいいだろ」

その湖へと落ちてくる滝の水音にかき消されないよう、声を張り上げる。

「　とにかく、ここはどこだ?　人間界?　魔界?　天界、って

こたあないだろうけど……」

「　この、霧っぽい感じは次元の狭間みたいだが……」

「ああ、何か違うよな」

立ち上がり、尚も辺りを見回すが。

「……どうする？」

「ここでじっとしててもしょうがねえだろ、辺りを探ってみよう」

頷き、歩き出そうと足を踏み出した時。背後が不意に陰った。

不意に、僅かに陰った。その異変を認識する一秒にも満たないタイムラグ。脳がそれを理解する間に、僅かな陰りは見る見る間に小山一つ分ほどの影となり、彼らの足元を闇に染めた。

膨らむ影より更に凄まじいスピードで膨らむ、膨大な魔力の気配。男たちの脳みそが、背後を確認するべく次の行動を命じ、二人揃って首を後ろへと捻る。が。

その命令を、肉体が実行に移すより早く。男達の視界が、闇に染まった。

「終わったぜ、葉月」

「っ、はっ、」

じつと殺していた息を吐き出し、葉月は疲労しきった身体を弛緩させた。

まるで土砂降りの中に居たように全身びっしょり汗まみれの身体を、葉月は拭こうともせず、だらしなく床へ転がった。

「久々ながら……やはり、堪えますね……」

「葉月、……これでもまだ、続ける？」

彼の周囲に散らばった、いくつもの空のパックを一つ一つ拾い、ゴミ箱へと運びながら、紅姫は言った。

「ええ、……しばらく、パックの発注を増やさねばなりませんね」

彼の答えに、不満げに尻尾をくゆらす紅姫を見て、葉月が苦笑を洩らした。

「苦勞を、かけます」

王からの命令

「は？」

王の言葉に、朔海は思わず聞き返した。

「結婚……？」

一体、何で今、突然こんな話が持ち上がったんだ？

「……無茶だ」

朔海は、部屋に置かれた一人掛けのソファにどっかと座り込み、頭を両手で抱えてうずくまった。

「何者か、名乗れ！」

無駄に大きな城門の前で、槍を構えた門番が威嚇する。

おどろおどろしい雰囲気を漂わせる巨大な城。背後に広がる、荒れ果てた城下町。そしてその上空を舞う無数のコウモリ、カラス、何やら得体のしれない生物……。

相も変わらずな景色を一舐めし、ついつい重苦しいため息を吐く。

「綺羅星の朔海、王より命を受けて参った。通せ」

名乗った彼に、門番は不遜な笑みを浮かべた。

「ああ、綺羅星の……。これは、失礼を。さ、お通りください……」
ひきずる様な不快な音を立てて門扉が開く。

「変わらないな。……まあ、変わるはずもないか」

百年。人の世にいればそれなりの年月であるが、この世界では無いに等しい程のわずかな時間でしかない。

> i 3 5 1 5 2 — 1 8 3 <

彼は嫌な薄笑いを浮かべる門番を完全無視して城門をくぐり、正面玄関から城内に入った。

すぐ目の前にどっしりとある櫓の扉。「王座の間」と金の文字で

書かれた扉を素通りし、そこから一番遠く離れたところにポツンと忘れ去られたように建てられた北塔の、最上階を目指した。

あの、荒れ果てた北塔が、彼に与えられた彼の居住スペースなのだ。……とはいえ老朽化が進み、下の階はとうてい使える状態になく、かろうじて無事な最上階の部屋を、彼は自分の部屋として使っていた。道すがら、使用人をつかまえて尋ねたところ、彼は露骨に迷惑そうな顔をしたが、それでも王は自室にいると答えた。

実に百年ぶりの便り。自分を疎んじている親兄弟達は、自分を極力避けており、今まで、彼らから連絡を貰ったことは滅多になかった。

彼自身その事を気に病むような事はなかったし、むしろありがたいくらいに思っていた。

「……なのに、何故。どうして今頃、わざわざ使いまで出して呼びつける？」

何か不吉な予感を感じつつも朔海は、自室に着くと真っ先にクローゼットをあけ、王家の正装服一式を取り出した。これを手にするのも実に百年ぶりだが、そこはさすがに王子の持ち物。部屋と同様、最低限の手入れは施されている。

部屋は、殺伐とした雰囲気はあれど、塵や埃で真っ白な箇所や蜘蛛の巣が縦横無尽にはりめぐらされているような事はなかったし、服もくたびれてはいたが、洗濯は施されていたし、目立った虫食いもなく、すぐに着られる状態に保たれていた。……不慣れた場所ではあるが、景色は一望できるし（あまり綺麗なものではないが）、こんな所へ来る者は彼以外には使用人が一年に一度掃除に来るくらいだから、他者を気にする必用もない。しかも、こうした正式な訪問で無い限りは、わざわざ城の正門を使わずとも窓から出入りが可能ということ、実は割と気に入っていた。

しかし、今はのんびりしてはいられない。早々に着替え、足早に部屋を後にする。向かうは本殿の上階にある王の自室。羽織ったマ

ントをはためかせつつ、朔海は一つの扉の前でピタと立ち止まった。グツと前を見据え、立ちほだかる扉を睨みつけながら、彼はその場に跪き、名乗りを上げた。

「綺羅星の朔海、ただいま参上いたしました」

「……入れ」

中から、父王の声で、返答があった。

と、同時に扉がゆっくりと開いた。ロフト的なスペースがあるとはいえ、十二畳程しかない朔海の自室とは比べようもないくらいに広い、贅沢な装飾品で豪勢に飾り立てられた部屋。その、ちょうど一番奥に置かれた巨大なソファに、父王はいた。その隣には、華奢な作りのいすに腰掛けた、これまた華奢な身体をした彼の実母、つまり王妃がいた。

……こうして顔を合わせるのには、一体いつ以来であろうか。圧倒的で、威圧的な、王の存在感に気圧されそうになりながらも、朔海は立ち上がった。そして、部屋の中程まで進み出たところで再び膝を折り、頭を垂れた。

「……ふむ。来たか」

王はつまらない物を見るような目で朔海を見下ろし、下卑た笑いを浮かべた。隣で王妃も冷ややかな視線で彼を射抜いている。

「此度、私に御用時があると伺い参上した次第。用向きを伺いたく存じます」

「……王位継承の条件、お前も覚えているな？」

「は、はあ……。まあ……。ですが、それが何か？」

「うむ。……そなた、そろそろ身を固めよ」

「……は、はあ？」

朔海にとって面白くない空気の漂う中、久々に使う堅苦しい言葉遣いにより不快を覚える。そんな中。放たれた王の言葉につい、間拔けた声をあげてしまった。

「王位継承には伴侶が必要であることは、もちろん存じております。が、王位継承権は基本、実力主義で決まるはず。王位など、私には

無縁の話でございます。伴侶が居らずとも不都合は無い筈。それを、何故？」

怪訝な顔をする朔海に、

「……無縁、だと。まあ、確かにな。王家の恥さらしが、王位に就くなどありえん。当然だ。しかし、だ。お前はわしの正妃の一の王子という銘付きの王族の一人。お前の所業はお前の恥に留まらず、王家の恥となる。無能なのはもう救い様がないがせめて伴侶の一人も持って貰わんと、王家の体面が保てん」

苦々しげに頭を振る王の隣から、王妃が冷たく言い放つ。

「……何故お前のようなものが私の第一子として生まれてきてしまったのか。全く嘆かわしい。私のかわいい霧人は、実に素晴らしい働きをしてきているのに。」

王は、ゴホンと大きく一つわざとらしい咳払いをして見せた後、威厳たつぷりに命じた。

「これは、命令だ。今、この時より一年の猶予をやる。それまでに婚礼の儀を済ませた女を連れて来い。一年後の本日、王族認証の儀を執り行う。期限までに相手を連れて来れなかった場合、王族の資格を剥奪した上、王家の名を汚した罪により処刑する。加えて、連帯責任として同様の刑にお前の母、紅と、実弟、霧人に科すことになる」

「……用件は以上です。分かっただらお下がりがりなさい。今更お相手に期待はしません、くれぐれも私、緋桜の紅の名、そしてお前の実弟、暁の霧人の名を汚す事の無きよう」

王の命令は、絶対。

朔海は反論の余地すら与えられないまま、朔海はフラフラと部屋を出た。その背後で扉の閉まる音が聞こえる。

まるでシャワーのように浴びせられた台詞の、その内容は、余りに突拍子無く、無茶で無謀で、彼を絶望の縁に追い込むには十分過ぎる。そしてそれは彼を死への道のりの出発点へと導く……
そういう事だった。

「くそっ、ちくしょう。」

朔海は北塔の自室に戻り、ガラスの入っていない、縁取りだけの窓の棧に腰掛け、頭を抱えて毒づいた。

「結婚 だって？ 「冗談キツ過ぎるよ……」

机上の空論

「……あの」

たまらず、夕飯の席で咲月がそう切り出したのは、この家に来てからというものの連日顔を出していた朔海がぱったりと顔を見せなくなつて一週間程が過ぎた頃の事だつた。

「ああ、朔海君ですか。彼なら、急な用事で少々遠方へ出かけると言っていましたね。すぐ帰ってくると思つていたんですが……少々用事とやらが長引いているんでしょうかね？」

葉月は内心苦いものを噛みしめながらも、それを見事なまでに内に押し込め、何食わぬ顔でさりと彼女の問いをかわした。

まさか、彼女より早く逝くハメになろうとは……さすがに塵ちり程も思つてなかつたよ……

そんな便りを彼から受け取つたのは五日程前の事だ。そういう事か……と、あの書状の理由に納得したのと同時に、やり切れない思いが込み上げた。

「そうなんですか……」
ホツとしながらも、がっかりした様な複雑な表情で咲月は視線を泳がせた。

「気になりますか？」
軽い調子で尋ねられた咲月は、一瞬垣間見せた「え？」という表情を慌てて取り繕いながら、

「……少し、食卓が寂しい気がして」
そう言つて葉月の隣の空っぽの席に視線を向ける。

「せっかく、トランプやUNOを買つてもらつたのに……」
「確かに、二人きりでは面白くありませんからね、ああいったモノは……」

あの日に買った家具類も翌々日には届き、それら全ては葉月によつて咲月の部屋へと運び入れられた。

が、購入の際、咲月よりも熱心に商品を見て回っていた朔海は、まだ一度もそれを揃えた部屋を目にしていなかった。

新しく買った土鍋も、まだ一度も使っていない。

「咲月君、暮か 将棋はできますか？」

「……え？」

泳ぐ視線の彷徨う先が俯きがちになった咲月に、葉月は穏やかな笑みを向けた。

「あれなら、二人でできるでしょう？」

「……そうですね、将棋ならできます……弱いんですけど。暮は……」

……五目並べなら……」

突然の問いの理由を察した咲月は、ほんの僅か頬を染める。

「では、明日までには見つけて出しておきますね、将棋盤と碁盤を」

葉月は、爽やかに笑って言った。

「久々なんです。朔海君と良くやるのはチェスで……。でも、私個人としてはチェスより将棋の方が性に合っている気がするんです。碁碁の方は……ルールは存じていますが、てんでダメなんです。五目並べは得意ですよ」

「私も……一番最初のお義父とっさんに教わって以来なので……お手やわらかにお願いします……」

ペコリと軽く頭を下げる咲月。

「では……、すみません。本日もまた騒がしくなると思いますが、ごちそうさまでした、と葉月が席を立つ。

「大丈夫です、もう慣れましたから」

「なら、良いんですが……。何かあれば、遠慮せずにご言ください。ああ、それと……、くどい様で申し訳ないんですが……」

「はい、診療所の方へは立ち入らないようについて事ですよ。分かってます」

毎日必ず、夕食の席を立つ際に繰り返し念を押されている咲月はコクリと頷いた。

咲月といる間、笑顔を保ち続けていた葉月だったが、食堂の敷居をまたぎ、咲月の視界から外れた途端にその表情から笑みが跡形もなく掻き消えた。

「葉月、今日も来てるぜ、お客さんが」

廊下で待つていた青彦が診療所の玄関扉の方を顎で指し示して言う。

「青彦……診療所からはなるべく出ないよう言ったじゃないですか……」

「大丈夫だろ、坊ちゃんがこないだ俺達があんたの内緒のペットだつて誤魔化してたからな」

「……は？ 内緒……とは？」

「それは、後に置いとけ。……とにかく、片づけるぞ。足早に、診療所へと向かう。」

「はあ、ホント熱心ですねえ。……騒がしくなる事は覚悟していましたが……まさかこうも毎日、ああいう輩やかいを送り込んで来る程マメな性格をしていたなんて……初めて知りましたよ……」

「……こりゃ、坊ちゃんの方もかなり追いつめられてるんじゃないかねか？」

「……」

沈黙した葉月に青彦は、

「なあ、一つだけ、何もかも上手くいく方法があるよな？」
「試すように言った。」

「……」

尚も沈黙を続ける葉月に、やっぱりな、という表情で青彦はため息をついた。

「こないだ言つてたあんたの考えって、やっぱりそれだろ？」

「……数ある懸念けんねんの全てに、奇跡としか言いようのない偶然が重ならねば実現しない、机上の空論です」

「でも……見てみたくなかないか？ 俺達が逃しちまった、極上のハッピーエンドってやつをさ」

何やら、尋常ではない悲鳴が、診療所側の玄関の方から、水仕事の音にかき消される事なく台所まで響いてきたのは、葉月が診療所へ消えてすぐの事だった。

まだ、診療時間ではないはず。咲月は怪訝な目を廊下へ向けた。

「……………あれ、紅姫？」

廊下と食堂との敷居の上にちよこんと座っていたのは、あの白猫だった。

「葉月さんなら診療所へ行ったよ？ でも……………今の何だろうね……………」

水にぬれた手を拭い、猫の横をすり抜けて廊下へ出ようとした咲月の足元に、しかし紅姫はじゃれつくようにすり寄り、行く手を阻んだ。

「……………紅姫？」

「……………気になりますか？」

足元から、声がした。

「全てを、受け止める覚悟はありますか……………」

全てを受け止める覚悟

咲月は、その瞳と見つめあったまま、思考を停止させた。つぶらな金の瞳の奥の、キリリと縦に引き締まった瞳孔とんこうが、ジッとこちらを見上げてくる。

今のは、空耳だろうか？ ……あの凄まじい悲鳴も尋常ではなかったが、猫が喋ったなんて、異常以外の何物でもないだろうが……しかし、この猫が喋るのを聞いたのは二度目である。

この間は、夜、寝る前だった事もあって、寝ぼけたのだろうという言い訳もできた。……咲月は、試しに自分の頬を思い切りつねってみた。

「いつ、痛っ」

……どうやら、夢ではないらしい。

先日の朔海の様子を考えてみても、彼は明らかに何かを隠そうとしていた。

「……それは、私が聞いてしまっても良い事なの？」

あの晩から、ずっと気になって気になって仕方なかった事だ。しかし、その好奇心に負けてこの居心地の良い居場所を失いたくはなかったから。

「葉月には、止められてるわ」

「……なら、私は聞かな」

「けれど、私自身は貴方に全てを話すべきだと思ってる」

自分の欲求を制御する術にかけては、長年磨きをかけてきたのだからお手の物である。

しかし、咲月は、彼女の答えを聞いて、頭を左右に振りながらそう言いかけるのを、彼女が遮った。

「葉月と、王子の 朔海様のお命に、危機が迫っている。……現状を打破するためには、どうしても貴方の力が、必要不可欠なのよ」

「……え？ ……命の……危機？」

平穩に、ほのぼのした団欒だんらんをついさつきまで楽しんでいたはずのところ突然出てきた不穩な言葉に、咲月は一瞬ポカんと呆けた表情を見せたが

「あっ、そうだった、さっきの悲鳴！」

「……心配ありません。すでに青彦が出ていますから、じきに終わるでしょう」

慌てて部屋を飛び出そうとする咲月を、紅姫は再度留めて言った。

「終わる……？ 何が……？」

「 気になりますか？」

そして、再びの問いを投げかけた。

「人語を喋る猫を前にすれば、たいていの人間は、自分の知的好奇心を満たそうと目の色を変えるか、異常な恐怖心を煽あおられるか、現実逃避をして完全に無視する。でも、貴方は違うのね」

「……一応これでも十分驚いてるつもりなだけだな」

「それは、当然でしょう。でも、貴方は本来異常といってもいいこの状況で、大して取り乱しもせず現状を受け入れている。私が貴方に望んだ以上の資質をそなえているわ」

確かに、たまに本屋で立ち読みしたファンタジー系の漫画や小説では、こういった場面に出くわした主人公の九割方はまず現実逃避に走るのが通例だった気がする。少なくとも、いきなりこんな風に普通に会話を交わすなんて展開には覚えがない。

まあ、それはそうだろう。ああいう類の主人公は大体が、普通の家に生まれて、普通に育った、普通の少年少女であり、こういった事象に出くわす直前までは、普通に幸せな生活を営んでいる場合がほとんどだ。

一般常識内の日々が当たり前だった人間が、いきなり一般常識外の事象に出くわせば、それはパニックになるのが当然というものだろうから。

そして、それを読むであろう読者の大半は、やはり主人公同様、普通の家に生まれて、普通に育った、普通の少年少女だ。主なター

ゲットである彼らが主人公に感情移入するには、やはり近しい感性を持ったキャラクターが望ましいのに決まっている。

世間様の冷たい風に揉まれ、ほんろう翻弄され続けたお陰で、何もかもどうでもいいと思ってしまう程、ある種の達観に至るような、極々少数派であるう自分のような主人公が、特にリアクションも無く淡々と流されていく物語など、つまらないに決まっているのだから。でも。

「そりゃ、気になるよ。逃げたくなったり、退治したりしたくなるようなあの人たちの正体って何なんだろうって。でも、知らなくて良い事も世の中には確かにあるの。……余計な事を聞いちゃったばかりに、この居場所を失うのは嫌。それに何より、……私なんかに優しくしてくれるあの人たちを裏切るような事、したくないから……」

「……」

「ねえ、さつき、命の危機がどうのって言ったよね？ 最近あの人
が来ないので、そのせい？」

「……」

「……」

「葉月が貴方に何も話さないのは、自分の事情に貴方を巻き込みたくないと思っっているから。朔海様も……そう思っっているから、何も言わない。確かに、全ての事情を知れば、貴方はもうこちらの世界との縁を切る事は出来ないでしょう。けれど、皆が皆、そうやって足踏みを続けるだけでは何も変わらない……。だから、私は私の責任で貴方に事情を話すの」

「……」

「保障するわ。貴方は、私が勝手に喋った事を耳に入れてしまっただけ。その事実に関する責任は全て私が負う。この件で、貴方が心配している様な事には私がさせない」

「紅姫はきっぱりと言いつつ切った。」

「全てを受け止める覚悟。私が貴方に求めるのはそれだけよ」
そう、この居心地の良い場所を失いたくないのだ。……あの二人がいるからこそこの場所を。

「私、何の取り柄も大した特技も無いんだけど……、そんな私でも、役に立てる？」

「もちろんよ。だって、優柔不断で甲斐性なしのヘタレた殿方の尻引つばたいて目を醒ましてやるのは、いつの時代でも女性の仕事と決まっているんだから」

自信たっぷり、紅姫は笑って言った。

その言葉で、咲月の腹は決まった。

「お願い、全部話して。あの人たちは一体何者なの？ 今、何が起きてるの？」

「百聞は一見に如かず。……こちらへどうぞ」

紅姫は先に立って歩き出した。

「え、そつちは」

入ってはいけない、と言われた診療所へ続く扉。

「大丈夫よ、入って」

その前で立ち止まり、紅姫は咲月を見上げて促した。

猫の身では、この扉は開けられないだろう。咲月はドアノブに手をかけた。一瞬、躊躇いながらもそろそろと扉を押し開く。

開けた扉の向こうは薄暗かった。葉月が居るはずなのに、明かりが点いていないのだ。それでも、僅かに明るいのは、部屋の壁に幾つか取り付けてある扉の一つが僅かに開いていて、そこからオレンジがかった光が漏れているからだ。

紅姫は、その扉の向こうへと咲月を促す。

入るのを禁じられた場所で、見てはいけない物を見ようとしている緊張感で、心臓の鼓動が徐々に速まってくのが分かる。

開かれた扉には薬品室と書かれたプレートが貼られていた。その扉の影に隠れながらそつと中を覗く。

この部屋でも、電灯のスイッチは切られたままだった。見ると、

僅かに漏れていた光は、開けっぱなしの冷蔵庫の庫内灯のものだった。

そんな中、暗さに慣れない咲月の目にまず飛び込んできたもの。それは

「……血液パック？」

テレビの医療ドラマ等で見かける、輸血用のパックの様だ。

実際にお世話になった事も無く、まだ十六歳未満のため献血の経験も無いから、直接本物を見た事はないが……おそらくそうだろう。

ここは病院で、しかも外科医院なのだ。血液パックの一つや二つや三つあってもおかしくはない。……むしろ無い方が問題だ。

……だが。

「何、この数……」

2ドア式で、上が冷凍庫、下が冷蔵庫という、中サイズの冷蔵庫。開いているのは下の冷蔵庫の部分の扉だ。デザインこそ無骨だが、電気屋で普通に見かける家庭用冷蔵庫の中にパンパンに詰め込まれた、パックの山、山、山、山。四段に仕切られた全ての段が血液パックで埋め尽くされている。

大した設備も無く、大きな手術も行わない個人医院。それも、夜間診療しか行わないこの病院で、こんなに大量の血液を消費するとは到底思えない。仮にストック用なのだとしても……やはり多すぎる。

ふと見ると、四段目の山が一部崩れている。少し慣れてきた目に崩れて落ちたパックが床に散らばっているのが見えてくる。

更によくよく目を凝らしてみると、床中にそれが散らばっているその中に、黒い影が見えた。

「葉月さん!？」

蹲る黒い影の正体に気付いた咲月は、慌てて扉の陰から飛び出し、彼に駆け寄った。

「葉月さん、どうしたんですか？ 大丈夫ですか？」

慌てて身体を揺する咲月に、

「大丈夫、体力と気力を使い果たしたせいで、ちょっと気を失っただけだから。それより、悪いんだけどそのスイッチを入れてもらえるかしら」

部屋の内側にある電灯のスイッチを前足で指して言った。

暗さに辟易^{へきえき}していた咲月は、言われるままにスイッチを入れ開けた視界に息をのんだ。

床に散らばるパックは皆封が切られており、中身が綺麗さっぱり無くなっているのだ。

「……………え？」

そして、蹲る葉月の口元についているのは

「……………血？」

そう、まるで、サスペンスドラマで首を絞められたか毒でも飲まされて殺された人物の死体役でも演^やっているかの様に血で汚れた口元。

そして、だらりと床に投げ出された彼の右手に握られているのは、封の開いた血液パック。

中身は……………半分無くなっている。

日本人にしては白くてきれいな肌だと思っていた。

広さの割に、窓の少ない家。

昼間でもカーテンを閉ざしたままの薄暗い室内。

夜間診療専門の医者。

大量の血液パック。

口元の血。

恐る恐る近寄り、血に汚れた口元を凝視するが、特に切れたりしている様子もない。

吐血した　という訳でも……………なさそうである。

……と、すると。……「ねは。

「葉月は人間じゃないの。……彼は
」

2人の正体

「……あの、どうしました？」

ポーンと上の空でいた咲月は、突然掛けられた声に、ギクリとし、思わず茶碗を落としかけた。

「私の顔に、何かついてますか？」

言われて、ハッと気づく。

……無意識のうちに葉月の顔を凝視したまま固まっていたらしい。すでに半分以上減っている葉月の食事に比べ、殆ど手つかずの咲月の皿を見て、葉月は心配そうにこちらの顔色を窺う。

「もしかして、どこか具合でも？」

慌てて首を左右に振りながら、

「い、いえ、昨夜つい夜更かしをしてしまつて……」

それを否定しつつ誤魔化す。

「……その、これからどうしようか迷つてて」

苦し紛れに言い訳をひねり出す。まあ、あながち嘘ではない。

彼は……

耳の奥で、紅姫の声が木霊こだまする。

「遠慮はしないでくださいね。本当に必要ならば、金銭的な援助を惜しむつもりはありません。裕福とは言えませんが、学業に必要な分位の蓄えは十二分に用意してありますから。」

葉月は、真剣なまなざしを咲月に向けて言った。

「今が、一番大切な時期です。ここで蓄えた知識や経験が一生を左右する。そう言つても過言ではありません。少なくとも、今の社会はそう出来ていますから……。貴方が、後悔せず、自信を持って歩んでいける未来を選んでください」

たかが他人。そう切り捨てられても文句は言えない立場にいるはずの自分に、真摯しんしに向き合い、真面目な答えを返してくれる。

「……っと、そうそうそれと。　　うっかり忘れるところでした。昨日、咲月さんが心配してる旨、朔海君にお伝えしましたら、早速返事が来ましてね。明日早速いらっしやるとの事です。……ようやく土鍋が使えるそうですね。UNOやトランプも……」

昨夜、命の危機だと知らされた人物の名があっさり出て来た事に、咲月は驚いた顔をした。

「えっ、だ……大丈夫なんですか？」

その話を聞いてしまった事を、葉月はまだ知らないはずだった。

実際、葉月は異様に驚く咲月に首を傾げつつも、

「まあ、彼も子供じゃありませんからね。本当にまずい時に用事を放り出して自分の欲求を優先する様な事は無いでしょうから、まあ、大丈夫でしょう」

と事も無げに言った。

……その言葉は、一体どこまで信じて良いものなのだろうか。

咲月は胸に巢食うモヤモヤを悟られぬように気を付けながらも、ここにこ爽やかに笑む葉月をじっと眺める。

葉月と、朔海様は……

だが、こうして見ても、彼が……だなんて信じられなかった。

昨夜見た光景は確かに衝撃的ではあったが、一晩明けてこうして食堂に現れた彼は、若干疲労の色こそ残っているものの、特に変わった様子も無く、いつも通りに食事を進めている。

そう、確かに外見は普通の人間と比べて綺麗すぎるかもしれない。でも、本当にその程度の違い。

二人は……吸血鬼、なのよ。

散らばる空の血液パックと共に床に蹲る、口元を血で汚した一人の男の前で、彼女は告げた。

「……だから、これ？」

人語を喋る猫という非現実的な生物から聞かされた、実にファンタジックな名詞。

だが、異常な量のパックが詰め込まれた冷蔵庫を前にし、大量の空のパックが散乱した部屋の中で、半分空になったパックを手にした男が、口元を血で汚して蹲っているのだ。

そこに、吸血鬼だと言われてしまえば、冷蔵庫の中身は彼にとつての貯蔵食料なのであり、床に散らばる空のパックは食い散らかした　　というよりは飲み散らかしたと言うべきか　　結果であり、手にしたパックはまさに飲みかけ……という説明がつく。

しかし、それにしても尋常ではない。　　吸血鬼というもの、普段どれ程の量の血液を必要とするものかなど当然知る由もなかったが……けれど、この量は明らかに異常である。

何より、蹲つすくまったまま気を失っている男　　葉月の様子こそ、明らかにおかしかった。

浅く短い呼吸を苦しげに繰り返す彼の顔は脂汗が顔中を覆っている。しっとり湿った着衣を見るに、恐らく身体の方も汗まみれになっているであろう事は容易に想像できた。

寝台に運んで休ませるべきか、タオルが何かで汗をぬぐう方が先か、それとも　　……どうするべきかと迷いながら部屋をぐるりと見回す咲月に、紅姫は、

「大丈夫、大した事ないから。すぐに目を醒ますだろうし、明日の朝までには持ち直すはずだから。今は、このままそっとしておいてあげて」

そう言っ部屋から出て行くこととする。

「……葉月が起きる前に、診療所を出ないと」
彼の言いつけを破ってここにいる事をハツと思いだし、明らかに
具合の良くない人間 いや吸血鬼 を放っておく事に罪悪感の
様なものを覚えながらも、急いで部屋を後にし、急いで部屋へと戻
ったのだが……。

……あの状況でそう言われた時は、なるほど、とつい納得してし
まったのだけど。

ちら、とカーテンの閉まったままの窓に視線を向ける。

紅姫の説明によれば、とりあえず太陽の光を浴びたからと言って
命に係る事は無いらしい。だが、通常の間人より日光に弱いのは事
実で、あまり長い事直射日光に当たっていると、皮膚が焼けてしま
うのだという。

「冬の日差しでも、夏場の海で日焼けしすぎて火傷したみたいな状
態になっちゃうのよね」

それなりに訓練すれば、ある程度の耐性を身につけることは可能
なのだと言っが。

「そうね、葉月はこっちの世界での生活が長いから……昼でも屋内
なら問題なく活動できるし、真夏じゃなければ外を歩いても二、三
時間くらいは保つかしらね……」

とはいえ、なるべくなら避けるにこしたことは無い。閉ざされた
カーテンはそのための配慮だったのだ と。

これも、言われればそうだったのか、という気にはなる。

さすがに、一度に全てを聞かせるのは酷だと思ったのだろう、
昨夜聞かされたのは、ただ彼らが吸血鬼という、人間ではない生き
物なのだという事実だけだった。

しかし。

「朔海君の事です、どうせまた人の迷惑も考えずに朝っぱらから押しかけて来るんでしょうからね……。幸い、明日は休診日ですし……昼食は何か美味しいものでも食べに行きますか？」

血を吸う鬼だという、人ではない彼は、これまで咲月が見て来た薄情な人間達に比べ、余程も温かかった。

一体どうして、人間ではない彼が自分を引き取ったのかと、疑問に思わないでもないが……。

「ああ、碁盤と将棋盤、見つけておきましたよ。後で綺麗に拭いたら持つてきますね」

カーテンを閉め切った部屋は、少し薄暗いけれど。

これまでを思い返せば、日だまりの中にいる様な気さえするこの場所から、逃げ出したいという気にはならなかった。

だが……。

もしも……、もしも万が一彼らが豹変する様な事が 牙を？き、血を啜^{すす}ろうと襲ってくるような事があったとしたら、どうだろうか。こんな、ほのぼのした朝食風景の中ではそんな想像はあまりにも突飛に思えてしまうのだけれど。

紅姫によれば、血液の摂取は血液パックで十分間に合うのだそう
で。

「別に、あなたの血を非常食にしようとか、そんな理由で引き取った訳じゃないから安心しなさい」

……との事だった

「そもそも、命を繋ぐために必要な量はそう多くないわ。大半の吸

血鬼にとって、必要以上の吸血は殆ど娯楽みたいなものよ。そうね、人間が美食を楽しむ様な感覚に近いかもしれない」

「でも、じゃあさっきのあの大量のパックは……？」

「……普通に生活している分には、命を繋ぐのにそう多くの血は必要ないけどね。でも、どうしても普段より栄養分けつえきを必要とする時っていうのがあるの。人間も、病んだ時はそうでしょう？」

「 命の、危機って……」

「そうね。それに関しては、色々かなり複雑な事情があるから……。詳しい事は追々……順を追って説明するけど……理由はともかく、今、あちらの世界から貴方を狙う刺客が日々送り込まれて来ていて、彼はそれを撃退するために闘ってる」

言われて、咲月は絶句した。

「……………え？ ……私……………の、せい……………なの？ ……何で？」

行く先々で不幸を呼び込む疫病神。

そう言われて忌避された過去。まさか、という思いでざっと背を悪寒が走る。

「……………貴方に責任は無いわ。あちら側の勝手な理由だから」

顔色を変えた咲月に、紅姫は断言する。

「でも、確かに貴方は狙われていて、葉月は貴方を守るために闘っている。今、必要以上の血を必要としているのは戦闘による消耗を補うためよ」

何で自分が狙われているのか。その理由は、まだ聞いていない。

が……………血も繋がっていない おそらく義父母らとも無関係であろう 種族さえ違う、真実他人であるはずの咲月を、自分の命を危機にさらしてまで守ってくれている。

……………何かしら おそらく、思惑の様なものはあるのだろうか…

…今は、それでも良かった。

そんな風に思える自分は、普通じゃないかもしれない。

でも、もうそんな事はどうでも良かった。

「実は……、通信系で何か始めようかと思ってるんですけど……」
咲月は、食事を終えた葉月におずおずと相談事を切り出した。

月の腕輪

「へえ、ウエブデザイン講座……、かあ」

郵送で届いたスクールの資料を手に、興味津々にカラフルなパンフレットに見入るのは、命の危機だと紅姫が言っていたはずの人物で。

「ウエブ……とは……」

パンフレットに印刷された文字を、細部まで注意深く読みながら、よく分かっていない様子で眉間にしわを寄せる葉月に、

「厳密には違うけど……大雑把に言っちゃえばインターネットの事だよ」

と、朔海は少し得意げに言う。

「……はあ、いんたーねつと……、ですか……」

しかし、それでもまだ訝^{いぶか}しげな様子の葉月に、朔海は苦笑いを向ける。

「……あー、そこから説明しないとダメ？」

「いえ、……とりあえず、コンピュータ関係の用語でしたよね……」

ゴホン、とわざとらしい咳払いで誤魔化しながら答えるが、葉月の視線は微妙に宙を泳いでいる。

> i35162 — 183 <

と。

「お待たせしました、サラダセットのサラダでございます」

小ぶりの白い皿に盛られたグリーンサラダを一つ、盆に乗せたウェイターがテーブルの前で立ち止まり、手前に座る葉月に声をかけた。

葉月は、助かったとばかりに表情を緩め、

「ああ、はい 私です」

と手を挙げた。

「……案外早かったな」

「最初の一品目が運ばれて来たのを見て、朔海はテーブルに広げていたパンフレットの山をまとめ始めた。

「まあ、平日ですからそう混んでもいませんしね」

早速、フォークを手に取り、

「では、お先にいただきます」

と、和風ドレッシングのかかったレタスを口へ運ぶ。シャリシャリと良い音を奏でつつ咀嚼そしゃくする彼の隣で、

「でも確かに、こういうのをやりたいなら、通信講座のが良いかもね。この辺、田舎だから……」

パンフレットを片づけながら朔海が言った。

「僕もそんなに詳しい訳じゃないけどさ、ソフトもついてあの値段でしょ？ 確かああいうソフトって、普通に買うと滅茶苦茶高かった覚えがあるんだよね。……ああ、始めるならパソコンも新調しなきゃだよな？」

少し、遠慮がちに頷く咲月に、

「善は急げって言うし……、この後電気屋へ行ってみる？」

朔海は尋ねる。

「あ……、でも……」

咲月は、そろそろと窓の方へと視線をやった。

壁面の大半を占める窓ガラスのその向こうには、雲一つない快晴の青空が広がっている。今はまだ夏ではないが、それでも昼過ぎの日差しは目に眩しく、窓の一部には日除けのブラインドが下ろされている。

普通の人間からすれば、今日は天気も良く、暖かくて過ごしやすい一日なのだが……。

「ああ、そうか。ネットも引かなきゃだよな」

つきつきしながら言う彼も、ついていけない話題に渋い顔をしながらサラダを食べ進める葉月も、太陽を苦手とする吸血鬼……の、はずだ。

「お待たせしました、スープセットのコーンポタージュスープでございます」

「あ、僕です」

湯気の立つスープをスプーンに掬い、息を吹きかけ冷ます朔海の隣で、ドリンクにさしたストローを咥えていた葉月のコップから、ズルル、と間抜けな音がした。

さっきまでアイスコーヒーが入っていたコップは、氷だけを残し空になっている。

「すみません、ちょっと……ああ、咲月さん、ついでに新しい飲み物を淹れてきましょうか？」

だいぶ前から空になっていた咲月のコップに気付いていた葉月が気を利かせる。

「あ……、はい、お願いします」

「あ、葉月、僕のもついでに入れて来てくれない？ オレンジジュース」

「咲月くんは何にします？」

「じゃあ、カルピスで……」

三人分のコップを両手に、葉月はドリンクバーコーナーへ向かう。「うん、善は急げっていうし……。葉月も仕事の日はあまり外へは出たがらないから……。まあ、安い買い物じゃないからね、取りあえず下見だけでもして行かない？」

彼の目に、外の陽気が映っていない筈はない。

「お待たせしました、まぐろの漬け丼と小うどんのセットのお客様様」

と、メインの料理を乗せた盆を持ったウェイターが三度テーブルの前へ立った。

「あ、ここに……。今、ドリンク取りに行ってるんで……」

井とうどんの小鉢、茶碗蒸しとみそ汁ののった膳を片手で持ち上げ、ウェイターが空の席へ置く。

「……ふわふわ卵のオムライス、デミグラスソースがけのお客様」

「はい、僕です」

手を挙げる朔海の前に、お洒落なお皿に盛られたオムライスを置き、

「……こちら、鮭ときのこのクリームスパゲッティでございます
最後に残った皿を、咲月の前に置く。」

「……以上でご注文の品は全てお揃いでしょうか？」

「はい」

ウェイターは、空になったスープとサラダの皿を盆に乗せ、伝票を挟んだバインダーをテーブルの端に置き、

「ごゆっくりどうぞ」

と言い置いてその場を立ち去る。

ウェイターとちょうど入れ替わるように葉月が飲み物を持って戻ってきた。

「おや、料理が来たんですね？」

朔海の前にオレンジジュース、咲月の前にカルピス、自分の席にコーヒーを置き、席に着きながら、テーブルに並んだ料理を見回し
て言う。

「……それにしても……相変わらず、好きですねえ、そういうの
さつそくスプーン一杯にとろとろの卵を掬って頬張る朔海に苦笑
を向けながら、葉月は言った。

「この間、買い物へ行つたときに頼んでいたのは……あれは何で
したっけ？」

「やだなあ、先週の事なのにもう忘れたの？ ボケるにはまだ早
いんじゃない？」

朔海は口をとがらせながらも、

「ミートソーススパゲッティのケーキセットだよ
と答える。」

「まあ、可愛らしいですけどね……」

クスクスと、肩を震わせながら笑いを堪える葉月に、朔海は、

「可愛いとか言うな！」

拗ねたように言う。

「…………あの、お食事中に何なんですけど。…………これ、迷惑じゃなかったら…………」

そんな二人のやり取りに思わず口の端が緩むのを堪え、微妙に引きつらせながら、咲月はそっと包装紙に包まれた小さな包みを二つ、差し出した。

「え…………、何コレ？　くれるの？」

「何でしょう？」

食事の手を休め、渡された包みを丁寧に開くと

「これは…………ブレスレットですか…………」

「そういえばこないだ手芸コーナーで何か買ってたよね？　…………もしかして手作りだったりする？」

遠慮がちに頷く咲月に、

「凄い、売ってるモノみたいだ…………」

「！、それに…………このトップの天然石は…………ムーンストーンですね？　しかもこれは…………かなり上質なものです。こんな高価そうなものをどこで？」

葉月は感心して尋ねたが、その問いに逆に咲月が驚いた。

「え？　そんなはずは…………だって…………それ、前にお世話になってた家の近くにあった古い小さな雑貨屋で、一つ二百円位で売ってたものなんですけど…………」

「え、二百円？　そんな馬鹿な！」

「それが本当なら、かなりお得な買い物でしたね。しかし…………良いのですか？　買ってしまっても…………」

たとえ小さくても、これだけ質の良い石ならば、それなりの値がつく。

だが、その問いには迷うことなく咲月は頷いた。

「私…………、昔からこういうのだけは得意で…………」

向けられる二対の視線に、若干決まり悪そうに視線を泳がせながら

「その……、もっと練習して上手く出来るようになったら……シヨップを……ネットシヨップを開きたいんです……」

一週間、考え抜いた上で出した答えを口にする。

「そっか、だからウェブデザインの勉強を……」

「……では、有り難くいただきますね」

納得したように頷く朔海の隣で、葉月は早速左手首にそれをはめる。

「古代インドでは月が宿る聖なる石として崇められたと言われるムーンストーン……。夜を照らす月の光が宿り、持ち主の悪夢を追い払うとも言いますね」

葉月がさらりと博識な一面を見せる。

「……悪夢、を」

朔海は僅かに顔を俯け、複雑な表情でグッと石を握りしめて、ぽつりと小さくこぼした。

しかし、すぐに満面の笑みを浮かべて前を向き、

「うん、ありがとう」

その白く華奢な手首にブレスレットをはめた。

「大事にするよ」

感情（おもい）の種類

「で、朔海君。……例の件ですが」

夜。念願の鍋料理を美味しく頂き、皆でカードゲームをたっぷり楽しんだ後で。入浴のため席をはずした咲月を欠いた食卓で、ホカホカと湯気の立つココアを啜りながら、葉月は低く潜めた声音で切り出した。

「……ああ」

咲月の前では常に絶やさなかった満面の笑顔を哀愁たつぷりの笑みに変え、朔海は椅子を立ち、居間のカーテンを開け満月の浮かんだ夜空に左手を翳す。

「……まあね。結婚って言ったって、そこは人間界とは違う。良くも悪くも……ね」

シヤラリと、手首を滑るムーンストーンのブレスレットが月明かりを浴び、美しく輝きを放つ。そう、まるでもう一つの満月が、そこにあるかのように。

「でも……、やっぱり僕には無理だ。たとえば 自分の命を天秤の片皿に乗せられていたとしても」

手元の月と、夜空に輝く満月とを重ねながら、朔海は寂しげな笑みを浮かべた。

「……彼女の事、最期まで見守れなくなった事は……勿論、物凄く悔しいけど。無責任だって、分かってるけど。……でも、それでも……僕には……」

下ろした右手の拳を強く握りしめ、朔海は唇をかむ。

「夜を照らす月の光が宿り、持ち主の悪夢を追い払うというムーンストーン。月の満ちている時身につけると将来の恋人に出会えるとも言われ……恋人への贈り物にされる場合がままあるそうですが……」

葉月は、そう言いながら、自分のブレスレットを撫でさする。

「……折しも、今夜は満月ですね。……もしかしたら、おまじない効果で案外あっさり見つかるかもしれないよ？ 運命の恋人が……」

「この悪夢を払い、最愛の恋人を　？　だとしたら……僕は彼女に一生分の感謝を捧げるよ。僕の全てを賭けても良い……」

そつと、石に唇を寄せて呟くのを眺めていた葉月は、ため息をついた。

「僕の、最期の願いだ。頼む、彼女を……」

「……残念ですが王子、そうおいそれと頷ける状況でもなくなっていますよ」

そう言つて、懐から取り出した一通の書状をスツとテーブルの上に置くのを、ガラスに映りこんだ像の中に見た朔海は振り返り、それを手に取る。

既に開封済みのそれを開け、ざつと中身を一瞥する。

「ここ連日、毎日の様に刺客が送り込まれています。これまでの所は、一応全て彼女に気付かれる事なく始末しておきました。……しかし」

見る見る間に表情を凍らせる朔海。

「葉月、身体は大丈夫なのか？」

「……まだ、今のところは何か。ですが、このままこのペースで刺客が送り込まれ続けるようなら……」

「………すまない」

朔海は、心底辛そうな表情で吐き出した。

「………僕の頼みなんか、断つてかまわないんだ、これ以外ならでも」

心の底から、絞り出すような声で……。

「でも………彼女を放り出すなんて………できない………」

一口、湯気の立たなくなったココアを啜り、小さくため息をついて葉月は苦笑を浮かべ、

「分かっていますよ」

溢れ出してくる朔海の感情を一言で受け止める。

「私としても、あの男の良いようにはさせたくありません。……私の力も、命も、全て私の物であり、あの男の物ではない。あの男にだけは、何一つくれてやりたくはありませんから」

普段温厚な彼には珍しく、憎悪さえ垣間見える低い声で葉月は言い切った。

「………血、要るか？」

そんな葉月に、朔海は尋ねる。

「………吸血鬼の魔力は血に宿り、その源は心臓に宿る。自分より強い魔力を持つ者の血を　心臓を食らえば、その力を自分の物にできる。葉月は僕なんかよりずっと強い魔力を持っているけど……」

一瞬、言いにくそうに言葉を切った朔海の代わりに、葉月が続きを継いだ。

「………私の体に流れる血の半分は、人間の血です。日光に対する耐性など、メリットが無いわけではありませんが……、本来、人間の血を引く吸血鬼の魔力はそうでない者に比べ、はるかに劣る。ですが、何の因果か過ぎた力を持って生まれてしまったばかりに……私の体は、その強すぎる魔力に耐えきれない」

淡々と、表情も変えずに語る葉月に、

「………僕の血なら」

手を心臓の真上に置き、その鼓動を手に感じながら朔海は静かに言った。

「古の始祖の血を、一番色濃く継ぐ王族の血を引く僕のこの血があれば……その身体、純血の吸血鬼と遜色ないもの出来る筈。そうなれば……紅姫や青彦の力に頼らなくとも、その力を存分に振るえる筈だ」

「………」

無言のまま押し黙ってしまった葉月に、

「どうせ、後一年限りの命だ。……葉月、どうする？」
朔海は再び問いかけた。

……
たっぷりの沈黙の後で、

「……私が」

葉月は唸るように言った。

「私が、そんな話を承服すると、貴方は本当に思っているのですか？」

「……いや、これっぽっちも。」

怒りをあらわにする葉月に、朔海は軽く苦笑を返した。

「……でも、何らかの打開策が必要な事は確かだ。そしてこれは、その選択肢の一つ」

だが、かなり有効な手であることは間違いない。

「では、私も一つ、貴方に問いましよう、王子」

「……？ 何だ？」

怖いほど真剣な目つきでこちらを見る葉月の視線に気圧されながら、朔海は聞き返した。

「貴方が今、彼女に対して抱いている感情は何ですか？」

「え？」

突然の問いに、朔海は怪訝な顔をする。

「同情ですか？ それとも友情？ もしくは……恋情」

が、それに構う事なく葉月は彼を問い詰める。

「れ、れれれれ、れ、恋情！！??」

いきなり飛び出た言葉に朔海は思わず声を潜めるのも忘れて叫んだ。

「まさか！ そんな！」

「では、何です？ 貴方が彼女に抱く感情のその名は……」

「なっ、何だいきなり！ 今はそんなこと関係ないだろ、僕の気持ちなんか……」

「大いにあるから、こうしてお尋ねしているのですよ」

「…………え？」

葉月は、一呼吸の間を置き、言った。

「何もかも、全てが上手くいく方法が、たった一つだけ存在します」
大きく、ため息と共に。

「……本当は、言つつもりは無かったのですがね」

「それは…………」

朔海は、期待を込めて尋ねる。

「…………ですが、殆ど机上の空論とも言うべき方法です」

しかし、葉月はそれを冷たく突き放した。

「これを成功させるには何より、貴方と、咲月君の気持ちこそが重要なんです」

葉月は、これ以上ないほど真剣な面持ちで尋ねた。

「…………朔海君。貴方が、彼女に向ける感情は、何ですか？」

「……………」

「……………」

「…………と、こつという訳なんですけど」

廊下の壁に半分身体を預けながら、無意識に、身体をさする咲月の足元で、紅姫が言った。

「…………何か、質問は？」

「全てが上手くいく方法って、何？ 今、私にできる事は、何？」
息を詰まらせる咲月に、紅姫は静かに言った。

「…………全てを、受け止めて、受け入れる事。ただ、それだけよ」

男たちの語り

「ふーん、言ったのか。へえ、で、坊ちゃんの反応は？」

畳敷きの八畳間。押し入れの襖ひすまと、廊下へ出るための引き戸、そして申し訳程度に設けられた、格子付きの小さな窓には斜光フィルムが張られている。

「……考える時間をくれ、……と」

周囲の壁に、それら以外の物は何一つない。 絵やポスター等はもちろん、カレンダーの一つも無い、飾り気のない壁面。

「まあ、な。はいそうですね、と二つ返事で頷ける様な話じゃない。……それは当然だろう。何せ、人一人分の人生丸ごと、一生背負わなきゃならないわけだからな」

何も無い。家具すら 机もタンスもテレビも、本当に何も無い部屋に、ポツンと布団一式だけが敷かれている。

「出来る事なら、そんな重荷を背負わせたくは無かった」

その布団の上で、適当に着崩した浴衣に身を包み、あぐらをかけた葉月は悔しげに呟き、ため息をついた。

「ですが……そんな事を言っている場合では無くなりました。全ては、命あつての物種です。彼を、失いたくはありません」

「……で？ お嬢ちゃんにはどう説明する？」

問われた葉月は、

……
「……」
咄嗟に応えられず、沈黙を返した。

「……私は、既に何度もそれに失敗して来ました。最たる例が、青彦 いえ、葉月……君と……そして双葉です。君は誰よりもそれを、良くご存じのはずでしょう？」

「……どうかな？」

昔を懐かしむような目で、どこか遠くを眺めて彼は言った。

「確かにあの時の俺はその事実を拒絶した。でもな、それはお前が吸血鬼だったからって事より、あいつが……双葉が想いを寄せたのが俺じゃなく、お前だったって事に嫉妬したからってのが一番大きい」

自嘲する様な笑みを浮かべ、

「まあ、勿論、想いを寄せた相手が実は人間じゃなく吸血鬼だったって事が全く関係なかった訳でもないが……それと知る前にお前の人となりをもっと良く知ってれば、今と違う結果が得られたんじゃないかって、今の俺は思う」

尻尾を揺らめかせる。

「少なくとも今の俺には、お前が吸血鬼だろうが狼男だろうが悪魔だろうが、中身がお前のままならそんな事は些細な事に思える。……ああ、でも、さすがに腐れかけのゾンビだけはご免こうむりたいけどな」

ククツ、と黒猫は笑った。

「あいつだって、お前の正体を知りながら、それでもお前に恋したその想いが俺に向く事は、この先もうあと何百年、何千年あったって変わりやしねえ。今でも、あいつがそういう意味で見るのはお前ただ一人だ。……俺はあいつの幼馴染で、あいつの相棒。どうしたってそれ以上にはなれねえ」

揺らめく尻尾にたつぷりの哀愁を漂わせ、青彦は言った。

「確かに、あの時俺達は失敗した。そのせいで、一番望ましい形からは外れた。でも、結果的にはこの通り、そこそこ上手くいってる。……そうだろ？」

痛みを堪えるような表情をする葉月の膝を前足でぼんぼん軽く叩く。「俺達は、順序を間違えた。けど、そこさえ俺達で上手くフォローしてやれば、坊ちゃん達は上手くやっていけるんじゃないかと、俺は思うぜ？」

そして、エヘンと一つワザとらしい咳払いをした後、

「むしろ、問題なのが……お嬢ちゃんがあ坊ちゃんに、男

としての魅力を感じられるかどうかだな。好みの男のタイプ……あなたのお嬢ちゃんがどんな男を好きかは知らんが……こればかりは他人が口出ししてどうなるってモンでもないしな……」

と、無責任な事を言う。

「全く、珍しく良い事を言ったと思っただら……。まあ、これで槍は降らずに済みそうですね」

思わず苦笑を洩らし、葉月は無意識に強張らせていた身体から力を抜いた。

「よし、その辺の女ゴロ口ってやつを明日にでも紅姫にご教授願おうじゃないか。もちろん、坊ちゃんも強制参加だな」

冗談めかして言いながら、青彦は小さな窓を見上げる。

「……さすがだな。普段は惚けたフリしてても、純血の王族の血の力は絶大だ。全く、本人にその自覚がないのが玉にキズなんだよな」

と、「ぐうっ……」と低く呻く声が耳に届き、それまで不快な殺気を纏っていた者の気配が途切れる。

「あれ一匹倒すのに、こっちにはひいこら言ってるつてのによ。大して汗もかかずにノックアウトしちまうとは……。ありゃ、パツクの差し入れも必要なさそうですね？」

少々恨みがましい目で窓を見つめる彼に、葉月はメガネをはずし、「ですが、彼の真価はそんな所にはありませんよ」

静かに微笑む。

「そうでなくては、私は彼にお仕えなどしていません。まあ、魔界の連中の目は皆、節穴なんでしょうね」

身を削って刺客退治をしていた葉月に、当分の休養を命じ、その間この家へ泊まりこんでの刺客掃除を申し出た朔海。

「そうですね……。もし、全てが上手く運んだとして、連中が一体どんな表情をするのか……是非見てみたいものです」

天井から下がる電灯の傘から伸びたひもを掴んで引っ張り、明かりを消す。

例え明かりを消したところで、吸血鬼である彼の目には少々色味が落ちた白黒に近い世界がそのまま広がるのみ。

葉月は枕を手繰り寄せ、掛け布団を引きよせながら布団へ横になり、ククツと冷たく笑った。

詐欺みたいな話

ミルクの香りのする乳白色のお湯に、冷えた身体を沈め、咲月はバスタブの淵に行儀良く座る白い猫　紅姫と　曇る事のない鏡の中の世界とを見比べ　彼女らが、現代社会では寓話ファンタジーとされる類の生き物が実在する事実を目の当たりにし、十分過ぎる程にそれを思い知らされた。

「葉月さん達が吸血鬼ってのは分かったけど……、でもじゃあ貴方達は……何なの？」

バスタブに浸かる自分以外、何も映らないその鏡像を、感慨深く眺めながら、咲月は尋ねた。

「私達は葉月の使い魔よ」

「　　使い魔？」

そのテの小説や漫画ではよく目にする用語だ。……が、それぞれ作品ごとに設定がまちまちで、漠然としたイメージはあるものの、いまいちピンとこない。

「そうね……。確かに使い魔と言っても、色々いるから……」

どう説明したものか、しばらく思索するように尻尾を揺らし、

「大雑把に分けると三種類あって……」

考え考え話し出す。

「一つは　魔獣や魔物、精霊なんかを屈服させ、自分の従僕として従えたもの。これは……勿論、主人となる者の技量次第ではあるけど、それに見合う力がありさえすれば、正直、本人以外の全てがそれとなり得るから……姿形はもちろん、能力も皆千差万別。数え上げたらキリが無いわね」

咲月は、語られるその内容に興味津々に耳を傾ける。

「もう一つは　自分の力を具現化したもの。……この場合、更に幾つかの種類に分かれていて……。自分の肉体の一部を切り離し、自分の分身として生み出したものと、自分の持つ魔力を形として具

現化させた、いわゆる人形ひとがたとあるの。……まあ、人形って言っても、人の形をしているとは限らないのだけど……」

「最後の一つが 魔術なんかを行使して生み出す、仮初かりそめのもの」
けれど咲月は、もともとこう言った話は嫌いではない どころかむしろ好きな方だった。そう、それこそ本屋で立ち読みする位には。

「でも……私達はそのどれにも当てはまるようで、厳密には違う。あちらの世界でもかなり特殊な存在なの」

使い魔というものについての説明を一通り終えた上で、しかし紅姫は言った。

「私達は……もう四百年以上昔の話になるけど……元は普通の人間として生まれた……その頃の私の名は、双葉。青彦は、元は私の幼馴染で その頃彼が名乗っていた名前は……葉月。今はもう、お互い人に譲って捨てた名前だけど……」

彼女の言葉の中の、その突っ込みどころの多さに、咲月はどこをどう突っ込んで聞けば良いのか迷いながら、

「それって……」
目の前の白い猫をジッと観察する。

「……彼の本当の名は、白露。 本人はその名で呼ばれる事を嫌うけど」

「よ、四百年……？」
そして、口からこぼれたのは一番突っ込みたかった部分。

「彼、ああ見えてもう七百歳近かったはずよ？」
事も無げに返された答えに、咲月は恐る恐る尋ねてみる。

「……え、……じゃあ……もしかして……」
「あの、彼も？」
「朔海様？ そうね、三百歳の誕生日を祝ったのは……何年前だったかしらね……」

あ、朔海君ていうのはボクの友人でね。年は……まあ、一応

君と同じ……みたいなもん……なんだけどね……

蘇る、あの日の葉月の言葉。

「……な、何……一体……どこが……同じ……みたいな……歳……!？」

最近、巷では歳の差カップルとやらが持て囃されているが……一回り、二回りどころか……何倍、いや

「に、二十倍近く年上なんじゃない!」

まさに、ギネス確実　　というか人間同士ではとうていありえない歳の差だ。さすが、吸血鬼……とでも言うべきか……が、しかし。気持ちは分からないでもないけど……。うーん、そうね、吸血鬼は寿命が長いから……。人間の身体は一年で一歳分の成長なり老化なりしていく訳だけど……。人間の一歳分成長・老化するのに彼らは二十年の年月がかかるの。彼らの年齢感覚では……朔海様は人間で言う十五、六歳に当たるし、葉月は三十代半ば頃、って事になるかしら……」

予想以上にショックを受けたらしい咲月が、頭のとっぺんまで湯の中に沈んで行くのを見た紅姫は、

「私も、初めて彼の実年齢を聞かされたときは結構取り乱したもので……」

苦笑いを浮かべつつフオローする。

「だって、そうよね……。私と大して変わらない歳だと思って付き合ってた人が、実は村で一番長生きのおサヨ婆よりずっとずっと年上だったなんて……詐欺じゃないの!?　って散々拗ねて怒って膨れたわ」

クスクスと笑う紅姫。そんな彼女に、咲月は、

「……え、付き合ってた?　……葉月さんと?」
不思議そうな目を向けた。

「ええ、そうよ。……訳あって、こんな姿になってしまったけれど、それまでは普通に恋人同士のお付き合いをしていたのよ?　……この姿になってからは、さすがに普通のお付き合いは出来なくなっ

しまったけれど、心の上では今でも……私と葉月は恋人同士」

そんな咲月に、紅姫は胸を張って言った。猫の姿をしているのに……そう語る彼女の瞳は、まるで恋する乙女の様……いや、確かに彼女は一人の男性を一途に想う一人の大人の女性なのだろう。しかし、幸せそうに語る彼女のその瞳には何故かうつすらと影が差す。

少し、寂しげな笑みを浮かべ、彼女はその訳を口にした。

「……あの日から……ずっと……今でも……後悔し続けている事があるの。私や青彦が、こんな姿をしているのも、……葉月が、貴方に事情を話したがない訳も、全部そこに起因している事……」

「後悔……していること？」

紅姫は、ゆっくり頷きながらお湯にふやけてしわだらけになった咲月の指先に目を留め、

「昔……昔の話よ。話せば長いことながら……って言うけど……」

……本当に、数百年単位の昔の話。本当に長い話になるから……」

とにかく、湯からあがって着替えるようにと促した。

「……もし貴方がこのままお風呂でのぼせても私じゃどうにもできないし。……助けくらいは呼んであげてもいいけどね……。でも……」

……」

今この家で、彼女が助けを求めに行くとしたらその相手は果たして誰なのか。

話の続きは物凄く気になったが どちらにしる……それはもっと困る。

咲月は彼女の忠告に素直に従うしかなかった。

独白

「お風呂あがったの？ ……つて、あれ？ 紅姫？」

そそくさと寝巻きに着替えて廊下に出ると、玄関の開く音がして、間もなく朔海が廊下の角から姿を現した。

……三百歳。

たった今聞かされたばかりの衝撃の事実がまだ上手く消化できずにいた咲月は、いきなりの遭遇に言葉も無く、ただこくこくと頷くしかない。

だが、咲月の心の内の事情など知る由もない朔海は、彼女の足元の白猫を不思議そうに眺めた後で、水滴の滴る咲月の髪へと視線を移し、

「あー、また……。いい加減な乾かし方をして……」

と、眉をひそめた。

「あつ、えつ、その……」

混乱した頭では、釈明しようにも上手く言葉にならない。

「……………」

一拍、そんな咲月をジツと黙って見ていた朔海だったが……

「え、ちょ、あ、え!？」

少々強引に咲月の手を取り、つかつかと階段を上って二階へ上がる。

「ド、ドライヤー、を……部屋に、忘れて、来た、だけ……なん、です、け、ど〜!」

……これではまるで、先週の再現だ。

しかし、今、あのシチュエーションに耐えられるだけの心の余裕は 皆無だ。

咲月は必死に逃れようと叫ぶが

「……………行かないで」

ギョツと、繋がれた手が痛いくらいに握りしめられる。

> i35165 — 183 <

「……頼むから……逃げていたり……しないで……」

そして、小さく呟かれた、声にならない言葉。

ぼそりと、声帯をすり抜けた空気が辛うじて口腔内で言葉になり、こぼれ落ちた彼の心の叫び。

いくら静かな家の中とはいえ、普通であれば余程注意して耳を傾けていない限りはまず聞き逃してしまうであろう、小さな叫び。

だが。

こぼれた言葉はほんの僅かではあるが、確かに空気を震わせた。

……そして。

咲月は、これまで空気を読む術を必死で磨き続けてきただけあって、どんなに些細であっても、その変化には敏感に反応する。

酷く辛そうに呟かれた彼の独白を耳にした瞬間、咲月は無意識のうちにフツと全身の力を抜いていた。

彼の叫びは……これまでの自分にとってあまりに身近にありすぎたものだったから。

ふと、抵抗を止めた彼女に朔海はホツと心の中だけで安堵のため息をつきながら、背後の彼女を振り返り、ジツと何かを見定めようとする彼女の真剣な眼差しと力ち合い、彼の心臓は一拍、大きくドクンとはねた。

ふわりと漂ってくるカモミールの香りが、鼻をくすぐる。

それは、シヨッピングモールへ買い物へ出向いた際の事。何を買うにも、まず値札に目をやり、一番価格の低い商品しか手に取るうとせず、値段以外の何一つ気にしようともせず購入しようとする彼女に代わって選んだシャンプーとボディソープの香り。

甘い、リングゴに良く似た香りが、葉月に迫られた決断に揺れ動く心を心地よく均なしくしていく。

彼女の全てを一生かけて背負う……それだけの覚悟を決められ

るだけの何かが、貴方が今彼女に向ける感情おせいにありますか？

まだ、遠慮がちな態度は抜けきらないが、それでも彼女の朔海に対する態度は好意的なものである。勿論、そういった意味は含まぬ“好意”ではあるが……。

彼女の傍に居たい……。

今、朔海にあるのはただそれだけの、実に単純明快な願いのみである。

それが、どういう類の想いかなんて……。

「あの、一つお願いがあるんですけど」

互いの目を見つめあったまま固まっていた空気を、そう言って先に破ったのは咲月の方だった。

「……今度、チェスを教えてくれませんか？」

「え？」

「この間、葉月さんに聞いたんです。よくチェスをやるんだって。でも、私チェスのルールをよく知らなくて……。だから、今度チェスを教えてもらえませんか？」

まるで、決死の覚悟を決めたかのような必死な表情で彼女は言った。

「UNOやトランプは、二人じゃ面白くないから。そう言って、葉月さんが碁盤と将棋盤を出してくれんたんですけど。でも、あなたは、チェスの方が得意だって葉月さんが……。」

突飛な発言である事は、彼女自身気づいているのだろう。

普段なかなか感情を表に出さない彼女には珍しく、風呂上がりでほんのり赤かった頬を更に朱に染め、あわあわと必死に言い繕う姿がなんだか可愛くて、朔海も表情を緩め、

「ああ、いいよ。ちようどしばらくの間居候させてもらおう事になっ

た訳だし」

自分の呟きに、彼女が気付いた事に気付かず答えた。

「……でも、その前に髪を乾かすのが先だよ」

言われて、咲月はハツとして一瞬固まった。しまった、墓穴を掘った。しかし、あの苦しい訴えを聞いてしまった上、自らの頼みごとを快く引き受けてもらった今、自分の手を包みこむその温もりを振りほどく事は 出来なかった。

ポーンと女王（クイーン）

どうして、こんな事になったんだろう……。

素朴な木材に繊細な細工の施された十六個の駒を、向かいに鎮座した朔海の手元と見比べながら、彼の陣地に並べられた駒と対称になるように並べてながら、咲月は考えた。

「あ、ちよつと待った。えつと、言い忘れてた……。日本の将棋と違ってね、駒は対称の配置にはしないんだよ。……って言っても、キングとクイーンの位置だけの話だけだ」

先日購入したコタツの上に置かれた白黒市松模様のチェスボードの上に並ぶ、白と黒の三十二個の駒。

「えつと、じゃあまず基本的なそれぞれの駒の動きから……」
自陣の右端のルークをつまみ、ボードの中央に置く。

「これはルーク。“城”って意味なんだけど……そうだね、動きとしては将棋の飛車と同じでね、縦横にどこまででも進める」
彼の説明に、耳を傾けるフリをしながら、咲月は思い悩む。

どうして、こんな事になったんだろう……？

適当に崩した足の上では、小さく丸まった白い猫が一匹くつろいでいる。ふと、視線を落とすと、彼女は小さな牙を見せつけながら大きなあくびをした。こんな姿なりでも、彼女は元は歴とした人間の少女だったと言っただ。

……しかも。

「次に、この馬の形の駒がナイト……つまり、騎士だ。これが、ちよつと特殊な動きをするんだけど……」

ルークを引っ込め、次にナイトを中央に引き出し、説明を続けるこの彼は、なんと三百歳の吸血鬼だというのだ。

……衝撃の事実を、出来る事なら一人じっくり噛みしめ、消化・吸収するだけの時間が欲しかった。

「で、これがビショップ 僧侶だ。これは将棋の角と同じで……」

紅姫の話だつて、まだ途中なのだ。……まさに、物語の一番良い所で「次巻へ続く」の文字を目にした時の様な気分。それに。

……行かないで。……頼むから……逃げていたり……しない
で……。

彼がこぼした独白は、未だ生々しく耳に残っている。

何故彼は、あんなにも辛そうだったのだろうか？

彼が真実、吸血鬼であるとしたなら……「逃げないで」という意味は分かる。本当に吸血鬼なんてものに遭遇したなら、たいていの人間は恐れおののいて一目散に逃げ出すだろうから。

でも、辛そうに吐き出された「行かないで」の言葉には、ついこの間まで忌避され続けて来た咲月が感じていた拒絶される心の痛みに似た痛みが詰まっていた気がする。

「これがクイーン……女王。このゲームで最強の駒だ」

彼が吸血鬼だとして。吸血鬼が実際にはどういった生き物なのか、まだ聞いていないけれど。よくある、ありきたりなファンタジー小説ではほぼ確実に人間を超越した数々の能力を有した生き物、という事になっている。

「そして、これがポーン、兵隊……将棋で言う歩兵だ」

そう、将棋の駒に例えるなら彼はクイーンで、咲月はポーンといったところだろう。

……そんな彼が、どうして咲月に拒絶されることをあんなにも恐れるのだろうか？

疑問は、尽きることなく次から次へと湧いて出てくる。

今にも許容量をオーバーしそうな頭の片隅で、必死に駒の説明に耳を傾けつつ、咲月はまだ少し熱を孕む髪を指で梳いた。

するりと指通りの良い髪が、さらりと流れる。

今までの手入れの悪さは隠しようもないが、一週間続けたトリートメントの効果は観面だ。

咲月は、すぐ目の前にある朔海の綺麗な顔を改めてまじまじと眺

めた。

「基本的には前に一マス進めるだけなんだけど……一番最初の定位置から動かす時だけ、二マス進めるんだ……けど……、えっと、どうかした？」

彼女の視線に気付いた朔海はそわそわしながら尋ねた。

「どうして、こんな事になったんだろう……？」

そう思っていたのは何も咲月だけではなかった。

「え、いえっ、何でも……」

パツと慌てて視線をそらした咲月に首を傾げつつ、朔海は駒の説明に集中しようと一生懸命だった。

ドクバク暴れる心臓の鼓動。耳に木霊する葉月の言葉。ちょっと手を伸ばせば触れられる場所にいる咲月。ついさっき触れた、彼女の髪の毛の感触。ぐるぐる頭をかきまわす欲情。

「どうして、こんな事になったんだろう……」。

髪だけ乾かしたら、すぐ解放するつもりだったのに。

……チェストの引き出しにしまってたはずのチェスセットが、何故かチェストの上に出っぴばなしになっていて、それに。

朔海は、咲月の膝の上に居座る紅姫を軽く睨みつける。

「一体、どうして紅姫が咲月の傍に居るのだろう？」

何か、下手に粗相でもして正体がバレでもしたら笑いごとでは済まないのに。

「……………」

ふと、会話が途切れる。

「……………で、あとは……………入城って、ちょっと特殊なルールがあった……………」

お互いの息使いと時計の秒針の音。それらを除き、殆ど無音の部屋の中、漂う微妙な空気に耐えきれず、朔海は必死に言葉を継いだ。

「……………で……………、一応これで一通りのルールは説明したと思うんだけど……………」

微妙に齒切れの悪い彼のセリフに、咲月の膝の上に居座ったまま、紅姫がため息にも似たあくびを繰り返す。

「まあ、駒の動かし方を覚えただけじゃ、この手のゲームは面白くないから。後は練習次第……ってとこだね」
ちらりと、背後の時計に視線を向ける。

「今晚はもう遅いし……続きは明日にしようか？」

その、朔海の申し出に、咲月はホッとした様に頷いた。

「……はい。すみません、こんな時間まで」

時計の針は、いつの間にか天辺を通り越していた。 もうじき、

“草木も眠る”時間だ。

ギクシャクと、ぎこちないお辞儀を繰り返しながらいそいそと部屋を出る。

正直、拳動不審といっても過言ではなかっただろうが……そんな彼女の拳動を一々気に留める程の余裕は、朔海の方にもありはしなかった。

お互い、自分の事で一杯一杯だった。

……咲月の膝から滑り落ちた紅姫が、スッと閉じたままの部屋のドアをまるで幽霊か何かの様にすり抜けた事も、それを確かに目にしたはずの咲月が驚いていなかった事も、彼女が部屋を出て行くのと入れ替わりに、青彦がするりと部屋へ入って来た事も、朔海はその目で確かに捉えながら、まったく気づいてはいなかった。

紅き狼

「……また、失敗したのか？」

そう問われた彼は、床に額が着くほど深々と頭を垂れ、

「はっ、もっ、申し訳ございません！……半吸血鬼であるとはいえ、仮にも龍王の血を持って生まれたあの者の力は侮りがたく

……」

床にだらだらと脂汗を落とし、そのあとを広げながら喉に悶えた声を無理やり絞り出した。

「……龍王の血の持つ莫大な力についてなど、今更そなたに講釈されんでもよく知っておる。だからこそ、その血を欲しておるのだらう」

静かで穏やかな声が、広間に響き渡る。

「……現王の正妃の第一子は能無し。第二子はそこそこ出来るよ。うだが、伴侶はまだ無い。妾腹の子供どももまだ数少ない……。今こそ、王位を篡奪するに相応しい絶好の好機。……そなたも、そう思うだらう？」

「も、もちろんでございますとも、紅狼様……、」

低頭平身の体で同意の意を示す男を、緩やかな微笑を浮かべながら見下ろし、次いで広間に整然と並ぶ己の私兵たちを端から端まで眺めていく。

「現王家一族以外では、唯一始祖の直系の血を代々受け継ぐ我が一族の長である我が力を持つてすれば、あの憎々しい現王、紅龍ごとき一ひねり。……だが、我が手の内にある真の『龍王』の力を真実我がものと出来れば、次代の王としての箔付けとしてこれ以上のものはあるまい？」

「……はっ、現王家は龍とは名ばかりの血の集まりですから。真の龍王が顕現したなら、奴らは王位を退く以外の選択肢は無いでしょう。……なればこそ、現王家はその血を取りこもうと画策した

のでしょうから」

「……そして、その策略は半ば成功した」

紅狼の声が、オクターブ程低くなる。その声音に込められた冷たい怒気に、広間に集う従臣たちは揃って身を強張らせた。

「我の不肖の息子は、出来そこないのクス王子に心底、心酔して
いるらしい。たかが捨て駒の分際で、我が命に背くつもりらしいか
らな。……良い機会だ、己の立場をとくと思いい知らせてやらねばな
……」

ククツ、と冷たい笑みを浮かべ、彼は、目の前に跪く駒に命じた。

「……折しも、今、奴の犬小屋には奴の愛しの王子と、奴の弱点
となり得る人間の小娘が共にあるそうだ。数を投じて攻めれば、難
なく墜ちよう。行け、次こそ奴を我が前に引きずり出せ」

「御意」

受け止めるべき真実の欠片（1）

「よう、坊ちゃん。調子はどうだい？」

咲月が手洗いへと立った隙に、コタツの上のチェスセットを手早く片付け、コタツを端へと退け、いそいそと彼女の部屋を立ち去ろうと、一杯一杯の頭を抱え、心ここにあらずといった様子のまま扉の取っ手に手を伸ばした朔海は、背後から掛けられた声に思わず飛び上がった。

「わっ、わ、わ、わあ！！……っ、あ、ああ、びつくりしたなあ、もう。……て、あれ、青彦か？　ったく、いきなり背後から声掛けるなよ、驚くじゃないか……。というか、お前、いつから居た？」

ただでさえ乱れがちだった脈拍がさらにリズムとテンポを狂わせ、高鳴る心臓の鼓動を、無意識に胸へと当てた掌に感じながら、朔海は大きく一つため息を吐いて振り返り、尻尾を自慢げにくねらせながら愉快そうな笑みを浮かべた彼を見下ろした。

不機嫌そうにしかめられた朔海の顔を見上げる青彦は、浮かべた笑みを更に深めた。

「おいおい、俺の気配にも気付けなかったって？　どんだけ一杯一杯なんだよ？」

「……当たり前だろう」
口をへの字に曲げ、朔海は改めて扉の取っ手に手をかけ、引き戸を開け、廊下へ出た。天井に一つ、ポツンと小さな電球が灯るだけの薄暗い廊下の向こうから、極力音を立てまいと静かに扉を押し開ける微かな物音が聞こえる。

朔海は慌てて扉を閉め、すぐ隣の扉を開けて部屋の中へと駆け込み、勢いのままベッドへとダイブした。

咲月が隣室の扉を開け、また静かに閉める音を聞きながら、朔海は寝返りを打った。真つ暗な部屋の中で天井を仰いだまま、朔海は

手探りでチェストの引き出しを開け、ごそごそと中を探る。

「……………待て。お前、まさか……………もう渴いているのか？ 今朝飲んだばかりだったろう？」

目当ての物を探り当て、掴みだしたそれを見た青彦はそれまで浮かべていた笑みを消し、顔を僅かにしかめた。

「刺客とやり合ったせい……………じゃあないよな。さっきは確かに平気な顔してたもんな」

パツクの口をくわえ、行儀悪く噛みちぎりながら、朔海は苦笑いを浮かべた。

「まあね、あの程度の肉体労働じゃ、こつはならないさ。けど、こここのところ、過酷な頭脳労働を強いられる場面が多くてね」

寝転がったまま、一口その中身を口に含んで飲み下し、渋い顔をする。

「こんな」

ポツリと小さく呟いて、再びパツクを啜え、力任せにそれを握りつぶした。パツクの口からどつと中身の血液が一気に口内へとなだれ込む。口いっぱい広がる血の味をゴクゴク飲み干し、空になったパツクを乱暴に投げ捨てた手で顔を覆う。

「……………こんな、おぞましい化け物のくせに」

ギリギリと力いっぱい歯を食いしばり、呻く。

「まさに文字通り……………ってね。僕は……………とんだ人でなしだったみたいだよ……………」

シヤラ、と、手首に着けたムーンストーンのブレスレットが重力によって僅かに滑り落ちる音が朔海の鼓膜を震わせた。

葉月が、朔海の心臓を流れる血を得たならば、半吸血鬼である己の血肉を純血の吸血鬼のそれへと昇華する事が出来る。タンピール

「……………純血、と言ったって、ただそれだけでは特に価値のあるものじゃあない。単に、人の血の混じった半吸血鬼ではないというだけの話だ。」

純粋な日本人であるか、それとも異国人との混血^{ハーフ}か。話としては、本来それと大差ないはずの事。

「だが、吸血鬼と言う生物の性質上、それが単なる区別以上の違いを生む」

「……ああ。吸血鬼の魔力は、血に宿る。純血と半吸血鬼に、肉体的な差異は無いに等しい。あつたとしても、あくまでそれは個人差の範囲だし、場合によっては半吸血鬼の方が純血より優っている場合すらある。……決定的な違いは、その血に宿る魔力の総量」

「……信じられないかもしれないけれど、ね。彼ら吸血鬼という種族は、元はこちらの世界に生息していた生物の一種だったのよ」
「……部屋の明かりを消した暗闇の中、布団にくるまった咲月の耳元で、紅姫が囁いた。」

「……え？」
「血を吸う生き物なんて、そう珍しくないでしょう？ 蚊なんか、夏になればいくらでも湧いてくる。山に登ればヒルなんていっぱいいるし。……まあ、どれもこれもあまり歓迎される類の生き物ではないけれど」

頭を乗せた枕を両手で抱くようにうつ伏せに寝転がり、まだ闇に慣れ切らない目を、声の聞こえる方へと向ける。

「……ただ、彼らの種族は単なる栄養源として吸血行為をしていた訳じゃない。一般に、彼らの種族の存在が知られていない理由も、その為よ」

「……じゃあ、何のために血を吸っていたの？」
「彼らの種族は、面白い習性を持っていた……。その時代や地域で食物連鎖の頂点に立つ生物の血から、その遺伝情報を己に取り込み、その姿や能力を自分のものとする事で生存競争に勝ち残ってきた種族だったの」

彼らの種族は昔から、世界中の至る所に存在していた。しかし、彼らはそれぞれまるで違う生き物の姿を模していた。

たとえ当時の彼らが化石になって発見されても、彼らが真似た生物の化石だと思われるだけ。変幻自在の吸血生物であった彼ら。

「十数万年前、ホモサピエンスと呼ばれる、今の人類が全世界に分布するようになった頃から、彼らはヒトの姿で、人間達のすぐ隣で生きていたのよ」

だが、その当時の彼らと、今現在に存在する彼ら一族　朔海達とは決定的に違う事がある。

「彼らは、他生物の血を吸うことで変幻の能力を使った。……けれど、当時の彼らの個体寿命はせいぜい数十年から百年に満たない位……、そう、人間と大差ない程度の寿命しかなかった。……何より、魔力なんて持っていなかった」

「……吸血鬼の持つ魔力。元をただせばそれは、悪魔から借り受けた魔力だ」

数千年の昔。人類が文明を持つようになった頃。　地域により、その定義にかなりの差異はあったものの、いわゆる「神」たる存在と、それに対を為す「悪魔」といった存在への信仰が確かな形を持ち始めた頃。

「僕らの祖先の一人が悪魔と契約を交わした。……実際の契約内容とか、詳しい事は伝わってないけど。結果として、悪魔から譲り受けた魔力を心臓に宿し、血液を通して全身へと回し、それによって驚異的な身体能力と、簡易的な魔術を操る術を持った一族が現れた」

当然、ごく普通の人間とほぼ同等の能力しか持たない同族たちがその彼らに生存競争で勝てるはずもなかった。

……しかし、彼らの驚異的な能力も、元は悪魔の　闇の力である。

「本来、この地上に現実としてあるはずのない種族から受けた力は、確かに圧倒的な力を僕達一族に与えた。……けれど、その代償……とでもいうべきなのか……僕らは太陽の元を堂々と歩けなくな

った」

実際、身体中を流れる魔力を含んだ血液は、日光に対し激しい拒絶反応を起こす。

「そして血の持つ性質により、生来の生存本能に基づく競争意識をはるかに逸脱した、好戦的な性質を持つようになった……」

「そのせいで、こっちの世界で生きづらくなった吸血鬼達の大半は、あちらの世界　魔界へと移り住んだ……。朔海様は、その一族の血に連なる一人」

「……好戦的？」

紅姫の口から語られたその言葉を耳にした咲月は怪訝な顔をする。ほんの数日分しかない彼との記憶をさらってみても、あまりにそぐわない表現である。

「朔海様が、例外なの。それも、極々僅かな例外……」

「争い事が嫌いで、血を得るための狩りすら躊躇する様な腰抜け……。生まれ持った血と、背負った地位だけが立派な“綺羅星”。

……。なんて、今まで蔑まれてきたけど」

目を閉じ、口元に皮肉な笑みを浮かべる朔海を、青彦は静かな眼差しで見上げる。

「何を犠牲にしても、傍に置きたい……と……、そう思う……。僕は……」

受け止めるべき真実の欠片(2)

葉月が、朔海の心臓を流れる血を得たならば、半吸血鬼ダンピールである己の血肉を純血の吸血鬼のそれへと昇華する事が出来る。

……そして、それは 逆も、しかり。朔海が、葉月の心臓を流れる血を得たならば。葉月の持つ、「龍王の血」の力を手に入れる事が出来る。

「おおよそ吸血鬼らしくない性格を持って生まれてきてしまった朔海様は、その為に今までずっと肩身の狭い思いをなさっていただけど……」

一つ、小さくため息をついて、紅姫は続けた。

「王族たる地位を狙う者たちへの牽制けんせいの意味も含めて、先日呼び出された際に朔海様に下された命令は……一年以内に結婚を済ませる事」

「……け、結婚！？ ……あ、でも……そうか……一応300歳……なんだっけ、彼？」

実際の年齢はともかく、見た目はどうみても自分と大差ない様に見える彼と、その言葉との違和感に、咲月は再び怪訝な顔をする。

「……でも、……誰と？ ……王族 ってことは、生まれる前から親に決められた婚約者がいるとか？」

尋ねる咲月に、紅姫は無言のまま首を左右に振った。

「弱肉強食はこの世の理であり、自然の摂理であるけれど。魔界は特にそれが顕著な世界。“力が全て”が魔界の掟。……全てにおいて、ね。勿論、男女の馴れ初めもそう。親同士が決めた許嫁、なんて……魔界ではありえない。自分より弱い相手なんて、所詮食料でしかないわ。伴侶を得たいなら、自らの力で勝ち取るしかない」

魔界に棲む吸血鬼の女が好むのは、力ある男。死闘の末、自らを死の淵へ追い込むだけの力を持った男と出会った時、彼女らは初めて頭を垂れ、その男に従属を誓う。

その、行為自体はそう難しい事ではない。吸血鬼だってピンからキリまでいる。

けれど。

「僕は……」

そんな方法で手に入れた妻を、愛す自信は無かったし、好きになりたいとも思えない。その行為に朔海は、ひどく嫌悪を感じていた。

死ぬのは、そんなに怖くなかった。自分が殺される事は、朔海にとってそう悩ましい問題ではなかった。

けれど、母や実弟が殺される事は、あまり好ましい事ではなかった。

彼らは自分を嫌っているし、自分も彼らを好きではない。しかし、だからといって自分の所為で殺されるといのは何とも後味が悪い。それでも、ただそれだけのために好きでもない女性と結婚するなど、……例えばプロポーズの方法には無理矢理にでも目を瞑り、考えない事にしたとしても ……やはり受け入れがたかった。

「僕が大切にしたいのは……今まで、葉月と……お前達だけだったのに……」

ギリギリと、握り拳を力いっぱい握りしめる。

「今、僕が大切にしたいのは……」

受け止めるべき真実の欠片(3)

日に日に、僅かながらにも早まっていく夜明け。

朝一番の日の日差しを、咲月は寝不足の目を擦りながら眺めその眩しさに思わず目をそらした。

布団の中、抱えた枕に顔を埋めれば、目に痛い眩しすぎる陽光は心地よい眠りに誘う闇に代わる。

しかし、一晩かけて淡々と語られた紅姫の言葉の数々は、脳裏を延々とシャッフル&リピートモードで再生され続けている。

吸血鬼という生き物の事。

朔海に下されたという命令の事。

……そして。

葉月が、朔海の心臓を流れる血を得たならば、半吸血鬼である己の血肉を純血のそれへと昇華する事が出来る。

朔海が、葉月の心臓を流れる血を得たならば「龍王の血」の力を手に入れる事が出来る。

そして。

「吸血鬼に咬まれた人間は、吸血鬼になる。……よく聞く話だけど」
紅姫は言った。

「結論からいえば、単に血を吸われただけで吸血鬼になったりはしないから……正確には間違った情報よ。……だけど、あながちハズレ、とも言えない」

今ある、悪魔からの得た力を継ぐ吸血鬼一族の、吸血鬼たる力の全ては彼らの持つ血ゆえの力。ごく普通の人間と大差ないはずの肉体

は、その力によって著しく強化され、身体能力は大幅に向上し、殆ど不死身と言っても過言ではない程の回復力を得た　　が、全身を廻る血が持つ闇の力は。

「人間に限らず、こちらの世界に存在する生物にとってそれは毒にも等しいもの」

そして。その血を、咲月にんげんが得たならば。

「……それこそが。全てが上手くいく、たった一つの方法」

龍王の血を継ぐ者

悪魔と契約を交わし、魔力を得た古の始祖の血……。魔界に現存するほぼ全ての吸血鬼が、その系譜を辿ればその血へと連なる。

……だが。

悪魔との契約によって得た驚異の力を得、魔界に存在する幾多の魔に属する者らの中でもかなり上位に君臨し、それなりの地位を築き上げ、彼ら一族が“吸血鬼”と称されるようになり始めた頃。

更なる力を求めた者たちが居た。

魔界で、この世かいどんなに地位を求めようと、上を見上げれば、どうあがいても越えられない壁がある。

どんなに強力な力があっても、所詮借り物。

その貸主である悪魔 魔界を統べる王らの一族に仕え、従う眷族以上のものになれはしない。

……吸血鬼、と呼ばれるようになった一族。悪魔から得た力とは別に、元から持っていた、彼ら一族独特の能力は本来の物とは少々意味を違えて受け継がれていた。

血を吸った相手の遺伝子を自らに取り込み、その能力と姿を自らに写すための能力は、いつしか“写す”ためではなく、“移す”ために使われるようになった。

魔界に存在する者らの血を取りこみ、様々な能力を我が身に移し損り、自らの力を強化する……。

だが、格下の雑魚にも等しい者らの血を吸い、その力を得た所で何の得にもならない。

かといって、いきなり格上の相手に食ってかかって無事に済む訳もない。

そもそも、魔界で最上位にある種族から得た力を振るう吸血鬼という種族より上位にある者など、そうは居ない。

そのうちの一つ。“魔獣”と呼ばれる者らの中では最上位にある

一族があつた。

それが、龍族であつた。

彼らの持つ魔力の総量は莫大で、それだけを比べたならば、上級悪魔でさえ適わぬものが居る程のもの。

それを打ち倒し、その血を得、その莫大な魔力を我が物とした始祖直系の子孫であつた英雄の名。

それが、龍王。

悪魔から借り受けた力と、龍の力を併せ持ったその力は他に比類なく、悪魔とも対等に戦える程。

……龍王の血を継いだ一族が、吸血鬼達の王族として君臨する様になるのに、そう時間はかからなかつた。

だが、しかし。

悪魔の力を得た始祖の血を継いだ者同士から生まれた子供は皆、その力を継いで生まれて来た。……たとえ片親が人間であつたとしても、受け継ぐ魔力の量こそ減るものの、確かに魔力は継がれる。

始祖の血だけではない。親が持つ血の力のほぼ全てはその子孫に確かに継がれていく。

龍族には劣るものの、魔獣の中では上位に属し、氷の魔術を得意とした魔狼の血を取りこんだ一族　アルフ。

生まれ持った魔力は少なくとも、占術と弓術に優れたケンタウルスの血を取りこんだ一族　カヴァルステラ。

より深い知識と知恵、複雑で繊細な魔術を扱うエルフの血を取りこんだ一族　フェル。

より優れた不死性を求め、不死鳥の血を取りこんだ一族　フェン

リクス。

龍王の血を継ぐ者にこそ及ばず、悪魔と対する程の力は無いものの、吸血鬼としては破格の力を持つ一族。

彼らは、常により強い力を求めながら、王位を狙っていた。

龍王の血だけは、他の血とは違い、ただその血を継いだだけではその力を行使することは適わなかったのだ。

龍王の血の力を行使するための資格や条件などは、数千年の時を経た今でも、解明されてはいない。

そして、その数千年間、実際に龍王の血を行使したものは、数えるほどしか存在せず、その者たちは皆、例外なく英雄とされている。

始祖直系の子孫、龍王の直系の子孫。王族たるその血を継ぐ、その一人は、朔海。

そして、もう一人。

前代未聞、半吸血鬼でありながら、龍王の血を継ぎ、行使した者。

……それが、白露。

かつて、王族として生まれた母と、アルフ族一の実力派として名を馳せた父から生まれた、アルフ族現族長、“紅狼”を父に持つ半吸血鬼。

現在、双葉葉月と名乗る彼こそが。

全てが上手くいく、たった一つの方法

悪魔から借り受けた力と、龍の力を併せ持ったその力は他に比類なく、悪魔とも対等に戦える程の力を持った「龍王の血」。

葉月の心臓を流れる血を得たならば、その「龍王の血」の力を手に入れる事が出来る。

吸血鬼であれば、誰でも。……葉月から、血を奪う^{それ}ことが出来るならば。

だが。

「……私の力も、命も、全て私の物であり、あの男の物ではない。あの男の良いようにはさせたくない……あの男にだけは、何一つくれてやりたくはありません。……ですが、朔海様 貴方にならこの力を喜んで譲りましょう……」

と、葉月は言った。

「私の血を得たならば、龍王の血の力を得られる……。皆様とくに私の父であるあの男はそう考えているようですが。……残念ながら、私の心臓を食らい尽くした所で、それだけではこの力を我が物とすることは叶いません。……数千年、謎とされた龍王の血を我が物とする条件ですが。……それはある意味、とても簡単で、しかし同時に恐ろしく難しい」

魔獣の最上位とされる龍族。“獣”と称されてはいるが、とても誇り高い種族である。

血を介して力を奪われたという事実から、かの龍は自らを打ち倒した龍王の力を認め、その力を行使する事を許したが。

「かの龍が認めたのは、あくまで龍王自身の力です。……血を介し、かの龍が持っていた力は、その血を継ぐ子孫全てに確かに受け継がれています。ですが、かつてその力の主であった龍の魂も、力と共に継がれ、かの龍がその者の力を認めない限り、力を使う事は叶いません」

つまり。

「……貴方の中にも、龍王の血は継がれています。しかし、かの龍は貴方自身を認めてはいない、と言う事です。まあ、当然でしょう。かの龍王が打ち倒した龍とは、龍族の中でもヴィーヴルと称される種類のもの。知能は低く大変好戦的で、敵味方の区別無く襲いかかる凶暴な魔獣です。……ただし、龍王がしたようにそれを打ち倒して屈服させ、己の主と認めさせたならば、これ以上ない程理想的なパートナーとなる訳ですが。……貴方のお優しい気性では、当然かの龍は納得しないでしょう」

だから、朔海の中の龍王の血の力は眠ったまま、目覚めずにいる。「ですが、私の持つ『龍の力』は、他とは少々性質の異なるもの」
葉月の言葉に、朔海は頷いた。

「私の血には、かつて龍王が倒した龍とは性質の違う、もう一つの龍の力が宿っています。白龍という、神龍とも称されるかの龍は、ヴィーヴルとは異なり、争いを好みません。……その血を得た上で、貴方がかの龍の主となれたならば……」

“力が全て”が掟の魔界に於いて、それだけの力を得たなら、王も、紅狼も、他の誰であろうと朔海に干渉してくる事はもう無くなるだろう。

「しかし、既に下されてしまった貴方の結婚に関する命令に関しては……」

「ああ。一年後、僕が伴侶を選んでいなくとも、僕自身への干渉は無いだろうけど……」

彼の母や実弟らは無事には済むまい。

「紅龍様にも、王としての体面というものがありますからね。下

した命が遂行されなかつた分の代償は必要でしょう」
彼らの犠牲を朔海が望まないのならば。

「一年以内に伴侶を得なければならぬ訳ですが」

「……………」

俯き、押し黙る朔海に、葉月は言った。

「純血と言つても、ただそれだけでは特に価値のあるものではありません。単に、人の血の混じつた半吸血鬼ではないというだけの話で、真に重要なのは受け継いだ血の質。すなわち、これまで取り込んできた力」

例え、目覚めぬまま眠つた『龍王の血』も、武器として振りかざすことは叶わずとも、いざ命の危機に陥つた時には生来の生命力を補う等してその真価を発揮する。

「始祖直系の血、龍王直系の血、そして白龍の血の力を持つ貴方の血に勝る血は存在しません。その血を以つてして儀式を執り行なうならば、血の力を眠らせたままでも相当の力を得ることになるでしょう」

紅姫は、言った。

「吸血鬼は、人間を吸血鬼へと変えられる」

朔海が、咲月を同族へと招き入れる事が可能なのだと。

「朔海様に下された命は、一年以内に結婚を済ませる事。だけど、そのお相手に関しては、特にこれと言つた注文は無かつたそうだから。……………吸血鬼の女性なら誰でも構わない、という訳で」

そう、例えば、元は人間でも。

「貴方が私の血を吸つて得た力を彼女に与える。咲月君を同族に迎えて貴方の伴侶とし、貴方の力で彼女を守り、共に生きる。それが。……………それこそが。全てが上手くいく、たった一つの方法」

一生ものの恋

「……あ。……しまった……」

冷蔵庫の中を覗き込んだ咲月は小さな呟きをため息と共に洩らし、パタンと静かに扉を閉じた。

ちら、と、居間にかかった壁掛け時計を見上げ、針の位置を確認する。

午後5時。

一日中を通して滅多に開く事のない閉めっぱなしのカーテン越しでは分かりづらいが、外はほぼ夜の闇に覆われているはずだ。

もう一度、そろそろと冷蔵庫の扉を開け、いつもそれが置いてあるはずの定位置をじいっと見つめる。

が。

「どうしよう……醤油買ってくるの忘れた……」

やはり、無いものは無い。買い置きもちょうど切らしている。

咲月は、まな板の上の茹でたほうれん草を眺め、もう一度冷蔵庫の中身を確認する。

「ううん、おひたしにするつもりだったんだけど……」

どんなアレンジを加えるにしても、醤油が必要不可欠な料理だ。

「どうしよう、……何か他の料理に……ううん、でも材料が……」

頭の中のレシピを片っ端から当たるも、既に塩茹でにした上、冷水中にて冷やし、水切りし、等分に切り分け、後はダシ醤油に浸すだけだったはずのそれを別の料理に変更しようにも、醤油なしで作れそうなレシピが思い当たらない。

しかも。

コンロの上でグツグツ煮える鍋の中の煮物。今はまだ、ニンジンやゴボウを沸騰させた湯でじっくり下茹でしている段階だが。

「あれにも醤油、使っただよね……」

再び時計に目をやり、咲月はそっと居間の窓にかかったカーテン

の端から外をのぞき見る　　が、室内の明かりが窓に反射して外の様子はあまり良く見えないが、つまりそれだけ暗くなっているという事だ。

今、自分は命を狙われている。　　それも、吸血鬼に。

昼日中ならば、太陽の苦手な吸血鬼を過剰に恐れる必要は無いと、紅姫は言った。

だが、太陽の恩恵が地平線の向こうへと去り、闇が訪れれば、ただの人間の小娘に過ぎない咲月が吸血鬼を相手に抵抗する術は無い。……一人を外を出歩くことは出来ない。

咲月は視線を天井へと向け、むむむ、と小さく唸る。朔海はきつと、頼めば快くお供を引き受けてくれるだろう。

だが、昨日までに明かされた事実を思えば、今、彼と2人きりになつて耐えられるとはあまり思えなかった。

彼が、吸血鬼だという事実。

これに関しては、正直自分でも思ってもみなかった程、すつと腑に落ちた。

例えば彼が人間でないのだとしても、咲月にとって、大した問題ではなかった。……正直、300歳だとか、王族だとか、気になる節々が無い訳ではないが……だからといって、彼らと送る毎日を手放す事など、咲月には出来なかった。

あの人たちの正体が吸血鬼でも、咲月は気にならなかった。

咲月が日々彼らから受ける恩恵の数々を思えば、いざという時、紅姫の言うところの“非常食”役を買って出ても構わないとさえ思う。

だ　　が　　。

……さすがに、いきなり吸血鬼になつて吸血鬼の嫁になれ、と言われて、はい、と答える事は出来なかった。

朔海の事は、好きだった。

けれど、ずっと長い間心を閉ざし続けていた咲月には、それがどうという種類の“好き”なのか分からなかった。

普通の、咲月と同世代の子たちがする様な子どもの恋愛だったら、それ位の曖昧な気持ちでも、“取りあえず付き合ってみる”という選択肢もあるだろう。

……しかし、一度吸血鬼になれば二度と人間には戻れないのだと紅姫から聞かされた今、いくら恋愛方面に疎いとしても、この先一生分の未来を賭けた選択の重みくらいは分かる。

……それに値するだけの想いを、今はまだ自覚出来ない。でも、1年以内にその覚悟が出来なければ、彼は殺されてしまうのだ。

恩人をみすみす見殺しにする罪悪感を思えば、安易にノーと言う事も出来ない。

と。

天井を見上げたまま固まった咲月の背後で、コツン、と壁を軽くノックする音がした。咲月が、ハッと我に返ると、

「 どうしました? 」

薄緑のハイネックセーターに、淡いベージュのズボン姿の葉月が軽く腕を組みつつ、穏やかな笑みを浮かべて小さく首をかしげている。

「 あっ、ちょっと醤油を買い忘れて…… 」

「 …… ああ、今日のおかずはほうれん草のおひたしですか。美味しそうです。なるほど、それは醤油が要りますね 」

納得した様に頷き、

「 私でよければ、ちょっと車を飛ばして買ってきても良いのですが 」

と、言いかけた所で、ドタバタと大慌てで階段を駆け下りてくる足音が廊下に響き、足音の主は葉月の背後で急ブレーキをかけた。

「 ダメダメダメ、ダメに決まってるでしょ! 葉月一人で行ったら醤油のつもりでめんつゆとか、ポン酢とかを間違って買ってくるのがオチなんだから! 」

駆け込んできた朔海の顔を、咲月は直視できずに視線を葉月に向ける。

「ここは僕がやっておくからさ、葉月と行ってきなよ」

葉月の方ばかりを見ていた咲月は、そう言いながら葉月に意味ありげな目配せをした朔海に気付かなかった。

「では、お言葉に甘えて。……車を出してきますから、上着だけ持って来てください」

葉月は、にこやかな表情を崩すことなくあっさりとは玄関へと向かう。

慌ててその後を追おうとした咲月は、つけっ放しのコンロの上の鍋と時計とを見比べて焦る。

「ああ、鍋は僕が見てるから。行っておいで」

言われて、咲月はつい真正面から朔海の瞳を覗きこんでしまった。濁りのない、澄んだ濃紺の瞳に灯る光が優しげに揺らめき、咲月の心もそれにシンクロするように揺らぐ。

惹かれない訳がない。

これまであちこちを転々とし、幾度となく学校を移り、その分、同世代の男の子の知り合いは大勢いるが、彼ほど見目の良い男子など、見た事も無い。

それぞれの学校で一番カッコイイと人気のあった男子達だって、彼と比べたら明らかに見劣りするだろう。

そんなイイ男に優しくされて嬉しくない女子などいる訳がない。

……だから、分からないのだ。この揺らぎが恋なのか、恋じゃないのか。

咲月は、無理やり視線を引きはがし、

「じゃあ、お願いします」

軽く頭を下げて、パタパタとスリッパの音を廊下に響かせながら早足に玄関へと向かう。

ボタン、と玄関の閉まる音。

次いで、車のエンジンの音が次第に遠ざかっていく音。

「全く。本当なら、僕と一緒に行ってあげたかったのに」

一人、家に残った朔海は、コンロの火を止め、大きくため息をついた。

招かれざる訪問者

ざわ……。

不意に、木々のざわめきが乱れ、ピンと張りつめた空気に縦横無尽に張り巡らされた殺気の網が家を包みこむ。

静まり返った居間の窓が、カラリと開く。

ビュウ、と冷たい夜風が暖かな室内に吹き込み、カーテンが揺らめく。

そのカーテンが、突如ビリビリと派手に引き裂かれ、遮るもの無くなつた窓のその向こうからナイフが飛んできた。

投げ込まれたナイフは居間の蛍光灯を割り、ガシヤァンと派手にガラスを飛び散らせた。

室内の明かりが消える。

今日の客人に、明かりを必要とする者はいない。

勿論、それは朔海も同じ。

窓の向こうに見えるいくつもの人影に、朔海は目を細め、たつた今カーテンを台無しにした目の前の獣を睨んだ。

大人の牛ほどもありそうな大きな体軀をした狼を。

「これは王子。……ご無沙汰しております」

狼は、口も動かさずに人の言葉を喋った。

「……帰れ。僕は争いを好まない」

招かれざる客に対し、朔海は内心の焦りを必死に押し隠し、静かに答えた。

その答えを聞き、庭に堪え損ねた失笑があふれた。

「ああ、王子よ。申し訳ないが我々は貴方ではなく、この家主に用があるのです」

目の前の狼は、むしろわざとらしい程にかしこまって言ったが、その黄金の瞳には明らかかな蔑みが浮かんでいた。

「……葉月 いや、白露なら留守だ。折角はるばる訪ねてこら

れたところ悪いが、改めて出直してくれないか？」

狼は鼻を高くかざし、スンと小さく息を吸った。

「……ふむ。確かにここにはいないようですね。……ですが……
どうやらまだ近くにいますよ。しかも、好都合。件の娘も一
緒らしい」

狼は、牙を見せながら笑った。

もう、朔海に用は無いとばかりに狼はあっさり踵を返し、窓の棧
に前足を掛けた。

家を覆うようだった殺気は、既に闇の向こう　葉月が咲月を連
れて出かけた商店街の方へと向けられている。

「待て、街中で暴れ回るつもりか？」

いわゆる霊体に近い形で存在する悪魔と違い、もともとはこ
ちらの生物であった吸血鬼には、良くも悪くも実体があり、特殊な
能力など無いごく普通の人間の目にも映る。

ここ一帯は田舎ではあるが、この時分の商店街はそれなりに人出
があるだろう。そんな中で暴れればどうなるか。

「何、いつもの狩りですよ。まあ、通常に比べれば大分派手には
なりますが。大丈夫、街一つ潰した所で人間は掃いて捨ててもまだ
余るほどいるじゃないですか。正体がバレる？　なるほど、確かに
兵器と呼ぶべき武器の数々は我々にとっても脅威になり得るが……

だからどうした？　やられる前に魔界へ逃げ込んでしまえば痛
くも痒くもない。しかも、今どきの人間どもは率先して我らの存在
をフィクションにしたがる。実際に捕まりでもしない限りは、連中
が勝手に理由をでっちあげてくれるでしょう。ああ、たかだか唯人
如きに捕まる様な能無しは今回連れて来てはおりませんので。……
ご心配なく」

狼は朔海に背を向けたまま首から先だけをこちらへ捻り、もはや
嘲笑を隠そうともせず言い残し、窓の棧を蹴って一足に扉の向こ
うへと跳躍し

「　僕は、争いを好まない」

先刻口にしたばかりの台詞を再び繰り返した朔海は、スツと左手を掲げる　と、

ゴン、と、かなり痛そうな音を立てて、狼は見えない壁に思い切り頭突きをかまし、その反動でもんどり打った。

「何を……」

悲鳴と呻きを喉奥に押し込め、牙を剥いた狼が今にも飛びかからんと前傾姿勢を取ってこちらへ向き直る。

こちらに翳された朔海の掌に血で描かれた魔方陣が仄かに青白い光を帯びている。

「この家の敷地の周囲に結界を張った。　ここから外へは出さない……が、魔界への道には結界を張っていない。大人しく魔界へ引き上げるなら、僕は追わない」

狼は、もう一度鼻を高く上げ、今度は慎重に息を吸い込んだ。

「この……匂いは……」

敷地をぐるりと一廻りと引かれた一筋のラインから香るその匂いは

「これは……血の匂い」

それも、掌の魔方陣のそれと同じ香りがする。

その香りに、狼はうっとりと目を細めた。

「なるほど。さすが、腐っても王族の血ですね。良い香りだ……」。

だが、やはり貴方には宝の持ち腐れなのでは？」

ざわり、と。一度は外に向けられた殺気はその包圍網を縮める。

「……まあ、否定はしないよ。少なくともこないだまでこの血を特に必要とした事なんてなかったしね」

庭木の影が、不意に膨れる。

「でも」

膨れた影は、一瞬の後には分裂し、人形を為す。

庭木の影に潜んでいた幾つもの人影が、あふれる。

「今、初めてこの血を継いだ事を感謝してるんだよ。そのおかげで、こうして守る事ができるんだから……決して失えない、大事な

ものを」

朔海は翳した手を下し、静かに目蓋を閉じた。庭にひしめく気配はどれもこれも血に飢え、殺気だっている。こんなものを、街中に放つ訳にはいかない。

耳を濟ませ、冷たい夜風を少しばかり吸い込み吐き出す。そうして、ゆっくりと目を開ける。

その瞳に映るのは、眼前の狼の後ろに五人。視界を遮る背後の壁の向こうに三人。屋根の上に六人。右側、医院の方に二人。左側、隣家との敷地を分ける塀の上に四人。

全部で二十人。しかも、異界の扉の向こうにも気配を感じる。

「僕は、争いを好まない。……だけど。貴方がたがどうしても彼らに干渉しようとするのなら」

暗闇の中、不気味に炯々と光る五対の瞳を見据える朔海の瞳もまた、一際明るい紅い光を宿し、彼らを睨み据える。

「彼らを害そうとするのなら。僕は全力を以ってそれを阻止しよう」

> i 3 7 6 3 7 — 1 8 3 <

人影

もしも、この有り余る力を真実自分のものとして使う事が叶うならば。

ハンドルを握りしめながら、フロントガラスの向こうの夜闇に同調し、蠢く内なる闇に足を取られ、引きずり込まれないよう、普段は使わないカーステレオでアップテンポの曲をかける。

そして、時折不自然に見えない様に注意深く慎重に鼻に空気を含ませる。

葉月は、半分は人間であるが、吸血鬼としてはかなりの上位にある血族　アルフ族の血をひいている。

アルフ族は、魔狼の血を取り込んだ一族だ。魔獣とはいえ狼は狼。当然嗅覚に優れており、その特性は一族に　ひいては葉月にも継がれていた。

どれ程優れているのか　といえば、おそらく犬程度　といったところだろうか。

少なくとも、咲月に声をかけるより前に、朔海が家の周囲に施していた仕掛けには気付いていた。家を出てすぐ、彼が　……あの男の側近中の側近だった男が、随分大勢連れて我が家を訪れた事も、朔海が例の仕掛けを使い、彼らをあの場合に留めたのであろう事も、風に混じる匂いで察していた。

ここ数日、毎日毎日同族が押し掛けてきてはいた。が、あれほどの人数が一度にやってくるなど……あの時以来だ。

葉月は複雑な心境のまま、前方の赤信号にブレーキを乱暴に押し込む。

キツと、路面に擦れたタイヤが抗議でもするように悲鳴をあげた。安全運転が常の葉月の、らしくない様子に、咲月は遠慮がちにち

らりとこちらを盗み見る。声をかけようか僅かに逡巡し、彼女はそつと視線を道の先へと戻した。

いつになく、ピリピリした空気を感じ取ったのだろう。

周りの空気を読む事にかけて、彼女の上に行く者を葉月は知らなかった。

実際、葉月の心は両端から引つ張られて今にも二つに引き裂かれ、なかからドロリとした闇がこぼれ出てきそうだった。

咲月の安全を確保するため、彼女を連れだしたのだが。

あの家にたつた一人で残してきた朔海の事が心配でならなかった。一人や二人の刺客ならば、葉月もこうは心配しない。だが、あの人数……。

朔海が 王族の血を引く者が本気を出せば、連中を退けるくらい訳ないはず……なのだが、争いを好まない彼が、全力でその血の力を引き出し闘いに臨んだことなど、未だかつて一度も無いのだ。彼の實力は未知数 それは周囲の者はもちろん、彼自身すら把握してはいない筈。

たとえ人数が居たとしても、今まで送られてきていた刺客程度の者ばかりならば、葉月もここまで心配する事はなかっただろう。

だが、父親の側近であったあの男は、一族の中では一族の長たる紅狼に次ぐ戦闘能力を有している。また、統率力にも優れた男だ。

そんな男が率いる粒ぞろいの戦闘集団のただ中に、たつた一人朔海を残して来てしまった事実が、葉月の心の中の闇を揺さぶる。

だが、自分があの場に残ったとして何が出来るのか。

どんなに強大な力を有していたとしても、真実自分の物として使えないのならば意味が無い。それも、宝の持ち腐れで済まないのだから尚更にタチが悪い。

紅姫と青彦の助力を得てすら、刺客一人倒すのがやっとの自分があの場に残っても、何の役にも立たないのは分かっている。

だからこそ、こうして咲月の護衛をしている……の、だが、理屈

として頭では分かっている、心情というものはそのようなもので割り切れる程簡単にはできていないのだ。

「頼みますよ、朔海様。後生ですから、無事でいてください。あなたが居なければ、彼女は いえ、私の希望は潰つぶえてしまうのですから……」

朔海の築いた結界によつて、風が運んでくる匂いからあの場の状況の把握が叶わなくなった事を知り、含んだ空気を食いしばった齒の隙間から吐き出した空気に乗せて小さく咳く。

商店街は、もうすぐそこだ。

信号が青に変わった。葉月はアクセルを踏み込み、もう一度静かに深々と深呼吸をする。ハンドルを切り、交差点を左折する。交差点から少し行つたところにコインパーキングがあるのだが……

「ああ、やはりこの時間は混んでますね……」

パーキングの入り口前には、片側二車線の車道の左一車線をふさぐように車の列ができていた。その列の先頭と最後尾に一人ずつ制服に身を包んだ警備員が立ち、赤いライトを仕込んだ警棒で頻りにサインを送り合っている。

皆、夕飯の買い出しに忙しい時間だ。長居する客も少ないのだろう、更に奥にある駐車場出口からは次々に車が吐き出されている。それにつれ、こちらの列も徐々に進みはしているのだが、それでもまだ前には5、6台の車が居る。

「先に行つてもらつてもいいのですが……」

葉月が、少々齒切れ悪く言った。

タイミング良く、前の車の助手席から女性がサツと降りた。運転席にいる男性はおそらく夫なのだろう。扉を閉めると、そそくさと交差点の横断歩道を渡り、商店街の中へと消えて行く。

前の車だけではない。二つ後ろの車からは小学生くらいの男の子を連れた女性が車を降りる。すぐ後ろの車は女性が一人で運転して来たようだが、誰かに運転手を任せて来た奥様方は一刻の時間すら惜しいと、運転手一人を残して商店街へと向かう。

商店街の一番手前の食料品スーパーの店先では、タイムセールベルの音が響き、メガホンを手にした店員が、「タマゴ一パック九十円！」としきりに叫んでいる。

すぐ後ろの車の運転席に座った三十代くらいの女性は頻りにそれを横目で気にしながら、イライラとハンドルを人差し指で小刻みに叩いていた。

だが、咲月は別にタイムセールを目当てに来た訳ではないのだ。

葉月がついて来てくれた意味くらいは当然分かってる。……彼が彼女を連れだした、本当の理由まではさすがに気付けはしなかったけれど。

「いえ、醤油を買うだけです。待ちますよ」

何かあったのだらう事くらいは、葉月の様子から十分察せられた。

「人混み、すごいし。ケータイも無いのにはくれたら、大変そう

……」

店先に群がる黒山の人だかりに目をやりながら、咲月は呟いた。

その、咲月の答えに葉月はホツとした様に答えた。

「……助かります。私がついて来ていながら、あの中をあなた一人で歩かせたりしたら、後で朔海君に怒られてしまいそうですからね」

卵の前の人だかりは奥様方ばかりだが、もう少し奥にはゲームセンターもある。この時間、中高生くらいの不良連中も多くなむろしている事だろう。

何も、守るべきは同族連中からばかりではないのだ。

と ふと、スーパーの隣のタコ焼き屋台から香るソースと青のりの香ばしい香りに誘われ、葉月はそつと息を吸い込み、そのまま固まった。

すぐそこから漂う食欲をそそる香りに混じって、今一番嗅ぎたくない匂いが葉月の心臓を鷲掴みにしたのだ。

「っ！」

葉月は、殆ど脊髄反射でアクセルを目いっぱい踏み込み、直後、

慌ててハンドルをいっぱい切った。

車は急発進し、すぐ前の車ギリギリを掠めて車列から飛び出した。そのまま、制限速度を丸無視したスピードで次々と前方の車をかわす様に追い抜き、商店街を抜け、その先へとひた走る。

突然の暴挙に、慣性の法則で助手席から浮きかけた咲月の体は、シートベルトに留められ、逆に助手席に押しつけられた。

まだ、この街に来て日が浅く、このあたりの地理に疎い咲月には、この道がどこへ続くのか分からない。

もう、らしくないどころか尋常ではない様子の葉月を見れば、更に不安が募る。

何かが起きているのは分かる。

だが、何が起きているのか分からない。

どうすればいいのかも分からない。

張りつめた空気の中で、咲月は思った。

知らない事、分からない事が、こんなにももどかしい事だったな

なんて……今まで知らなかった。

「 紅姫……」

彼らについて、知らなかった事を教えてくれた人の名を、咲月は呟いた。

「おいでなすつたぜ」

と、突然耳元で葉月ではない男性の声が出た。

驚いた咲月を見ると、助手席の右肩にいつかの黒猫がちょこんと乗っている。

「……葉月。 覚悟を決めなさい」

次いで、左肩から声が出た。 紅姫だ。

突然現れ、人の言葉を喋った彼らに、葉月は心底ギョツとした表情で急ブレーキを踏んだ。

ギヤギヤギヤギヤギヤツ、と、凄まじいスリップ音が響き、車が

派手にドリフトをかました。

周りに車が居れば、大事故になっていたとしてもおかしくなかっただろう。

だが、いつの間にか道の両脇の街並みは途切れ、民家や商店の代わりに木々が生い茂るばかりの真っ暗な道に、他の車の影は無い。

突然向きを変えた車の前で立ち止まったのは、車でも、バイクでも、自転車でもなく……たった一つの、人影だった。

描き出される設計図

道を転々と照らす街灯の明かりは、この闇の中ではあまりに頼りなかった。

唯一、眩いばかりの強い光を放っているのはこの車のヘッドライトだけ。強すぎる光は、周囲の闇をより濃く見せる。

その、ライトの光が届くか届かないかのギリギリの位置にある、影。ただの人間に過ぎない咲月には、辛うじてその影が人の形をしている事を認識するのが精一杯だった。

しかし、咲月の右肩から黒猫は、

「不幸中の幸い……って言うべきか？　ありゃ奴の取り巻き連中の一人だろ」

小さな牙を見せながら、ニヤリと笑って見せた。

「さすが、策士だな……。力押ししか知らねえ奴ばっかの連中とは違う」

葉月は、メガネに手をやりながら、ゆっくり息を吸い込む。

「……ええ、　認めたくはありませんが……そうですね」

吸い込んだ空気をそつと吐き出しながら呟き、メガネを外し、それをたたんでハンドル横に置いた。

風に混じる匂いは、先程嗅いだものと変わらない。　あの場に

張られた結界はまだ破られていない。……結界の内に留められた者達はまだ皆、あの場に居るのだ。

つまり、この男は初めから結界の有効範囲の外に居たという事だ。そう、まさに今の様なもしもの事態に陥った時の為の保険として、本隊とは別に補欠要員ベンチを配置していたのだろう。

……が、所詮はベンチウオーマーだ。しかも、この任務がどれだけ軽視されていたのかがありありと知れる様な人選だ。コレの相手ならば、自分でも十分勤まる。

しかし。

葉月はそつと、すぐ左隣りの助手席に座る少女に視線を向けた
今はまだ、自分たちの正体を彼女に知られる訳にはいかない
……はずだったのに。

彼女の前で、二匹の猫が当たり前のように人語を喋った事実と、
目の前の敵の存在をどう言い訳すべきか……。

と、そう思いながら。

「……紅姫、あれって」

だが、彼女はシートベルトを両手でギュツと握りしめながら白猫
の名を呼び、ごく自然に問いかけた。

「ええ、……あれは同族よ。例の……」

そして、白猫の方も当たり前に問いの答えを返した。

その答えを聞き、握りしめていたシートベルトを一層強く握りし
めた咲月は、前方に釘づけになっていた視線をまっすぐこちらに向
けて来た。

恐れ浮かぶ瞳。……しかし、その視線に見えるのは、葉月しづんに対
する確かな信頼だった。

それが、葉月しづんが何者であるのかを理解した上でのものである
事は、紅姫の言葉で十分に察する事が出来た。

「大丈夫。あなたは、私達が絶対に守り抜くから」

……紅姫は、決然と言い切った。

「紅姫」

葉月は、複雑な想いを声音ににじませながら彼女の名を呼んだ。

「言つたはずよ。こんな風にバレる前に、きちんと説明しておく
べきだって」

紅姫は、そんな彼にしれっと返す。

「実際、良かったでしょ？」

言われて、葉月はグツと言葉に詰まった。

「私達の正体も、あの人たちの事も、今ある問題も、全て説明済
みよ」

その言葉を聞いた青彦は、「へえ、」と目をぱちくりさせて、そ

してニツと笑い、身軽な身のこなしで咲月の膝上に飛び降りた。

「ふーん、いい瞳めしてるじゃん。ホントに、逃げ出しも、現実逃避もせず……俺達を退治しようとも思わず……、ってか」

彼は咲月の顔を見上げながら、楽しそうな顔で言い、

「葉月、ここは紅姫に感謝しとけよ。おかげであの時の失敗を繰り返さずに済んだんだからな。ああ、勿論……実に頼もしい限りの彼女にも……な」

きつく握られた咲月の手に、額をすりよせた。

「ホントにね。……この娘こ、間違いなく逸材よ。少なくとも葉月と出会ったばかりの頃の私よりずっとしっかりしてるもの」

青彦の台詞に紅姫は頷きながら言った。

「……成程。机上の空論に過ぎなかつたものが……どうやらまず一步、実現可能な設計図を描けるまでになった」と

葉月は、苦笑を浮かべながら小さくため息をつく。

「咲月君。……大変申し訳ないのですが」
葉月の言葉を聞いて一瞬目を泳がせた咲月に、彼は常の態度を取り戻した落ち着いた声音で告げた。

「少々、やっかいな客人がいらしたようで。ちよつと行って来ます」

エンジンを切り、ドアを開ける。

「車から絶対に出ないでくださいね？」

言いながら車を降りる葉月の肩に、青彦が飛び乗り、紅姫もそれに続くように車を飛び降りた。

路面に綺麗に着地した紅姫が、こちらを振り返る。

「すぐに戻るから」

葉月が小さく頷き、ドアを閉め、全てのドアを施錠する。

「さて」

そして、暗闇に身を潜めこちらを窺う人影を見据え、葉月はそこからへ一步踏み出した。紅姫もその足元を追い、青彦は彼の肩の上で敵影を捉える。

「……あいつ、そうとう飢えてるぜ。今回のターゲットであるお前を警戒しながらも、あの娘の血の香りの誘惑に抗えずにいる。さつきからずつと、ちらちら彼女の方ばかり見てる」

「人を餌としか見られないとは……実に哀れなものですな。全く虫唾が走ります」

憤りもあらわな低く押し殺した声で葉月は言った。

「ただ、本能の赴くままに動く堕ちた獣ごときに奪えるものなど何一つないのだと、教えて差し上げましょう」

メガネを外した葉月の裸眼の瞳が、赤々と燃えあがる。

身の内でも暴れる闇の衝動に身を預け 彼は、路面を蹴り 身を躍らせた。

今、必要なもの

パタン、と。

丁寧なドアが閉められ、カシャンとドアロックのかかる音が四方から聞こえた。

葉月が、一歩、前方の影の方へと足を踏み出した

……と、そこまでは咲月の目と耳で認識できた。の、だが。

一歩踏み出した右足から重心を移し、左足で次の一歩を踏み出し地面を蹴った。その、次の瞬間にはその場から彼の姿が消えた。

「!?!」

え、……と驚いた。と、まともに認識するよりも早く、困惑に泳がせた咲月の目に映り込んだのは、車のライトがギリギリ届く程の場所……つまりは前方の敵影のすぐ目の前に現れた葉月と、その肩に乗った青彦の姿。

あ、……と慌ててそちらに焦点を合わせながら。ほんの一瞬……たった一度瞬きをし。その直前、彼は敵影の胸倉を掴み、次の一歩を踏み出すため右足をたわめたていた。目蓋を再び開けた次の瞬間には敵影ごと彼の姿は闇に融けて消えていた。

彼らに僅かに遅れ、地面を駆けていた紅姫はその後を追うように、車のライトも、街灯の明かりも届かない闇へ躊躇い無く突き進んでいく。

彼らの種族が持つ、超人的な身体能力については紅姫から聞いていた……し、読んだ事のある小説でも、その殆どがそういう事になっていた。

だが、「百聞は一見に如かず」という使い古された言葉の意味を、これ程真に迫って実感したのはこれが初めてだった。

突如、バキバキバキツと凄まじい音がした。

反射的に身体がびくつと跳ねる。慌てて音のした方を見ると、うっそうと茂って闇をより濃くしている道脇の木々の数本がやけにゆっくり傾いでいくのが見えた。直後、ドサツと重たい音と共に車が揺れた。

「っ、っ、」

思わず、息をのんだ咲月の耳に獣の悲鳴が聞こえた。

ぎゃいん、と聞こえたそれは犬のそれに似ていたように思われたが、獣の唸り声や吠え声は聞こえても、闇を透かしてその姿を目に移すことは、人の身である咲月には不可能な事であった。

本当に、何一つ分からない。

どんな戦いが繰り広げられているのかも。どちらが優勢なのかも。葉月や青彦、紅姫達が無事なのかどうかも。

断続的に聞こえる獣の声に、焦燥だけが募っていく。

だが、何も分からない以上、咲月には何もできない。いや、もし仮に今分からない事が分かるようになったとしても……今の自分でこんな状況の中、何ができるだろう？

こうして、車の中で一人、シートベルトを握りしめたまま、ただ祈るように彼らの帰りを待つ事以外に、何が？

悔しい。

咲月の心の中で膨らむ強い感情。

何もできない、何も分からない自分がもどかしい。それが、どうしようもなく悔しい。

それは、とつくの昔に捨て去ったはずだった感情。

あの優しかった義父母らを失った後、一番初めに引き取られた男の元で着せられたつんつるてんの服で学校へ通わねばならなかったあの頃。

当然、そんな子どもが居れば、それは同級生たちにとって、いじめの絶好のターゲットだ。日々からかわれては悔しい思いをした。

次に引き取られた家に居た意地悪な義姉に、大事にしていた思い出の品を壊された時。どんなに殴られても泣かなかったのに、思わず涙がこぼれるほど悔しかった。

その次に引き取られた家では、完全無視を決め込まれ、うっかり視界に入ってしまうと、いつも決まって汚いものでも見るような目で睨まれた。毎日台所で1人、人目を盗んで食べ物^みを漁る惨めな自分が悔しかった。

けれど、どんなに悔しい思いを抱いても、何の力も無い自分にその状況を打破する術はなく、結局心にもややもやした^お澱が残るばかりで、ただ辛さが増すばかりだった。

だから、悔しいという感情を、自尊心^{プライド}と共に捨て去った筈だったのに。

それが、今、こうして心に蘇った理由。

ここ最近、捨てたり封じたりしていたはずのものを随分取り戻せたのだけだ。

今、この感情が蘇った理由。

かつて、これを捨てた理由は、その状況を打破する術が無かったからだ。

けれど、今は違う。

今、何の力も無く、ただ何も分からず、何もできずにいる自分が居る。でも、この状況を打破する方法なら、すでに示されている。

そう、方法がある。

悔しい、と、そう思う状況を自分の力で脱却し、打破する事を可能にする方法が。

描かれた設計図を基にそれを形作るのに、今、必要なものは。

緋

さわさわと、風が木の葉を揺らす音に混じって聞こえたその音に、朔海はうつすらと目蓋を持ち上げ、濃紺の瞳をそちらへゆるゆると向けた。

周囲にあるのは、暗闇。

月明かり、星明かり、通りの街灯や近隣住宅から漏れる町の明かりが、無残な姿を晒すボロボロのカーテンの向こうで揺れている

が、本来分厚い遮光用のカーテン越しではあまり意味は無い。

室内を満たすのは、暗闇だ。完全な真っ暗闇ではないが、普通の人間であれば周囲の様子をまともに視認する事もままならないだろう。

だが、彼の目にはその全てが、鮮明に映し出されていた。

投げ出された己の身体を横たえる床に散らばる割れたガラスの破片に転々と飛び散る血痕。床板や周囲の壁に幾つもの、深々と刻まれた傷。ぶちまけられた鍋の中身。蹴り飛ばされて原形をとどめないほど凹んだ鍋。傾いた収納棚を貫く、食卓机の足。

しかし、目に収めたかった場所は視界の外だった。

朔海はゆっくり頭を持ち上げ、死角だったその場所を見ようと思っただが、思うように身体が言う事を聞かない。

そのうちに、車のエンジン音は見る見る間に接近し、そして止まった。

バタ、バタンと忙しげに扉の開閉音が響き、ガチャガチャと玄関の方からもどかしくドアノブを捻る音、脱いだそれを揃える暇すら惜しいと靴を脱ぎ散らかしたまま、スリッパも履かず靴下のままドタドタとあまり上品とは言えない足音を気にもせず高らかに響いたそれは、今まさに朔海が見ようとしていたダイニングキッチンへの入り口手前で止まった。

入口の壁にあるはずの電灯のスイッチを、手さぐりに探し、もど

かしそうにパチパチと入／切を繰り返すが、明かりが灯る事は無い。三秒で、彼女はそれを諦めた。そして、闇を透かすように目を眺める。ほんの、一秒も躊躇う事もせず、部屋へと足を踏み入れようとした。

吸血鬼である朔海には鮮明な闇の視界だが、闇に包まれた空間の中、彼女の目にまともにも映るのは唯一の光源である窓にかかるカーテンの残骸位のものだろう。

来るな、と。喉元まで出かかった声は、渴いた喉にヒリつき、小さな呻きだけが漏れた。

「ダメ、待って！」

と、その直後に彼女の背後から掛けられた制止の声が無かったら、間に合わなかっただろう。

彼女を追うようについて来ていた紅姫の声だ。

そして、その声に重なり、息を呑んだ気配が伝わる。おそろく、葉月のものだろう。彼の眼にもまた、鮮明に部屋の様子が映っているはずだったから。

「嬢ちゃん、悪いが廊下の電気をつけてくれないか？」

紅姫の制止に、一先ず部屋への突入を中断した咲月だったが、今にもまた部屋へ駆け込みたそうに逸る彼女に、青彦が促した。

「すみません、ついでに診療所の方の明かりも、つけて来て頂けませんか？」

小さく息を吐き出し、葉月が言った。

その、彼の険しい表情に、今度は咲月が息を呑む。言葉を紡ぎだせなくなった咲月は頷き、急いで今来た廊下を駆け戻る。

葉月は、スリッパの底でガラス片を踏み拉きながら朔海の元へ歩み寄り、跪く。

「……っ」

声にならない朔海の抗議を無視して、彼の身体を横抱きに抱き上げ、足早に診療所の扉をくぐる。

青彦の案内と指示で、診療所の明かりを一通り灯し終えた咲月は、

診療台に横たえられた朔海の様子に声にならない悲鳴を挙げた。

明らかに顔色が優れずぐったりした朔海。さつき、出かける前に会った時に着ていた物と同じ物だとは到底思えない程に乱れた着衣。シャツもGパンもあちこち破けてボロボロなうえ、あちこち血で染まり、殆ど無くなった右そでから伸びた白く華奢な腕の、肘の先は真っ赤に晴れている。

だが、咲月に悲鳴を挙げさせた原因はそれではない。

乱れ、肌蹴たシャツの下、やはり白くきめ細やかな肌に覆われた腹から泉のように湧く、真っ赤な鮮血。左の脇腹からじくじくと溢れるそれは、見る見る間に診療台に血だまりを作り、更に床へと滴り落ちて行く。

その出血量は、医療知識のない素人の目から見ても、普通の人間ならばとくに生死の境を彷徨い、そろそろあちらへの川に片足を浸していてもおかしくないだろう量だ。

だが、朔海は薄眼を開け、こちらに瞳を向けた。

その、瞳の色に咲月は再び息を呑む。濁りのない澄んだ濃紺色だったはずの彼の瞳の色が、煌々と輝く緋色に変わっていた。

朔海は、ようやく求めていた姿を目にして、表情を緩め、薄く微笑んだ。

「おい、葉月まずいぞ。ヤツら、薬品室の冷蔵庫をめっちゃめっちゃにして行きやがった！」

険しい表情のまま、ボロボロの着衣を裂き、腫れた腕を氷で冷やしつつ添え木をあてて包帯を巻き、腹の傷を大きなガーゼで覆い、細かな傷をピンセットでつまんだ消毒液を染み込ませた綿玉で拭い、黙々と手当を続けていた葉月が、手にしていたピンセットを放り出し、適当に羽織った白衣を翻し、慌てて薬品室に駆け込んだ。

「っ、あつ、」

つられるように咲月が覗きこむと、そこにはまるでトラックで轢き潰したかのようにひしゃげて潰れた、家庭用の2ドア式の無骨な冷蔵庫があった。……確か、この間見たときには、大量の血液パツ

クが詰め込まれていたはず。

そして、床と言わず、壁と言わず……バケツ一杯の中身をぶちまけたかのように、赤黒い液体が滴っていた。

「な……っ」

濃密に漂う、鉄錆の様な血臭。嗅ぎ慣れない臭いに戸惑う咲月の前で、葉月は変形してひしゃげた扉を、力づくでこじ開けた。

すると、ぱらぱらと、中身のはじけ飛んだ空っぽのパックが数個、転がり落ちた。

潰れた庫内に腕を突っ込み、中身をかき出し、床に這いつくばるようにして、落ちたパックの中から無事な物を探す、葉月。青彦と紅姫も加わる。

「あつた、これは無事みたいだ」

前足で、パックを一つ山の中からはじき出す。

「もうひとつ、これも大丈夫みたい」

紅姫が、山の奥から一つ啜える。

「……無事なのは、どうやらその二つだけのようですね」

眉間に深いしわを寄せ、苦々しげな声で葉月が呟く。

「間に合うか……」

無事だったパックを猫達から受け取り、葉月は立ち上がった。

「朔海君」

彼の名を呼びながら、彼が横たわる診療台へ早足に戻り、それをまず一つ差し出した。

閉じていた目をゆっくり開け、差し出された物を見た朔海は慌てたように咲月をちらりと見た。

先程から、咲月が青彦や紅姫と普通に言葉を交わしている事に、彼はまだ気づいていなかったらしい。

「彼女の事なら、大丈夫なようですよ」

ずっと険しい表情が続けていた葉月が、少し表情を和らげて言った。

「飲んでください」

赤黒い液体の詰まったパツクに注がれる、苦しげに揺らぐ朔海の瞳の緋色が、より一層赤みを増した。

朔海は、一瞬躊躇う様子を見せたが、理性より渴きに対する本能が勝った。殆ど奪い取るように葉月の手からパツクを受け取り、チューブの差し込み口を咬み千切り喰い付いた。

「ごくごく、喉を鳴らして飲み込む。」

「ごくごく、ごくごく。息継ぐ間もなく。あつという間に中身の赤は彼の口の中へと吸い込まれ、見る見る間にパツクは空になる。」

「っ、はっ」

「パツク、一気に飲み干してようやく息を継いだ彼の様子に、咲月はまた目を見張った。」

真つ赤になつていたたはずの腕の腫れが、すうーっと引いていく。身体中の細かな傷が、みるみる消えてなくなる。

朔海は、肘をつき、状態を起こそうとして、顔をしかめた。

腕の腫れや、細かな傷は消えたが、腹の傷からは尚、血が止まる事なく溢れていた。顔色も、優れないままだ。

「やはり、一つでは足りませんか……」

葉月は、二つ目のパツクを差し出した。朔海は、今度は少し落ちて着いた様子でそれを受け取り、パツクに口をつけた。一つ目と同様、一息に飲み干す。

すっかり空になつたパツクを受け取つた葉月は、腹部の血をそつと拭つた。つい、今の今までこんこんと溢れていた血が、僅かににじむ程度にまで回復していた。

けれど、彼の顔色は未だ優れないまま。瞳も未だ緋色のままだ。

「……………」

折角、少し和らいでいた葉月の眉間に、再びしわが寄つた。

その訳は、吸血鬼が吸血によつて得る圧倒的な回復力を目の当たりにした咲月にも十分察する事が出来た。

「あの……………」

咲月はおずおずと葉月に声をかけた。

「……………その……………、血が……………要るんですよね？」

両手で、自分の両肘を抱えながら、必死な表情で声を絞り出す。

「あの……………私の血、を……………」

いざという時の“非常食”役位なら。そう、思った時には、まさかこうも早くにその機会が巡ってこようとは思ってもみなかったのだけれど。

今、出来る事があるのだ。

まだ、好きの気持ちの種類は分からないけれど、間違いなく“大切な人”である朔海が、目の前で傷つき弱っている。

それを、ただ眺めているだけしかできない辛さはもう、今日は十分過ぎるほど味わった。

だから。

「私の血を、吸ってください」

ただ、そこに居るだけで……

「え……？」

咲月の申し出を聞いて、目を見張りながら息を呑んだ朔海が、飲み込んでいた吐息と共に吐き出したのは、小さな眩きだった。

大きく見開かれたその瞳の緋色に鮮烈な赤色あかいろが輝く。渴いた喉が、無意識のうちにゴクリと鳴った。

青彦が、猫の口で器用に口笛を吹いた。

「おい、葉月。こりゃ願ってもねえ申し出だよな？」

彼女の言葉に、難しい顔で俯き何やら考え込んでいた葉月は、数を増した眉間のしわを指でほぐしながら、薄茶色の瞳をこちらへ向けた。

「……ごめんなさい。あなたの血を非常食にしようとか、そんな理由で引き取った訳じゃないから安心しろ」なんて言った舌の根も乾かないうちに、こんな事態になっちゃって」

しゅんと頂垂れて言う紅姫に、咲月は慌てて首を左右に振った。

その様子を、診療台に身体を横たえたまま顔だけこちらに向けて眺めていた朔海の瞳に、恐怖の色が揺らいだ。

「……もしかして……僕たちの正体……」

かすれた声で小さく呟かれた朔海の恐怖を、葉月は小さなため息と共に頷き、

「はい。……紅姫が、先だって一通りの説明を彼女にしていたそうです」

と、肯定した。

ぴくり、と、傍目にも分かる程、その言葉を聞いた朔海の身体が強張った。その表情は、まぎれもない恐怖に染まり、呼吸が、浅く早くなる。

「ま、待って……。お願いだから……」

まだ、思うように動かす事の出来ない身体で、無理やり起き上が

ろつと全身を震わせながら朔海は懇願の瞳を咲月に向けた。

人にあらざる緋色の瞳に宿る、あまりに良く見知った感情。その視線を真つ直ぐ受け止め、咲月は言った。

「逃げません」

握りしめた右手を胸に当てて。

「……私は、ここに居たいんです。だから、逃げたりなんかしません」

咲月は、言った。

「あの、勝手に色々聞いてしまつてごめんなさい……。まだ、あの事についての覚悟もできてないけど……。でも……。お願いです、私をここに置いてください」

その、彼女の必死の言葉の矢は、すとん、と綺麗に朔海の心の真ん中を射抜き、朔海は息を呑み、声を詰まらせた。

「……紅姫。吸血鬼わたくしたちに血を吸われるという事がどういう事なのか彼女に、きちんと説明しましたか？」

ずっと考え込んでいた葉月が、静かに問いかけた。紅姫は、静かに首を左右に振る。

「ごめんなさい、まだよ。一つずつ、ゆっくり順番に説明していけばいいと思つていたから。まだ、一通りの簡単な……。基本的な事しか説明していないの」

紅姫は、咲月を見上げて続けた。

「血を吸われただけで吸血鬼になったりはしない……。前に、そう説明したけれど……」

「確かに、それは間違いではありませんが……。正確ではありませんね。圧倒的に説明が足りていない」

葉月は、メガネを押し上げながら、彼女の言葉を継いだ。

「吸血鬼わたくしたちの身体に流れる血はこちら側の生物わたくしたちには毒になります。そして、血そのもの程ではないにしろ、吸血鬼わたくしたちの体液もまた……。こちら側の生物にとっては毒となり得るのです。……。直接、肌わたくしたちに牙を穿てばどうしても、唾液どくが入る事になる。……。致死量を超える程の

吸血行為を働けば、それだけの量の毒が回り……その結果として、中途半端な吸血鬼が出来上がるのです。……心も感情も理性も失ったヴァンパイアとして蘇った、真正銘の化け物が」

葉月の説明を耳にしながら、朔海は固く目をつぶる。

「もちろん、致死量を超えさえしなければそんな事にはなりません。……ですが、その毒とは、吸血鬼わたしたちにとっては魔力そのもの。それを利用して、吸血した相手にんげんを操る、といった芸当も不可能ではないのです。ですから、血に飢えている今の朔海君に咲月君の血を吸わせる訳にはいきません」

と、葉月は断言した。

「……しかし、今の状況のまま朔海君を放置する訳にもいきません。提供して戴けるのでしたら、是非とも欲しい」

葉月は、決断を下した。

「採血の準備をしましょう」

要は、直接に吸血しなければ良いのだ。

「いいですね？」

葉月は問うた。咲月は葉月の目を見、そして頷いた。しかし、朔海は赤いままの瞳で葉月を見上げ、

「……でも……」

と、渋った。

「こんなの、少し休めば治るんだ。それを……、そんな……。僕はそんなことの為に君の傍に居たかった訳じゃないのに……！」

「朔海様。確かに貴方の持つ回復力を以ってすればこの程度の負傷、血など吸わずとも治癒は可能でしょう。……ですが、現状でそれだけの余裕があるとは到底思えません」

今回は、追い返すことに成功した。だが。

「あの男の事です。この程度であきらめるとは思えません。すぐにもまた新手を送り込んで来るに違いありません。それまでには回復しておいていただかないと困りますから」

葉月の指摘に、朔海は反論できずに手で顔を覆う。

「……」

そして、ぽつりと零した。

「謝らないでください。今の私にできる事は、これしかないから

……」

「！、そんなことはない！」

寂しそうに俯いた咲月に、朔海は強く否定の言葉を吐き出した。

「……君は、ただそこに居てくれるだけで僕にこの世界を生きていくための大事なものをくれるんだ。僕は、君を守りたかったのに

……」

一筋、彼の横顔に水滴が流れた。

初

「朔海様。その台詞、そっくりそのまま私からあなたへお贈り致しましょう。私にとつての希望はあなたのその心。あなたの心を守るためには私は労力を惜しんだり致しません。ですが、それも命があればこそです。あなたの命を守るためならば、私は手段を選びません」

葉月は、てきぱきと採血の支度を進めながらきっぱりと言いつた。

「そして今、それを守るためには咲月君の存在は欠かせません。今や私にとつてあなたは朔海様と同等 いや、もしかしたらそれ以上に失くす事の出来ない存在です。あなたの未来の幸福しあわせの為に力を惜しむつもりはありません」

咲月に丸椅子を勧めながら、葉月は彼女に真摯な言葉を向けた。

「先程、出かけた先で襲ってきた連中の素生や目的は、もう紅姫から聞きましたか？」

「あの……、はい。私を、狙って来てるんだって……」

咲月の答えに、紅姫がつけ足す。

「……朔海様がしばらく不在だった間の事情については説明したけれど、葉月、あなたの血にまつわる因縁に関してはまだ、さわりしか説明してないの。……いろいろ複雑だから、そこまで説明しようと思つたらかなり色々掘り下げなきゃいけないし」

カラカラと、葉月が椅子に座つた咲月の前にキャスター付きの小さな台を運んできた。卓上には、注射用の腕置きが置かれている。

「先程襲ってきたあれは、……私としては非常に受け入れがたい事実であるにしろ、取りあえずは私の縁者なのです。私は、あなたと朔海様を私の厄介事に巻き込んでしまっているのですよ」

「……それは、僕もだ。その、葉月の一族のゴタゴタと、僕の家
の厄介事はつながっているんだからね。僕も、君を僕の事情に巻き

込んでる」

「我々があなたをここへ招かなければ、あなたはそれに巻き込まれる事など無かった」

医療用具を収めた収納棚から銀色のトレーに必要な道具を揃え、卓上に置いた葉月は振り返り、朔海と紅姫とを交互に眺めて尋ねた。

「……朔海様が今抱える事情についてはどこまで？」

「朔海様に下された命令についてと、葉月の言う『全てが上手くいく、たった一つの方法』については一通り。……一番最後の肝心な部分の詳しい説明がまだなただけ」

彼女の答えに、朔海は呻いて身をよじり、仰向けていた身体を診療台にうつ伏せ、申し訳程度に置かれた小さく硬い枕　というよりは頭置き、と言った方が正しいかもしれないそれに額を押しつけ、よじれた傷の痛みに思わず上げそうになった悲鳴を押し殺して再び呻いた。

「つまり、朔海様の結婚話についてと、その“解決策”については聞いているんですね？」

咲月は、無言で頷いた。

「ううああああ……」

枕に顔をうずめたまま、頭を抱えて朔海はまたしても呻き声をあげた。

「それでも、あなたはここに居たいと思って下さるのでしょうか？」

葉月は、そんな朔海の様子に苦笑をしながら優しい笑みを咲月に向けた。

「しかも、傷ついた彼を癒すためとはいえ、吸血鬼である朔海様に血を分けて下さるのだと言う……」

「ははっ、本当に逸材だよな」

青彦が笑った。

「なあ、嬢ちゃん。俺はな、昔、こいつが吸血鬼だって事実を知った時、こいつを殺そうとしたんだよ」

青彦は、さらっと軽い口調で衝撃の事実を口にした。

「むかあし、昔の話さ。まだ俺が、ガキにちつと毛が生えた位の頃の……。その頃の俺はな、好きだった女が吸血鬼なんかを好きになっただけで知った時、そいつらの気持ち悪い事を思いつく事もせず、ただ自分の正義だけを信じて、こいつを殺そうとしたんだ」

ちらりと、紅姫に視線をやり、そして葉月を見上げ、青彦は続ける。

「でも……結果的に、俺は好きだった女を死なせちゃった。その所為で、俺はこいつに今も永遠の後悔を背負わせてる。だけど……嬢ちゃん、あんたは“逃げない”んだろ？」

青彦は、小さな牙をのぞかせながらニヤリと笑った。

「なら、面倒事は全部俺らに任せて、あんたは胸張って堂々とここに居ればいい。まだ、後1年、時間はある。考えるべき事はこれからゆっくり悩めばいい」

ピクリと、朔海の肩が震えた。葉月は、何とも言えない顔で苦笑してから、

「……では、そろそろ始めましょう。咲月君、腕を ええと、利き腕は確か右でしたよね？」

と尋ね、咲月の左腕を恭しく手に取り、袖を肘上まで丁寧に捲った。

この数日のケアで、咲月の肌は以前と比べて随分と綺麗になったが、昔の痛々しい傷跡までは消えはしない。

幾つもの傷跡の上をそつと、手首から肘にかけて親指で扱くように簡単なマッサージをする。止血帯を手に取り、ゴム製のチューブを肘上できつく止め、彼女の腕を腕置きに置くと、人差し指で血管を探り、当たりをつけた場所を親指で圧迫しつつ、右手でピンセットを手に取り、つまんだ綿玉に消毒薬を染み込ませる。暖かだった葉月の指が腕から離れ、そこを冷たい消毒の綿でぐりぐり拭かれた。役目を終えた綿玉を屑入れに捨て、葉月は400ccパックから伸びたチューブの先についた注射針を手取る。

見るに、これまで目にした事のあるものよりと随分針が太い

気がする。だが、葉月はそのまま、特に予告する事も無くササッと針を静脈に差し入れた。

一瞬、冷たいような感覚はあったけれど、痛いという感覚は皆無だった。刺した針を、テープで固定し、止血帯を外す。……と、つつーっとチューブを伝って咲月の血液がその先のパックへと流れた。

葉月の一連の処置をジッと興味深げに眺めていた咲月は、その手際の良さに舌を巻いた。

いつだったか、中学で「貧血検査」なる血液検査を受けた事があったが、あの時は注射の下手な医者に当たってしまい、何度も失敗された苦い記憶があったのだが。

葉月は、にっこり笑って言った。

「これでも、私も吸血鬼ですからね。血の扱いに関してはちよつとしたものなんですよ。何より、随分長く生きていますからね。その分、積んだ経験量もそこそこありますから」

言われた咲月の脳裏に、紅姫に聞かされた数字が蘇る。

「……あの、700歳って、本当なんですか？」

恐る恐る、といった様子で咲月が尋ねた。葉月は、少し考える素振りを見せ、

「そうですね……一番古い記憶が、当時政権を担っていた鎌倉幕府が倒れ、天皇家が南北に分かれて争っていた頃の物なので……まあ、それくらいなのでしょうね」

と、事も無げに言った。

「じゃ、じゃあ……」

そろそろと、朔海の方へ目をやる咲月に、葉月が答える。

「ああ……はい、先日めでたく御年300になりました」

「う、うわああああ、言わないで！ 真面目に考えると嫌になるんだから！」

朔海は突っ伏したまま頭をかきむしったが、すぐに傷の痛みには呻いて潰れる。

たった今肯定の答えを聞いたばかりなのに、そんな彼の様子からは、やはりそんな感じはしない。けれど、咲月は納得がいったように小さく頷いた。

同年代の男子達には到底真似できそうに無かった細々した彼の自然な気遣いの数々は、それゆえの物だったのだろう。

「じゃあ……王子だって言うのも……」

「……うん、本当だよ。まあ、“綺羅星”なんて呼ばれて蔑まれてる、名前だけの第一王子だけだね」

「……吸血鬼に限らず、魔界と言う場所はとにかく力が全てなのです。朔海様の場合、それなりの力は持つていらっしやるのですがね。こういうご気性なもので……滅多な事では使いたがらないものだから」

パック一杯に血が溜まったのを確認した葉月は、針を留めていたテープを慎重に剥がし、傷口を脱脂綿で抑えながら針を抜き、綿をテープで圧迫するように留めて止血する。

「力が全ての場所で、自由にできる力を使わない阿呆はフツ居ないからな。連中は、この坊ちゃんが無能なんだと思っ込んでるのさ」

阿呆だと言われた朔海は、葉月に差し出された咲月の血が詰まったパックを悲しげに見つめて言った。

「いや、確かに今の僕は何の力も無いただの無能だ。今日一日で、その事実を嫌という程実感させられたよ」

朔海はそれを、そつと壊れ物か何かの様に慎重に受け取った。

「僕も、覚悟を決めないか……か……」

ジッと、パックに詰まった血を眺めていた目を静かに閉じる。大きく息を吐き出し、再び目を開けて、朔海は先の二つと同様、パックに口をつけ中身を吸い取った。

保存液の味の混じる、冷たい、誰のものとも知れない、いつもの血とは比べ物にならない程甘い血の味が、舌の上を通り過ぎ、腹の中へと収まっていく。

段違いなのは、味だけではない。直接摂取ではないとはいえ、無垢な生き血から得られる力はいつものパックから得られるそれとは、まるで別次元のもの。

腹の傷はほんの一瞬の間に綺麗さっぱり消えてなくなり、顔色にも血色が戻る。それとは逆に、瞳の色は緋色から常の濁りのない澄んだ濃紺色へ戻る。

だが、それ以上に……何だろう、何か惹きつけられるもの……色気……というか魅力というか……よく分からない何かが増した様に、咲月には感じられた。

パックの中身を吸いながら、朔海が診療台の上で身を起こし、台に腰かける。その仕草に、疲労の色は見えない。

やがて、空になったパックを口から離し、朔海は穏やかな微笑みを咲月に向けた。その、向けられた笑みに、咲月の心臓が一つ、いつもと違う拍動を刻む。

「……ごちそうさま、……って言うのは……不謹慎かな？」
先程までのかすれた声から一転、魅惑的な声が、冗談混じりの台詞をなぞった。

「でも、……ありがとう。助かったよ」

……身体の傷は全て跡形も無く消えた……が、ボロボロにされ、葉月が裂いた服までは戻らない。ほぼ全開に近いシャツの下の彼の半裸を直視できずに、咲月は目を泳がせた。

その隣で、葉月がわざとらしい盛大なため息を吐き出した。

「朔海君、とにかくまずは部屋へ行つて着替えて来てください。」

それから、現状について改めて話し合いをしましょう」

葉月は、自分の白衣を脱いで朔海に放る。

「……キッチンがああ様子じゃ、今日の夕飯は何か出前でも頼むしかなさそうですしね。咲月君、こんな時間に失礼とは思いますが、あなたの部屋とコタツ、お借りしてもよろしいですか？」

血と、魔力と、色香と。

咲月は、目の前にでんと居座るお重を凝視したまま、固まっていた。

落ちつかない。

視線が、泳ぐ。

上品な光沢のある黒塗りのお重の蓋に書かれた「うなぎや志麻」なる金文字。その横にはお椀が一つ。

咲月のすぐ目の前にあるお重とは別に、卓にはもう二膳、お重が並んでいる。左に葉月、右に朔海。

葉月の膳、朔海の膳、自分の膳、そこから視線を上げて時計を確認し　現在午後八時三十七分二十三秒　ちらりと葉月の横顔を視界に収め、再び葉月の膳へと視線を落とし、朔海の膳を見、自分の膳を見、また時計を確認　現在午後八時三十七分三十一秒　葉月の膳へと視線を落とす間に彼の姿が視界に入る。

いつものゆったりとした食卓机と比べ、だいぶ距離が近い。

別に狭い訳ではないはずのだが……

出前と言われて、ピザしか思いつかなかった咲月は、つい、気分的に必要な正座をしてしまう。鼻をくすぐる食欲をそそる香ばしい香りに、腹の虫がうっかりポカをやらかさぬよう監督することに努めて心を落ち着かせようとする。

ゴポゴポ、と、朔海の座る横に置かれたポットから蒸気が勢いよく排出される。

朔海は、卓に置かれた急須に、湧いたばかりの熱湯を注ぎ、盆に乗った三つの湯のみに順繰りに茶を注ぎ入れながら、彷徨う咲月の瞳がことごとく自分を素通りしていく理由が分からず、トポトポと茶を注ぐ音に哀愁が揺らぐ。

「冷めないうちに、いただきましょるか」

葉月は、心の中だけで呆れた様なため息をつきつつ、割り箸をパ

キンと二つに割る。毎度お決まりながら、綺麗に二つに割れず、箸の絵の片方が斜めに太く、もう片方は細くなる。……が、いつもの事だ。葉月は気にせず、お重の蓋を開け、早速うなぎに箸を入れる。「葉月、お茶」

朔海が差し出した湯のみを受け取り、葉月は湯気の立つお茶を一口すすり、小さく息を吐き出した。

「えっと、……君のも」

どうしても、その視線を上げる事が出来ない。

言われて差し出された湯のみを務めて凝視しながら、咲月はおずおずとそれを受け取り、卓に置いた。

ふと、小さな音が耳につき、ちらりとそちらに視線を送る。

朔海の、箸を持つ右手の手首に着けられた、ムーンストーンのブレスレットが目に残る。そういえば、さっき、治療中にも彼の手首にそれはあった。

服も身体もあれだけボロボロだったにもかかわらず、ブレスレットには小さな傷一つさえない。

パキン、と、こちらは器用に割り箸を綺麗に二つに割り、慣れた手つきで箸を操り食事を始める。

着替えて部屋へとやって来た朔海をすっかり直視してしまった時、何故だか異様に心拍数が跳ね上がった。見た感じ、特に何かが変わった感じはしないのに。

本当に何気ない仕草の一つ一つがどうしても気になって仕方がないのだ。

「朔海様、念の為お尋ねしますが、お身体の方の調子はいかがですか？」

「ん？ ああ、問題無いよ。……と、いつか……もう、いつ以来だろうか？ ここまで絶好調なのは」

咲月はジッと、朔海の手元を視線で追う。

王子……だからなのだろうか。マナーやら作法やらに詳しくない咲月の目から見ても、彼の仕草はどれも綺麗だ。

「咲月君はどうです？ 一応、健康上問題の無い程度とはいえ、一度に結構な量を取りましたから……。変に疲れたり、眩暈がしたりはしていませんか？」

咲月は首を左右に振りながら、急いで口の中身を飲みこんだ。

「……特には。たぶん、大丈夫だと思います」

「そうですか。でも、今晩は出来るだけこまめに水分補給をしてくださいね。何かあったら、いつでも私に一声掛けて下さい」

葉月は、医者顔で言う。

「はい、ありがとうございます」

そんな彼を見上げ、咲月は軽く頭を下げた。

「……それは、私達が言うべき台詞ですよ」

苦笑を浮かべた葉月に、

「それと、“ごめんなさい”も付けとくべきじゃないか？」

それまで畳の上でゴロゴロと寝そべってくつろいでいた青彦が口を出す。

「これまで秘密にしてきた事をさ、謝っとくべきだろ？」

「……そうだね」

朔海は、未だにこちらを見ようとしない咲月に寂しげな笑みを向け、そして目を伏せた。

「僕が、君を巻き込んだんだ。……僕は君に幸せに暮らして欲しかったんだ。まさか、百年近くまるで動きの無かった事態がこうも急展開するとは思ってもみなかったから、吸血鬼なんて面倒事は全部忘れたまま……」

湯のみを持ち上げ、ちらりと中身に視線を送る。

「でも僕は、こうして君を巻き込んだ。君の血を飲み、そして……君に、とても酷な選択を押しつけようとしているんだ」

朔海は、それに口をつけることなく静かに湯のみを置いた。

「ねえ、……僕が怖い？」

恐る恐る尋ねた彼に盛大なため息で答えたのは、問われた咲月ではなく、葉月と青彦と紅姫だった。

「……朔海様」

ため息をつきつつ眉間にしわを寄せる葉月の横から青彦が

「うわぁ、全然分かってないよ、この坊ちゃん……」
呆れて呟いた。

「普段はコレが可愛いんだけど……。これからを思うとちよつと不安になるわね……」

さらに紅姫にまでダメだしされた朔海は、困った顔で首をかしげた。

「え、え……？」

「あのお、ダダ漏れなんだよ、さつきから」

青彦は、あえて主語を抜かして言った。

「飲んだだろ、さつき。……だから、そのせいなんだよ」

が、朔海はその青彦の言葉を聞いてもまだよく分かっていない顔をする。

「吸血鬼は、血を得るために狩りをする生物ですから。獲物を惹きつけるための疑似餌としての『魅力』というのが ある程度の個人差はあれど 標準装備されているんですが。それに、持ち合わせた『魔力』が加味されると、異性を惑わせる『色香』になるんです。……もちろん、あなたはご存じのはずですよ、朔海様？」

こめかみに手を当て、頭痛を堪えるように首を振り、深いため息と共に葉月が尋ねる。

その葉月の言葉を聞いた咲月が、ようやく顔を朔海に向けた。視界に彼の顔が写り込んだ瞬間、一際心臓が派手に鼓動を乱し、咲月は無意識に呼吸を止める。

「え、……でも……僕は“綺羅星”なのに……？」

咲月の反応の理由を聞いて少しホツとしながらも、朔海は戸惑いをそのまま口にした。

「なあ、葉月。俺、例の件での一番の厄介事が俺達の正体なんだと思ってただけだよ」

「ええ、私たちの思い違いだったみたいね」

「まさか、青彦の懸念がここまで現実味を帯びてくるとは……思

「いませんでしたね」

「坊ちゃん、さつき嬢ちゃんの血を飲んだら？ その分、あなたの魔力が普段のそれとは比べ物にならない程、破格に増大してるんだよ」

「……その所為で、あなたの色香が増しているんです」

「それこそ、この娘にとっては凶器に等しいくらいにね」

朔海は、それでもまだ微妙な表情を浮かべていたが、やけに赤い咲月の表情に目を留め、目を閉じた。意識を己の血流に集中させ、体内を廻る魔力を操り、抑える。

咲月の高鳴る心臓が、波が引いて行くように静まって行く。止めていた息を一気に吐き出し、疲れ切った咲月は箸を置いて卓に額をつけた。

「嬢ちゃん、大丈夫か？」

「だ、だいぶ楽になりました」

青彦の言葉に顔を上げた咲月は、明らかに疲れた顔で微笑んだ。改めて朔海を見上げ、あの奇妙な鼓動の高鳴りが湧き起こらない事にホツとしながら、

「……その、……すみません」

謝罪の言葉を口にしながら軽く頭を下げ、視界にブレスレットを捉えた瞬間、先程のものとは比べ物にならない程度の微かな波紋が心の中にじんわりと浸透していくのを自覚した咲月は、朔海の綺麗な瞳を見つめた。

「嬢ちゃんが謝る事じゃないって。ありや普通の人間が抗える類のものじゃないからな」

「ある程度耐性があって、しかも葉月（いこひつ）が目の前にいた私ですら、グラついた位だったんだもの。何の免疫も無いあなたが正気で居られたのって、結構すごい事なのよ？」

「うーん、身体の調子がすごく良いのは確かなんだけど。……そんなに？」

困ったように頭をかいた朔海は、

「自分じゃ良く分からないんだけど。本当にそうなら……」
と、小さく呟き、

「葉月、今ならあの術も使えるかな？」
葉月に問いかけた。

「……今日、押しかけて来た連中だけどさ、情けないけど追い返すだけが精一杯で。それでも、しばらく魔界から出られないように術の刻印を刻んでやったから、あの連中は当分こっちは来られないでも……」

「あの男の掌中に握られた手駒はまだ多い。全ての駒を潰しきるよ、私達の方が先に参ってしまうであろうことは火を見るより明らかでしょう」

「連中全部と戦うには全然足りないけど」

朔海は、自分の掌に視線を落とす。

「でも、連中がこつちへ来るのを一時的に封じるだけなら……」

「不可能ではないでしょう。ですが、現状ではお勧めできません。あまりにも、消耗が激しすぎる。確かに今、貴方の魔力は増しています、あくまでそれはあの大怪我を回復させた“余力”です。術で消耗した分を即時回復させられる手段が無い状態でそれをしようというなら、私は全力で貴方をお止め致しますよ」

葉月はきっぱり言い切った後、

「……ですが」

と、ちらりと咲月を見やってから再び口を開いた。

「間をおいて、もう一度咲月君の協力が得られるなら、それが一番有効な策でしょう」

一口、茶を啜り、

「できれば、2ヶ月は欲しいところですが……」
ひどく渋い顔をする。

「咲月君の負担を考えれば、2ヶ月後が妥当なのですが……」
葉月が言い渋る理由など、この場の誰もが良く分かっていた。

咲月は、もう一度朔海の手首に目をやり、

「あの、私にできる事なら……言っておさい」

葉月に言葉の続きを促した。

「今が大変な状況なのは分かっていますから。少しの無理を通すくらい気にしませんから、言っておさい」

策

長い事、あちらこちらを転々とさせられてきた咲月にとって、長距離の移動など慣れたものだった。はずだった。

しかし、殆どの場合で利用した移動手段は鉄道、それも特急車両ではなく、普通列車である。当然、移動には半端ではない時間がかかるのだが、列車という乗り物の特性上、車両内の移動は容易に可能で、ある程度空いた列車であれば、立ったり座ったりも自由ができる。一時間に一本しか電車が無い様なローカル線の田舎駅でさえなければ、時折、休憩を兼ねて途中下車も気軽にできる。

だから、大いに油断していたのだ。

「……大丈夫？」

朔海が、背中をさすりながら心配そうに言った。

「そろそろお昼だし……、どこかで休憩しようよ。葉月、後ろに積んだ荷物の中に酔い止め薬は入ってないの？」

「ありますよ。ですが、胃の中が空っぽの状態での服用は良くないですからね。今度、良さそうな店を見つけたら、食事にしましよっか」

一人、運転席に座る葉月は、ちらりとルームミラー越しに後部座席の二人を見た後で、少し拓けて来た道の先に目を凝らした。

「うどんとか、軽く食べらるものの方がいいんじゃない？」

「もう少しで中禅寺湖です。このあたりは確か、湯葉が有名なんですよ」

「へえ、良く知ってるね」

「調べましたから」

葉月は、ダッシュボードに手を伸ばし、中からガイドマップを取り出した。運転中の彼は、前を見たまま左手だけ後ろに回し、それを朔海に手渡した。

本には、幾つものポストイットがつけられ、その一つを開けてみる

と、マーカーで引かれた線で蛍光ピンクに染まったページが現れた。見開きページの左に地図、右にはその周辺の観光施設やグルメ情報載っている。

「あ、このヒメマスつてのもおいしそう……って、ああ、旬にはまだちょっと早いんだね。幻の魚とか書いてあるよ、これ。今度、釣りに来るのもいいなあ」

朔海の言葉につられ、つい彼が開いた本のページに視線を落としたりした後、すぐにそれを後悔するように目をそむけた咲月は車の窓に懐く。

「あ……ゴメン」

朔海は言いながら、助手席と運転席との隙間から腕を伸ばし、本を葉月に返す。

「ねえ、ここ。湯葉の蕎麦が美味しいお店だって。この近くみたいだよ」

朔海から本を受け取りながら、一瞬、地図を見て、ちょうど通り越すところだったガソリンスタンドの看板と、地図に載ったマークの図柄が同じものであるのを確認した葉月は、車のスピードを少し緩め、慎重に流れていく景色を観察する。

「あ、あれじゃない？」

後部座席から身を乗り出していた朔海が、前方を指さして言った。「朔海君、シートベルトはちゃんと締めてください。最近じゃ、それでの取り締まりもあるんです。間違っても警察の御厄介にはならないんですから、気をつけて下さいよ？」

苦言を呈しながら、葉月はウィンカーを点滅させ、店の駐車場へ右折しようと軽くブレーキを踏む。対向車線と後続車両を確認し、再びアクセルを踏み込み、開いた駐車スペースに頭から車を入れ、エンジンを切る。

「大丈夫ですか？」

葉月が後ろを振り返り、咲月の様子を窺う。

「車を降りよう。外の空気を吸えば少しは楽になるだろうし」

気遣つてくれる二人の言葉に、咲月は無言のまま僅かに頷き、取りあえずシートベルトを外す。

その間に先に車を降りた葉月が車のドアを開けてくれる。

急な動きをしないようゆっくり体の向きを変え、地面に足をつけた咲月の前に、手が差し出された。いつの間にか反対側のドアから車を降り、後ろを回りこんで来た朔海の手。

咲月が立ちあがるのに手を貸し、そのまま店へとエスコートしてくれようとしているのだろう。

こつこつ扱いに未だに慣れられない咲月は、ぎこちない動きで彼の手を取った。

あまり良いとは言えない顔色で、よろよろ立ちあがる咲月の背に手を添え、朔海は後ろ手にドアを閉めた。

「深呼吸、してみようか？」

湖にほど近い山中の空気は涼しく、むかついた気分をきりりと引き締めてくれる。慎重に、空気を肺に入れ、そして吐き出す。

生温かい車中の空気が、新鮮な空気と入れ替わり、重苦しい気分が少し楽になる。

トランクを開け、荷物の中から目当ての物を引っ張り出した葉月は、車のキーについたキーホルダーのスイッチを操作して全てのドアにロックをかけ、

「店に入りましょう。冷たい水を飲めば、少し楽になるでしょうか」

先に立って歩き出した。

「行こう、歩ける？」

朔海の問いに、咲月はもう一度無言で頷き、背に添えられた手に心臓の鼓動を乱しつつ、店へと歩き出した。先に行く葉月は、店の扉を押し開け店員に指を三本立てて見せて人数を伝え、開けた扉を押さえて待っている。

そう広くも無い駐車場は、数歩も歩けば店の戸をくぐる事が出来た。店の扉は二重になっており、葉月が開けて待っていた扉をくぐ

ると風除け室があり、目の前にもう一枚、扉があった。

葉月は、押さえていた扉を朔海に預け、もう一枚の扉を押し開けた。

「いらっしやいませ。お客様、お煙草はお吸いになられますか？」

「いえ、吸いません」

葉月は店員の問いに答えながら、ザツと店内を見回した。奥の席で、煙草を吸っている年配の男性客らを見つけると、

「できれば、喫煙席から一番離れた席をお願いしたいのですが」と、店員に告げた。

「連れが、山道で少し車に酔ってしまったようでして。煙草の煙は、ちよつと……」

「かしこまりました。では……こちらのお座敷はいかがですか？」案内された部屋を覗き込んだ朔海は、

「いいんじゃない？ 襖を閉めちゃえば静かになるし、窓も開けられるみたいだし」

葉月を見る。

「では、只今お茶とおしぼりをお持ちいたします」

「あ、すみません。お冷やを一つ、いただけますか？」

去りかけた店員を呼び止めた葉月が水を要求している間に、朔海は段になった座敷の淵に咲月を座らせ、その足元にしゃがみこんだ。そのまま、咲月の履いたスニーカーの靴紐に手を伸ばす。さすがに焦って固まる咲月に頓着する事なく手際良く靴を脱がせてしまう。朔海は、自分も靴を脱いで座敷に上がると、再び咲月に手を貸して立ちあがらせ、座敷の上座に導いた。

座敷は、足元が掘りごたつ式になっており、足を下せるようになっていた。咲月を座らせ、隣に座った朔海は後ろの窓の鍵を開けると半分ほど開け、外気を入れる。

襖を閉めた葉月は、咲月の向かいに座り、卓に置かれたメニューを開いた。

メニューの冊子に挟まれたランチメニューを抜き出して、朔海は

咲月の前に置きながら、

「あつ、これ美味しそう。僕、これにする」

そばやうどんといった和風メニューが並ぶ中、湯葉ときのこを使ったクリームパスタを見つけた朔海が載せられた写真を指して言った。

「では、私は湯葉と山菜のお蕎麦にしましょう。咲月君はどうします？ 暖かいものよりは、冷たくさっぱり食べられるようなものの方が……」

言いかけた所で襖が開き、

「お待たせいたしました、お茶とおしぼり、お冷やをお持ちしました」

先程の店員が、盆におしぼりと、お茶の入った湯のみと、水の入ったガラスのコップを持って入って来た。

「ご注文はお決まりです？」

それらを卓に並べながら尋ねる店員に、葉月が否と答えると、
「では、お決まりになりましたらまたお声をおかけください」

早々に退出していく。

「あつ、これもおいしそう！」

湯葉を使ったスイーツメニューを眺めていた朔海が目を輝かせた。

「湯葉のムースだって。これなら食べられるんじゃない？」

可愛いガラスの器に入った褐色のムースの上に色とりどりのフルーツが飾られたその写真を指さし、朔海が言った。

「あ、僕はこっちのにしようかな、豆乳プリンだってさ。大丈夫、もし多かったら、僕が食べるし」

……それはつまり、咲月の食べかけを彼が食べるということ、
そういうのを世間様では確か間接キスとか言うのではなかっただろうか？

咲月は、口に含んだ水を飲み込もうとして失敗し、激しく咳き込んだ。その拍子に、胃からあがってくるものを必死に押し戻そうと苦心しつつ、目につっすらと涙を溜めた。

「だ、大丈夫？」

背をさすろうと伸ばされた手を手振りで制し、何とか呼吸を整えてから、

「す、すいません。もう、大丈夫です」

小さく呟いてもう一度口に水を含み、今度はちゃんと飲み込んで、

「少し、楽になりました」

ホッと小さく息を吐き、コップを卓に戻した。

「食事、食べられそうですか？」

問いに頷いた咲月に、

「食べ過ぎるのも良くありませんが、空腹過ぎるのも乗り物酔いにはあまり良くないですからね。食べれそうならば、きちんと食事を摂った方が良いでしょう。特に、この遠出の理由を考え合わせれば、尚更ね」

葉月はメニューを開き、

「消化の良い物の方がいいでしょうね。蕎麦というのは意外と消化はあまり良くないので……これなんかどうです？ 湯葉の雑炊はどうですよ」

と、小ぶりの土鍋に盛られたそれを指して言った。

「じゃあ、それで……」

全員の注文が決まり、葉月が後ろの襖を開けて店員にオーダーを告げる。

「目的地までは、まだまだ時間がかかるんだよね？」

「まだあと五時間以上はかかるでしょうね。直線距離で行けるような高速道路でもあれば良いのですが、残念ながら国道を乗り継いで回りこんで行かなければならないので……」

注文を終え、襖を閉じた葉月は、おしぼりの袋を破りながら言った。

「この辺も、鬼怒川という温泉処なのですが……。やはり、目的を考えれば関東近辺では草津温泉がベストです」

あの、私にできる事なら……言つて下さい。今が大変な状況なのは分かつてますから。少しの無理を通すくらい気にしませんから、言つて下さい。

そう言つた咲月に、葉月が渋々口にした言葉。

「血を」

短く途切れてしまつた言葉を継ぐように、葉月はもう一度息を吸つて、再び口を開いた。

「もう一度だけ、朔海様に飲ませるために咲月君の血が欲しいのです」

告げられた咲月は、小さく首をかしげた。

……血を飲んだせいなのだというあの朔海の妙な色香には困つたけれど、ついさつき彼に血を分けたばかりである今、葉月がそこまで渋る程の理由が咲月には分からなかつた。

「私は、先程あなたから400ccの血液を採りました。それだけの量の採血をした場合、減つた分の血を回復させるために、本来ならば8週間は間を置かねばならないのです」

だが、敵が親切にそんなに長い間見逃しておいてくれるはずもないだろうことは咲月にも容易に察する事が出来た。

「朔海様の術のお陰で、1週間ほどの安全は確保されたと思われま

す……が」

「……それでも、雑魚な刺客連中くらいは送られてくるだろうね」

「普通に日常生活を送る事を前提とした数字が2ヶ月なんだと、良

いように解釈すれば……あるいは」

葉月は、咲月にまっすぐ視線を合わせて続けた。

「1週間、“入院”という形で全力で“治療”を施せば……、あるいは

「入院……？」

「ええ、今のあなたは少々血液量が減っているだけで至つて健康体です。もちろん本来なら、そんな処置は全く必要ありません。ですが、そこをあえて絶対のサポートの元で血液量を大急ぎで増やすん

です。当然、咲月君の身体にとっては良い事ではありません。無理をする分がそのまま身体への負荷になる」

そうして、無理やり増やした分の血液をまた抜こうと言うのだから、彼女への負担は限りなく大きい。

「でも、それで今の状況をどうにかできるんですよ？」

「うん。とつてもたくさん魔力を必要とする術だから、まだ一度も使った事がないんだけど。成功すれば、連中は僕の許可なしに魔界とこつちの世界との行き来ができなくなる。少なくとも、向こう半年くらいは」

血さえあれば、彼はそれだけの魔力を得る事が出来る。次は、

半年後。それだけの間があれば、今度は普通に血を分ければいい。

それで、期限一杯までの平穩が約束されるというのなら。

迷いも、躊躇いも必要ない。向けられた視線を、真っ直ぐ見返す。

「……いいんですか？」

葉月の問いに、咲月は頷いた。

「では、明日から1週間ほどの予定で温泉旅行に行きましょうか」

そして、彼は優しい微笑みを浮かべて言ったのだ。

世界のカタチと世界を渡る鍵

「草津温泉は、“含鉄泉”と言いまして、貧血に効果があるんです。……まあ、それだけでは気休め程度にしかありませんが……徹底した栄養管理と、薬とで補強した上で適度な運動と十分な休養を合わせて取れば、それなりの効果が期待できるでしょう」

それが、突然の提案の理由^{わけ}。

「でも、昨日の今日でよく宿が取れたね？」

昼食を済ませ、再び車に揺られながら、朔海が口にした問いに、

葉月が答える。

「春先の忙しい時期ですし、長期宿泊用の自炊宿ですからね」

「自炊……、って……」

「昨日のうちに、私が一週間分の栄養計算表を作っておきましたから。朔海君、期待してますよ？」

「まあね。確かに主旨を考えればそれが一番なのは分かるし、そうとなれば僕がやるしかないのも分かるけど……」

につこり微笑む葉月をルームミラー越しに眺めた朔海は、小さくため息をついた。

「でも、そういう事は昨日のうちに言って欲しかったな。言ってくれば、昨日のうちに色々取りに行つて来たのに。……仕方ないね、宿に着いたらすぐに僕は一度、家へ戻つて必要なあれこれ取つて来るよ」

朔海がごく普通に口にした「家」とう単語に咲月がピクリと反応した。興味をそそられたらしい事を雄弁に語る瞳で、朔海をそろそろと見上げる。

視線に気付いて朔海が瞳を覗き込むと、彼女は頬が僅かに赤らめ、迷うように視線を惑わせた。

その仕草が可愛くて、つい表情筋が必要以上に緩み、思わずくすりと笑みが漏れる。朔海の苦笑に気付いた咲月は大いに慌てて口を開

いたが、その口から出るだろう言葉を察した朔海は、それを制し、「いいよ、謝ることなんかない。聞きたい事があつたら、いつでも言ってくれたらいい」

彼女が口にしよつとした謝罪の言葉を封じ、彼女が飲み込もうとした朔海しづんに対する問いを促した。

「僕たちが吸血鬼なんだっていうトツプシークレットはもうバレちゃつたし。……僕の情けない現状も知られちゃってるし」

ははは、と少しやけっぱちに笑ってみせ、

「もう、知られて困る様な事なんかそうそうないんだから。遠慮なんかしないで、何でも聞いてくれたらいいよ」

同意を求めるように、ルームミラー越しに葉月を見る。

「そうですね。むしろ、どんどん聞いて、知ってもらわなければなりません。私達きょうけつき一族のあれこれはもちろん、何よりも朔海様の事を」

運転中の彼は、視線を前方の道路に固定したまま答えた。

「知りたい事、分からない事。どんな些細な事でも構いません。

私にでも、紅姫や青彦にでもいい。聞いて、知ってください。貴女の為にも、朔海様の為にも」

不必要いじふたと、邪魔にされるばかりの中で、余計な詮索は大罪だった。赤の他人に知られたくない事があるのは当然の事だと、咲月自身よく分かつていたから。

彼らのその言葉で、自分が今、どういう立ち位置にいるのかが良く分かる。それが、素直に嬉しいと思えて。

「え……と、じゃあ……。前から気にはなつていたんですけど……、『家』つて……?」

おずおずと切り出してみる。

「初めて会つた日、『こつちのお金を持ってない』つて聞いて。あの時は、外国の人なのかとも思つたんですけど……、やっぱり、魔界にお城とかがあるんですか?」

「まあ、魔界にある王城に私室は一応あるんだけどね。今、僕が

実際に住んでいる自宅は、魔界じゃなくて『次元の狭間』にあるんだよ」

「次元の、狭間……？」

「うん。この世には大きく分けて『世界』が三つ存在しているね。一つはここ、『人間界』。君達が普通に暮らしているこの世界だ。

もう一つは僕が生まれた世界……『魔界』。そして、最後の一つが『天界』。魔界が悪魔や魔物の棲家なら、天界は神や精霊の住まう世界。そして、その三つの世界のどれでもなく、またどの世界でもあるのが、『次元の狭間』という場所なんだ」

「どれでもあつて、どれでもない……？」

「うーんと、言葉で説明するのは難しいんだけど……」

朔海は頭をかきながら、ゆっくり言葉を選んで、考え考え話し出した。

「三つの世界は、ある意味全く別の世界で、それぞれ違う次元に存在している。だから、普通はそれぞれの世界を行き来するどころか、見る事も触れる事もできない。だけど、それぞれの世界は互いに干渉しあつて存在している。例えば、天界と人間界の境には、それぞれの世界が干渉しあつて存在している“空間”が存在する。いわゆる“天国”つてやつだ。同じように、人間界と魔界との境には“地獄”がある。そして、天界と魔界の境には煉獄が。で、三つの世界の境にあるのが、“世界樹”^{ユゲドラル}を中心とした空間で、それを『次元の狭間』つて呼んでる」

説明に苦心する朔海をフォローするように、葉月が言葉を継ぐ。

「そうですね……もうすこし分かりやすく説明すると……色の三原色つてあるでしょう？ 普通の三原色なら赤と青と黄。光の三原色なら赤と緑と青の三つの色の円が微妙に重なった図を、見た事がありますか？」

……たしか、中学の美術の時間だか、理科の授業だかやったような気がする。葉月の問いに、咲月が頷いたのをミラー越しに見た葉月は説明を続けた。

「例えばあれの、青の部分を天界、赤の部分を魔界、黄色の部分を人間界とすると、青と黄色が重なって緑色になっている場所が天国、黄色と赤が重なってオレンジ色になっている場所が地獄、青と赤が重なって紫色になった場所が煉獄で、全ての色が重なって黒くなっている場所が『次元の狭間』なんです」

「その、次元の狭間にお家が……？」

「ああ。ほら、僕って身内から疎まれてるからさ。針の筵ゆしみたいな魔界の王城に居つく気にはどうしてもなれなくてね。一時、葉月と人間界で暮らしていた時期もあったけど……、僕の血は、葉月のそれより濃い分、人間界に定住するにはあまり向かなくて」

それで、次元の狭間に自宅を構えたのだと、朔海は苦笑を浮かべながら言った。

「普通は行き来できない”世界を、どうやって行き来しているんですか？」

「えーと……、これも言葉で説明するのは、すごく難しいんだけど……」

言いながら、朔海は助けを求めるようにミラーの中の葉月に視線をやる。

「まあ、私達からすれば、自転車に乗れない人からどうやって自転車に乗ってるの、と聞かれたに等しい問いですから。もしもそう問われれば、自転車にまたがってペダルを漕いで、ハンドルを操って乗っている、としか答えられないでしょう？ でも、自転車に乗れない人だってそんな事は分かっている訳です。知りたいのは、どうやってバランスを取っているのか、という事。そしてそれは言葉で説明するのは不可能に等しい。感覚で覚える他ないものですからね」

「でも、あえて言うなら“鍵”が必要だって事……かな？」

「鍵、ですか？」

「そう。でも……そうだな、鍵というよりパスポートとかライセンスみたいなものかもしれない。どっちにしろ、現物として存在す

るものじゃない。たぶん、血とか魂に刻み込まれているものなんだろうけど、実際に原理が説明されてるわけじゃないから、本当のところは分からない。でも、その“鍵”を持つものには、世界と世界が干渉しあって繋がってる箇所を見つけて、そこから違う世界に行く事が出来る。……まあ、見つけて、とは言っても実際目に見える訳じゃなくて、もっとこう……感覚的に感じるものだから」

「そうですね。今の咲月君では……おそらく実際に理解する事は出来ないでしょう」

……今の、という事は……一年後、その選択をしてもしも吸血鬼になったとしたら、自分にもその“感覚”が理解できるのだろうか？

「鍵を持っていなくても、鍵を持つ者と共に行けば行き来は可能なんだけど」

「異界で、人の世の理は通用しません。何の力も持たない者にはただ危険なだけの場所ですからね」

「うん。だから……もしも君が僕との未来を選んでくれたなら……その時は、真っ先に招待するよ。約束する」

そう言って、朔海は微笑んだ。

コテージにて

いったい、いつの間に眠りこんでいたのだろう。揺り起こされた咲月は車内灯のオレンジがかつた光がぼんやりと暗い車内を照らしているのを見て驚いた。

カーステレオの液晶に表示された時計の P・M・7:30 の文字にもう一度驚きながらも、促されるまま車を降りる。

夜風が、すこし肌寒い。さわさわと、木々の葉が風に擦れる音が四方から聞こえ、ちよつと視線を上向けてみれば闇に星が点々と散っている。

宿、というよりコテージと言う方がしっくりくる、こじんまりとした家。車は、たった一台分の駐車スペースに止められ、葉月はトランクから荷物を下ろしている真つ最中で、旅行用の大きなバツクを車の脇に並べていく。

咲月を起こし、車を降りるのに手を貸した朔海は、その手に番号の書かれたプレートのついたキーホルダーをつけた鍵を握らせた。

見れば、プレートに書かれたのと同じ番号が、郵便受けと玄関に下げられたプレートにも刻まれている。

「荷物は僕たちが運ぶから。鍵、開けてもらっていい？」

咲月は頷き、パタパタと玄関に駆け寄り鍵を開け、扉を全開の状態に固定しながら、周囲の様子を窺ってみた。

建売の新興住宅街の様に、似通つたデザインの建物が整然と並ぶ家の前に立つ郵便受けには同じように番号がふられている。

見る限り、ざつと10軒程あるようだが、灯りが漏れているのは3軒程だ。

両手に二つも三つも大きなバツグを持って玄関をくぐる葉月と朔海。葉月は、すぐに靴を脱いであがり、一度置いた荷物を部屋へ運ぼうと再び持ちあげたが、朔海は荷物を置くとすぐに踵を返し、外に出た。

「じゃあ、ちょっと行って来るよ。まあ、必要なものを取ってくるだけだから。夕飯はいつもより少し遅くなるけど、すぐ戻って来るから。葉月、キッチン周りは触らないでよ?」

咲月に声をかけ、最後に少し振り返って葉月に声をかけると、普通にアプローチを道路の方へと歩いていく。

その背を何とはなしに見送るように視線を送っていた咲月の目の前で、不意にパサリと彼の背に現れた蝙蝠コウモリの様な一對の翼。

びっくりして思わず目を丸くした直後、その羽を羽ばたかせふわりと宙へ浮き、そのままどんどん高度を上げていく。

「と……飛べるんだ……」

黒っぽい服に身を包む朔海の姿は、暗い夜空の闇に紛れてすぐに見えなくなったが、彼の背を追っていた視線は釘づけのままポツリと小さな眩きが漏れる。

「まあ、そうだな。取りあえず坊ちゃんの一族はだいたい飛べたと思うが」

不意に、足元から声が出て、咲月は飛び上がった。

「吸血鬼なら誰でも飛べるって訳でもないんだよな、あれ。一応“龍”の血を持ってないと出来ない芸当だ。ま、たまーにそれ以外でも空を飛べる種族の血を得て飛べる奴もいたりするけどさ」

「い、居たんですか!?!」

確かに車の中には居なかったはずの青彦が、いつの間にか咲月の足元で尻尾を楽しそうにくねらせながらこちらを見上げている。

「おう。狭い車の中じゃ邪魔になるだろうと思って表に出ずにはたけど……」

意味ありげにニヤリと笑いながらもつたいぶるように言葉を切り、悪戯っぽい目で葉月をちらりと一瞬見やっしてから、

「俺達、永遠に離れられない運命なんだよ」

ぴよいつ、と咲月の肩に飛び乗った彼は、耳元で囁いた。

普段、猫の姿で軽薄を装う彼だが、こうして耳元で声だけ聞くと実は美声なのだと気づかされる、低く艶っぽい声にのせて、間近か

ら吹き込まれた台詞に咲月は固まった。

「……………なぐんてな」

くすくすと笑いながら逃げるように肩から飛び降り、全力でアプローチを駆けていく黒猫を、咲月は茫然と見送る。

その、視界の右端をきらりと光る金属質な銀色の何かが一瞬うつり込んだ気がした。直後、がすつと鈍い音がして、青彦の首元ギリギリを掠めるようにアプローチの石畳にメスが食い込んだ。

「……………！！！」

その場に凍りついたようにピタリと動きを止めた青彦が、そろそろと首だけ回してこちらを振り返る。

つられるように咲月も彼と同じように自分の背後を　葉月の顔を見上げた。彼は、隙のない完璧な　むしろ完璧すぎる程の

満面の笑顔をこちらに向けていた。

「咲月君、先程私が申し上げた事、一部訂正させて下さい。尋ねたいことがあれば、私なり朔海様なり紅姫に何でも聞いて下さって構いません。ですが……………正しい情報をきちんと伝える気が無いどころか、混乱を招くだけのいらぬ情報を吹き込むような輩の言葉に耳を貸してはいけませんよ」

「おいおい、俺は何もガセネタ吹き込んだ訳じゃな　って、うぎやっ！」

言い訳をするように反論しかけた青彦の台詞に重なって、再びがすつという音が咲月の耳に入った直後、青彦が悲鳴を上げた。

「……………咲月君、すみませんが部屋の窓を一通り開けて来て頂けますか？　軽く風を通して空気を入れ替えましょう」

完璧な笑顔を保ったまま、葉月は咲月に言った。

にこにここと微笑んでいるはずなのに、妙な迫力がある。咲月は無言のまま頷き、靴を脱いで、備え付けられたスリッパに履き替えそそくさと一番近くのドアを押し開けた。

ドアを開けると、そこはダイニングキッチンだった。

医院を併設している葉月の自宅の広々としたそれに比べれば幾分

か狭いけれど、南側の壁一面、大きな窓がはめ込まれ、実際より広々とした印象を受ける。

咲月は、窓の鍵を開け、網戸がきちんと閉まっているのを確認して窓を半分程開ける。そして今入って来たドアの隣の引き戸から次の部屋へと足を踏み入れる。

六畳の和室。目の前の、窓のある壁以外の残りの壁面三面全てに、襖仕様の引き戸があり、そのうち右側の壁の襖の上は欄間になっている。

欄間のある襖を開けるともう一部屋、六畳の和室があり、押し入れの中には四組の布団が収まっていた。

窓を開け、引き戸も全て開ける。

最後 廊下に面した引き戸を開けると、ちょうど真正面に玄関が見えた。

玄関先の荷物は変わらずそこにあるのに、葉月の姿も青彦の姿もない。どこへ行ったのだろうと一人首を傾げつつも、先程くぐったダイニングの扉の向かいの扉を開けた。

洗面台が設置された洗面所兼脱衣所。窓の脇のハンドルを回して縦に何枚も並ぶすりガラスを四十五度程開け、続いて浴室の扉を開けるとふわりとヒノキの香りが薫る。

埋め込み式の広々とした湯船。そのすぐ前面一面の窓を開け放てば露天風呂仕様にもなるらしい豪華な造り。

さすが、温泉が売りなだけはある という事なのだろうか。足を思い切り伸ばして入っても、まだ余裕がありそうな湯船に張られたお湯からももうもつと上がる湯気。

ほんの少しだけ開けた窓から湯気を外へ逃がし、浴室の湿気が部屋の方へ回らないよう、浴室の扉をしっかりと閉めて、咲月はもう一度玄関に戻った。

だが、やはり葉月と青彦の姿が無い。代わりにちよこんとその場に座っていたのは青彦同様、車の中には居なかったはずの紅姫で。

「あの……、葉月さんと青彦……さんは……」

「……ごめんなさいね、今ちょっと取り込み中だから。朔海様がお戻りになるまで先にお風呂に入ってゆっくりするといいわ。長旅で疲れたでしょう?」

わりとよくある事で、いつもの事だから心配はいらないと、紅姫は言った。

「貴女の寝室はあの奥の和室だそうよ。重たい荷物は後で葉月が運ぶから。取りあえず自分の荷物だけ部屋に運んでおけばいいわ」
咲月は玄関先に並べられた大荷物の中からスポーツ用品メーカーのロゴが大きくプリントされたバックの肩ひもを手に取り、そのまま担ぎあげた。

たった一週間分の荷物が、あの日咲月が葉月の自宅に持ち込んだ荷物より確実に重い。肩にかかる負荷に、ほんの僅かふらりとよるめき、すぐ側の壁に手をついた。

壁についた手で身体を支えながら、もう一度しっかりと荷物を肩に抱えなおして、ほんの数歩の距離分、目の前の和室を突っ切る。
開け放った窓から窓へと、流れていく風に前髪を軽く弄ばれながら、かばんのファスナーを開け放ち、昨夜、急いで詰めた着替えの中から、一組抜き出し、タオルや洗面用具を小脇に抱えてもう一度目の前の和室を突っ切る。

風呂場の戸口の前で待っていた紅姫は、柔らかな微笑みをこちらへ向ける。

「一緒に入ってもいいかしら? ……聞きたい事、あるんでしょう?」

> i 3 5 7 2 5 — 1 8 3 <

葉月と猫たちのカンケイ。

ちやぷん、と、一人で入るには贅沢過ぎる位広々とした湯船に首元まで身体を沈める。開けた窓から入る冷風が、ポカポカと暖かな身体と対称的に頭をシャッキリ冷やしてくれ、長風呂をしてもものぼせたりする心配はあまりなさそうだ。

紅姫は、たとえば、風呂場に備え付けてあった、銭湯や温泉施設でよく見かける木製の手桶に汲んだ湯の中で寛いでいる。

姿こそ猫だが、中身は元は人間。毛づくろいの為に身体を舐め回すような事はせず、湯に浸した手拭いを猫足で器用に操り、石鹸を擦りつけて泡立てたそれで、全身を拭う。

「ふふ、私もこんな贅沢は久しぶり。男ばかりで居るところいうささやかな女の楽しみとはどうしても疎遠になりがちになっちゃって。葉月の事は大好きだけど……、これに関してを言えば……、やっぱりちょっといただけなのよね……。ホント、貴女には感謝しなくちゃ」

泡で包まれた身体を手桶の湯で流し、濁いた手拭いで顔を拭く。
新しい湯に換えた手桶の湯船につきり、

「んー、気持ちいい……」
思わずといった風に呟き、紅色の瞳を細める。そんな彼女の呟きに、咲月は心からの同意を込めて頷いた。

「ずっと座りっぱなしで疲れたでしょう？ お風呂からあがったらマッサージしてあげるわね」

湯船の縁に頭を預け、広い湯船の中で浮力に身体を任せて手足を伸ばし、存分に寛ぐ咲月に紅姫が言う。

「葉月せんもんかにはだいぶ劣るけど。……さすがにまだ、それはちょっとアレでしょう？」

咲月の身体に残る、多くの傷。同性で、今は猫の姿をしている紅姫ならともかく、当初の様子からすればだいぶ打ち解けて来ている

とはいえ、つい先日知り合ったばかりの異性にそれを晒す心情からは充分察せられる。

服の上からするにしても、彼女の場合異性に限らず人に触れられることに慣れていない分、それなりの覚悟を要するに違いない。……休養の為のマッサージなのに、それでは意味がない。

「……すみません」

「いいのいいの。それと、私に敬語はいらないわよ。言ったでしょう？ 私、元は農民の娘……大した学も無い田舎の一般庶民だったんだもの。正直、敬語とか苦手なの」

「え……、と。じゃあ、紅姫……。さつき車の中には居なかったよね？ あの、青彦さんの言ってた事とかは……その……」

紅姫の要望に応え、言葉づかいを改め問いを投げかけた咲月だったが、先程の彼らの様子から、つい語尾を濁し目を泳がせた。

「そうね……、言い方に大いに問題がありすぎだけど……、ある意味あれは本当よ。私たち2人は葉月の傍を離れることは出来ないから」

紅姫は、苦笑を浮かべながら答えた。

「前に、使い魔について説明したでしょう？ でも、私たち2人はその中でも特殊な存在だって言ったわね。……記憶や自我がある分、かつての“双葉”としての意識を強く持っているけれど……本当の今の私は……葉月の一部であり、葉月の中にある竜の化身と言うべき存在なの」

ジツと、その綺麗な赤い宝石みたいな瞳を咲月に向け、

「ほら、私の瞳……赤いでしょ？ 青彦の青い瞳も……普通ないわよね、こんな色」

紅姫は、猫足で自分の瞳を指して言う。

「葉月と、朔海様の一族の持つ“龍王の血”……その龍の瞳の色は……赤」

そして、もう一つ。

「葉月の持つ、もう一つの血に宿る竜の瞳の色が……」

青彦が持つそれと同じ　　サファイアブルーの瞳。

「普通、吸血鬼が使い魔を得るときには当然、血を使うわけ。ただの使いっ走りの人形ひとがたなら、ちよつと血を採ってそれに念を込めるだけでそれは叶うし、他の生き物を従属させようと思つたなら、相手に自分の血を飲ませればいい。……彼らにとつて、血は魔力ちからそのものだから」

血を吸う際に入る唾液くつ程度の魔力では、せいぜい簡単な記憶操作程度の事しか叶わないが。

「けれど私は、人間としての最期を迎えた時、彼に頼んだの……」

悪魔の力を取り込み、吸血鬼となつた彼らの種族は血を吸つた相手の力を得ることができ。　　が、ただの人間の血を吸つたところで、彼らにとつてはただの食事以上の意味はない。……ない、はずだった。

「あの時は……私も彼も傷を負つていて……。私のは、致命傷で。自分でももう助からないつて分かつていたから。だから、せめて……彼の傷を癒したくて……せめて自分の一部だけでも、彼と共にありたくて……。だから、頼んだの。私の血を吸つて、つて」

それを彼に伝えた時、彼は猛烈に怒つた。
例え既に助からないと分かつている身体だとしても……最愛の恋人の命にこの自らの牙で決定的な止めを刺せと……それは、そういうことだったからだ。

でも、彼は最後にはその我儘を黙つて聞き入れてくれた。身体中全ての　　本当に、最後の一滴まで残さず全部の血を吸い尽くして
「私の血の全ては彼の一部分として今も彼と共にある……」

吸血鬼が、本来、血と共に得ていたのは相手の遺伝情報だ。しかし魔物の類に遺伝情報そんなもののがあるはずもない。だから、悪魔から借り受けた能力で血と共にその魂を得る。……それは人間相手でも然り。

「そう、その昔葉月つて名前だった俺の魂も、今や葉月アイツの血肉の一部でね。……本当なら、こんな風に表に出て来る事なんか出来ない

はずだったんだ。アイツが、龍王の血の継承者でなかったなら……な」

突然、窓の外から声がして。

次の瞬間、咲月の視界の横を、今の今まで紅姫が湯船代わりに使用していたはずの手桶が物凄い勢いで飛んで行った。

「ぎゃっ」

という悲鳴とパコーンという小気味の良い音がほぼ同時に咲月の耳に届いた。

狭い湯船の縁をものすごいスピードで駆け抜けた紅姫は、ずぶ濡れのままの身体中の毛を逆立てて、「シャーッ」と威嚇する。

「…………ごめんなさい、この不届き者は私が責任持って始末をつけるから。先にあがって休んでいてくれる？」

そう言っただちらを振り向いた彼女の顔は 猫の顔のはずなのに……何故だろう、先程垣間見た葉月の笑みといやに似通っていて。

咲月は無言のまま頷き、そそくさとその場を後にせざるを得なかった。

魔女の店（1）

カラン、と、今開けた扉の戸板の向こう側でドアベルの楽しげな音がそう広くもない店内に響いた。

「いらつしやいませ」

ベルの音と重なるように声がする。高らかに響くベルの音とは対照的に、少し低めの落ち着いた声。

「……おや、珍しいお客様だね」

ガタンと音を立てて扉を閉めると、もう一度カランとドアベルが鳴った。

「……前に来てからまだ半月も経ってないと思うんだけど」

「いつも、2日と間を開けずに来てたんだ。それが週が2廻りして3週目に入るまで音沙汰無しだったんだから。どつか他所へ浮気しに行ったんじゃないかと疑りたくなるのも無理は無かるう？」

艶やかな長い黒髪に、真っ黒な瞳。黒っぽい赤色の口紅。首に巻かれたチョーカーから黒いシックなデザインのワンピースに、黒い革靴。

年季の入ったカウンターに肘を置いて頬杖をつきながら、クスリと笑う。その肘のすぐ脇で、彼女に同調するようにクケケケ、と喉を鳴らして笑ったのは実に鮮やかな黄緑色をした手のひらサイズのアマガエル。

「ハーブは気難しい。よそ見なんかしてたら、あつという間にへそを曲げられるぞ」

言いながら、ジーンと心の中まで見透かすような瞳でこちらを見上げてくる。

「行かないよ、他所の店なんか。ここらで一番腕が良いのは分かってるんだ。全く、人が悪いのも相変わらずだね。……全部知っているくせに“浮気”だなんて人聞きの悪いの事を」

カウンターテーブルの上に置かれた、綺麗に磨かれた水晶玉に注

い視線を向けながら、朔海は口の端を引きつらせた。

「ホント、たった2週間とちよつと見なかつた間に随分と良い表情^オするようになったじゃないか」

カウンターの背後の壁いっぱい設置された棚に所狭しと並ぶ大量のビンの中からいくつか選んでカウンターの上に並べながら、彼女は楽しそうな目をこちらに向け、悪戯っぽくクスリと魅惑的な笑みを浮かべる。

「……そうさね、お求めはお嬢ちゃん用のヤツだろう？ ふむ。

それならこれか。肝^{クバ}の臭みをとるならセージかキャラウェイ当たりが妥当だね。貝や海藻に使うならフェネルか……サフラン。滋養強壮にガリックも要るかい？」

言いながら、ビンの蓋を開け、中の乾燥させた葉や、スパイスを小さな小瓶に取り分けていく。

「ハーブティーにするなら……ローズマリー、レモングラス、ペパーミント、セージ、ネトル、ローズヒップかね」

大瓶から移した葉を、慎重に秤にかけながら合わせていく。

「……入浴剤、は……止めた方が良くもね。下手に混ぜると折角の温泉効果が逆に毒になる可能性がある。ポプリはどうだい？」

「そうだね、できればあんまり大げさじゃないのがいいんだけど」

「ちよつど、可愛い布地が入ったんだよ」

カウンター下の収納棚の扉を開け、端切れを何枚か取り出し、朔海の前に並べて見せた。

「どうするね？ 首から下げれるように紐を通す？ それともチャームにする？」

「じゃあ、このベージュのチェック柄のこっちの金の鎖で首飾りにしよう」

目の前に並べられた生地の1枚を指差した彼の右手首に目を留め、

「……それ」

彼女らしくない、茫然とした様子で呟いた魔女に朔海は怪訝な目を向けた。

「彼女に貰ったんだよ。何だ、見てたんじゃないのか？」

「……見てたよ、水晶玉越しにはね」

緊張に張りつめた声で言いながら、それまでのからかいの色を消し去ったいたく真剣な目で朔海を見上げた。

「あんた、あのお嬢ちゃんの血を、直接ではないにしろ……飲んでんだらう？ どうだった」

たった今、水晶玉で覗き見をしていた事を自ら認めたのだ。彼女がその味やら効能やら、冷やかしを含めた世間話を求めている訳ではない事くらいはすぐ分かった。

「彼女は……種族としては、人間だ。それは間違いない」

血を吸った相手の遺伝子や魂を移し取る能力を持つ吸血鬼。

つまり、血を吸えば相手の種族や能力を容易に知り得ることができ
るのだが。

「でも……彼女の持つ能力までは……」

遺伝子を得るだけであれば、ほんの僅かな血があれば充分事足り
る。だが。

「とりあえず、僕の知るとの血とも違っってことしか分からない
よ」

人を襲い、血を奪う事を忌避し、誰のものとも知れないパック入
りの血液を飲むようになってもう随分経つ。

あの便利な物が開発されるまでは、朔海も必要に応じ仕方なしに
狩りをしていた時期もあったが……

「純粋な人間で、特殊な力を持っているなんてのはかなり珍しい
からね。……吸血鬼にとつちや滅多に口にできない珍味ってやつさ。
当然、僕なんか相伴に預かれる訳も無いし、預かるうとも思わな
かったんだけど」

まだ、舌に残る甘い魅惑的な血の味に酔いそうになりながら、朔
海はため息をついた。

「青彦や紅姫が視えたんだ。間違いなく、何かの力はあるはずだ
と思うんだけど」

難しい顔をしながら朔海の手首の腕輪を眺めていた彼女は、おもむろに、引き出しから裁縫用具を取り出すと、針刺しから縫い針を一本抜きとり、プツリと左の人差し指を突き刺した。

穿たれた小さな傷口からプクツと赤い小さな玉が浮かぶ。

それを朔海の前に差し出し、

「ちよつと舐めてみて」

戸惑う朔海に詰め寄るようにして指をつき出した。

吸血鬼である朔海の嗅覚を、甘美な香りが刺激する。 たった今、咲月の血の味を回想してしまったばかりの所にそんなものを鼻先に突きつけられれば、意思とは関係なく本能的にその手首を捕まえて口元に運ぼうと手が動く。

「……………」

その指を口に含む寸前で、牙で唇を噛みしめながら息を止める。

2歩、3歩と後ずさり、そつと小さく息を吐き出し、慎重に空気を肺へ送り込み、沸いた衝動を鎮める。

だが、僅かに赤みを帯びた瞳は彼女の指を滴る赤い滴に据えられたままだ。

「……………何か、心当たりが？」

魔女の店（2）

「.....」
難しい顔をしたまま押し黙る魔女に、朔海はもう一度小さく息を吐き出し、彼女の掌をとった。

そのまま、そっと指の腹でその血を拭くと、彼女の血で赤く染まった己の指を自らの口に含み、舌を這わせる。

「似て.....る.....けど。でも、違う」

ソムリエが、ワインのテイスティングをするように、舌の上で血の味を真剣に吟味しながら、朔海は呟いた。

「すごく、似た味がする。純粋な人間の血の味.....でも、能力の味もする。その、能力の味が.....似ているんだ。いや、ベースはもしかしたら同じかもしれない。でも、違うんだ。何か違う味が混じっていた」

朔海の答えを聞いた魔女は、不意に力が抜けたようにカウンター椅子に座りこんだ。

「.....そうか」

「やっぱり、何か心当たりが？」

朔海はもう一度尋ねてみた。

「心当たり、って程でもないがね。.....かなり、昔の話になるがうちの一族の娘が他所へ攫われちまった事があったんだ」

彼女は目を伏せ、ポツリとこぼした。

「.....それ。あんたが着けてるブレスレットのムーンストーンだけど」

言われて、朔海も目を落とした。

「白露どの ああ、今は葉月って言ったっけか？ 驚いていただろう、上質の石がそこいらの店で安価で売られていたと聞いて」

「.....ああ、まあ」

「そうだよ。元はそんな上等な物じゃなかったはずだ。それこそ

ちよつと綺麗なだけの、ガラクタ同然のくず石だったんだろうさ」

「くず石？ 馬鹿な……だって、石だぞ？」

彼女の言いようでは、まるで石の様子が変化した様ではないか。

「我らの一族の能力がどんなものか。……知っているだろうか？」

「自然に宿る精霊や神々や妖を視る目を持ち、彼らと会話を交わし……時に彼らの力を借り、時に彼らを操り使役し、その力を行使する……」

彼女の店で扱うハーブやスパイスの効能が、他所の店より高い理由がそこにある。

「その石。……精霊の種が宿っている」

古い道具や長く生きた生物に魂が宿り、精霊や妖となったものをつくもがみ九十九神という。例えば、魔法のランプに宿る魔神や、狐狸妖怪の類がそれに当たる。

その名の通り、本来なら100に1つ足りない位の年月、大事に扱いつづけた物にしか精霊など宿らない。

「でも、彼女はほんの数ヶ月前に買ったものだ……」

「そうだよ。その数カ月傍に置いただけで、ただのくず石に精霊を寄り憑かせられるだけの力をあの娘は持っているんだよ。本人は無自覚だけどね。きちんと基礎を学んで正しい力の使い方覚えたら……私の力なんか子どもそのままごと遊びにしか見えなくなるだろうね」

通り中、すべて魔女の店が立ち並ぶ、その名も魔女通りで一番の腕利きと評判の魔女が、苦笑交じりに呟いた。

「攫われた娘は、うちの一族でも100年に一度現れるかどうかっていう寵児だね」

「その彼女が、あの子の母親だと？」

「いや、それだとあまりに年齢が合わなさすぎる。言っただろう、かなり昔の話だと。うちの婆さんが、親から聞かされた話だっけって聞かせてくれた話なんだ。……だが、彼女の血を引く娘である事は間違いなからう」

無理やり攫われた先で産まされたのだろう子どもの、その子孫。

「“違う” 味の能力を持つ一族が……」

「あのお嬢ちゃんの片親であり、かつての誘拐犯の一味って事なんだろうね」

「当時の、犯人は」

「……捕まらなかった」

「手がかりも？」

「あつたら、我ら一族がとつくにとつ捕まえているよ」

「……そうか」

だが、あの状況下に捨て置かれていた事実と考え合わせれば、彼女にとって救いとなるような類の話では無いのは明らかだ。

血で汚れた針を捨て、新しい縫い針でちくちくと布地を縫い合わせながら、

「今度、うちに連れておいでよ。全部、終わったらさ。久々に、新しく弟子をとるのも悪くない」

暗く落ち込んだ朔海に魔女は言った。

「あの娘は間違いなく、あんたの力になるはずだ」

「僕の、力……に……？」

単に、魔力を増幅させる為の糧だという意味では無い言い様に顔を上げた朔海に、魔女は意味ありげに微笑んだ。

「ほら、できたよ。持ってお行き」

商品をまとめて手渡し、

「百聞は一見に如かず、つてね。意味は自分で確かめな」

朔海の背を押して店から押し出す。

「すぐ戻って出て来たんだろ？ ほら急いだ急いだ」

「……また来る」

「そうさね。次は媚薬でも用意しておこうか？」

「……っ！ い、要る訳無いだろ、そんな物……！」

「ああ、その前に惚れ薬のが先か？」

「だからっ、そんな物要らないって……！」

顔を真っ赤にしてムキになる朔海を、魔女は楽しげに笑いながら、「分かつているよ。……頑張りな。うまくいったら、通りで一番の腕利き魔女フェアティマー様が腕によりをかけて一等等上な指輪（じゆん）を拵（じゆ）えてやるよ」

バシバシと背中を容赦なく叩いた。

背中（うで）の痛みと、決まりの悪さに顔をしかめながら、朔海は翼を広げる。

「その腕輪、大事にしなよ」

「……言われなくなつたつてそうするさ。当たり前だろ、彼女から貰った大事な物なんだから」

ゴウ、と、朔海の周囲をつむじ風が覆い、次の瞬間には彼の姿が通りから消え失せる。

「まあ、……だろうけどね。あんたなら」

誰もいなくなつた通りに向けて、魔女が小さく呟いた。

「あんたのその想いこそが、これからのあんた達を守る力になるんだ。粗末に扱（あつか）うんじゃないよ」

ディナータイム

「……あれ、他のみんなは？」

手持ち無沙汰になり、取りあえずテレビをつけて、大して面白くも無いバラエティ番組を何となく眺めながら居間のソファで一人膝を抱えていた咲月に声をかけたのは、手に幾つも荷物をぶら下げた朔海だった。

「えつと、それが……その……青彦さんの始末をつけると言ったまま……戻って来なくて……姿も見えないんです」

咲月は彼を振り返るとホツとしたように微笑み、それから困ったように現状を告げた。

「ああ……彼、また何かやらかしたんだ？ まあ、よくある事だから……それは気にしなくてもいいんだけど」

と、朔海は先程紅姫に告げられたのと同じ事を言った。

「それにしても、こんな時間に慣れない場所で一人で放って置くなんて……全くもう、しょうがないなあ」

今回、彼がやらかした事柄をぼかして告げられた朔海は大して気にすることも無く、キッチンに足を向けた。

「お腹空いたでしょ？ すぐ夕飯にするから。よければ先に風呂に……」

「あの、お風呂はもうお先に紅姫と入らせてもらったので。えつと、手伝います」

咲月はテレビを消し、朔海の後についてキッチンに入る。

下げていた紙袋から瓶詰めにしたハーブやスパイスを取り出し棚に並べ、肩から下げたクーラーボックスから取り出した生鮮食品を冷蔵庫にしまっていた朔海は首だけ捻ってこちらを振り向いた。

「え、いいの？ 向こうでゆっくりしててもいいんだよ？」

「いえ、特にやることも無いし、暇を持て余していた所なので」

「そう？ じゃあ、これ……このあさりの砂抜きと、あとそっちの

袋に入ってるスパゲッティを茹でるの、頼んでもいい？」

クーラーボックスから透明なビニール袋にぞんざいに詰め込まれたあさりを取り出し、咲月に差し出した。

受け取った袋はずっしり重く、中を見るとかなり大ぶりの貝が随分たくさん入っている。

咲月はキッチンの下収納からボウルを見つけて出すと、さじ一杯の塩を2杯、3杯と入れ、勢いよく水を入れながらかき回して塩水を作る。袋の中のあさは別のボウルにあけ、手際良く水洗いをした後で、できた塩水に漬けてアルミホイルを被せた。

その横で、朔海は一匹丸々の鮭を手際よく捌いていく。

ダン、と、思い切りよく頭を落とし、腹に包丁を入れて内臓をかき出す。背骨と上身の境に包丁を入れると、すいすい身と骨とを分けていく。

あつという間に三枚に下ろされたその切り口は本職の職人さながらで、捌かれた身は、脂が乗っているのが一目で分かるくらいにかっている。

鍋一杯に湯を沸かし、塩をふり入れ、パスタをザツとさばいて湯に入れながら、咲月の目はちらちらと彼の手元に向けられる。

そうして目を奪われている間にも、魚は切り身や刺身用の柵などに切り分けられていく。

「あ、そっちの引き出しにキッチンタイマーが入っているから。後で炒めるから、ゆで時間、ちよつと短め……6分位かな……で、よろしく頼むね」

切り分けた切り身を、タッパーやジップロック付きのビニール袋に分けて入れ、それぞれに味噌や醤油、ハーブ入りのオリーブオイルに漬け込み、冷蔵庫にしまう。

まな板の上に残されたのは、刺身用の柵。

それにも手際よく包丁を入れ、少し薄めの刺身にしていく。続いて、赤や黄色の鮮やかなパプリカと玉ねぎを取り出し、トントンとリズムよくいい音を立てながら刻み、それらをハーブと薄切りにし

たレモン、オリーブオイルで和える。

あつという間に完成した彩り鮮やかなマリネを皿に盛り分け、い
くらをトッピングする。

彼の手は休むことなく、いつの間にか水に浸して戻していたらし
いワカメのボウルに伸びた。ギョツと絞ってワカメの水気を切り、
ちよūdよいサイズにざくざく切り分け、別のボウルに入れる。

朔海は、片手なべを上戸棚から取り出すと、咲月の隣へと移動
し、スパゲッティを茹でるのに使っているコンロの隣に鍋を置き、
水を入れて火をつけた。

コンソメベースのスープにワカメを入れ、ゴマをふり、2品目の
ワカメスープをテーブルに運ぶ。

冷蔵庫からイチゴを取り出し、ヘタを除いて水で洗い、大粒のそ
れを縦に四つ切りにし、それもテーブルに運び。

……スパゲッティが茹であがるたった数分間に、あつという間
に食卓の支度が整っていく。料理が上手いと、聞いてはいたが……
正直ここまでとは思っていなかった咲月はもう、感心するしかない。
これを見せられては、もう他で料理が得意だなどとは到底言えそう
になかった。

ピピピ、と、タイマーが成ったのに気付いた咲月がコンロの火を
止め、鍋をあけてパスタの水気を切ると、引き続き隣のコンロを使
い、砂抜きを終えたあさをガーリックやトウガラシと炒め合わせ
ていた朔海がそれをフライパンに加えてサツと火を通す。

出来あがったパスタにハーブをトッピングし、テーブルに並べる。
最後に、ホットレモネードをカップに注ぎ、食事の用意が完成す
る。テーブルの上に並ぶのは、色とりどりの料理たち。どれも食欲
をそそるハーブやスパイスの香りが立ち、実においしそうである。

それに。……料理をしている間、朔海はずっと楽しそうな顔を
していた。柔らかな笑みを浮かべる朔海は、咲月の心に小さな波紋を
描いていく。

「さてと。支度は上々だけど……ね」

腰に手をやりながら小さく息をつき、呟いた後、大きく息を吸い込み、

「おーい、葉月。夕飯、出来たぞ！」

家中に響くように大きな声で呼びかけた。

すると、背後でカラリと窓が開く音がした。振り返ると、

「おや、良い匂いがしますね。さすが朔海君。栄養計算表通り……どころかそれ以上に素晴らしい献立ですね」

葉月は窓の外で靴を脱ぎ、よいしょと靴下のままぺたぺたと食卓に寄って来た。

「ファティマの店に寄って来たんだよ。……それにしても、何してたんだよ。まあ、大方の事情は聞いたけど、さ」

朔海は半眼で尋ねる。

「うう……酷い目にあっただぜ……」

窓の敷居によじ登ろうとして失敗した青彦が、下半身を窓の外に残したまま上半身だけ床に投げ出しへばっているのを、涼しい顔をした紅姫が、

「完全なる自業自得でしょ」

と冷たく突き放す。

「……今度は何して2人を怒らせちゃった訳なの、青彦は？」

特に他意なく尋ねた朔海に、青彦は突然慌てだし、

「わーっ、坊ちゃん、今は聞いてくれるな、頼むから！」

大声を出す。

「あら、彼女から聞かなかったの？」

「わーっ、わーっ！」

だが紅姫は、容赦なく青彦の罪状を朔海に告げた。

青彦のもくろみ

「……へえ、覗き……ねえ……」

葉月らにからかわれてムキになる事はあれど、基本的に温厚な性格で、特に咲月の前で怒ることなどなかった朔海が、噴火寸前のマグマですら瞬間冷凍出来そうな程に冷たい瞳で青彦を半眼で睨みつけた。

「なんだよー、紳士ぶつて。坊ちゃんは人間の歳に換算すれば十代男子……一番盛りのついてる時期なんだぜ？ 女の風呂と着替えは覗くもの、一つ屋根の下の女の寝部屋には忍んで行くものってな位はがつつこうぜ」

ヒクリ、と、朔海の口の端が引きつった。

「おいまさか、普段の着替えまで覗いていたのか？ ……まさか、とは思うが寝ている彼女の部屋に押し入ったなんてことは」

押し殺すような低い声を震わせながら、朔海は問いただした。

「いやあ、ねえ……。俺、もうこの数百年ずっと、そっち方面に関しちや眼福以上の意味を持たせる事は不可能だからねえ」

「全く……面目次第ありません、主としてお恥ずかしい限りです。咲月君には本当に申し訳ない事をしまして……どうぞ、後で煮るなり焼くなり好きにしていただいて結構ですから」

ヘラリと笑った青彦の尻で揺れる尾を踏みたくて仕方がないという視線を彼に向けながら、葉月は咲月に頭を下げた。

だが、自分の貧弱な上に傷だらけの身体を見て不快に思うならともかく楽しいと思えるはずもないだろうし、あの時は身体を湯船に沈めていたのだから、そんなにはっちり見られた訳でもないだろう。しかも、直後に手桶をぶつけられて沈んでいたのだし……。

だいたい、いくら元は人間だと言われても、猫の姿しか見たことのない青彦相手では危機感も持ちにくい。

だから、咲月は曖昧な笑みで誤魔化そうとした……のに。

「にしても嬢ちゃん、実は着^き？せするタイプだったんだな。思っ
たより胸あるんじゃないか。……ちよつともつたいないよな、着る服
をもちつと選べばこう、もちよつと色気がでる気がするんだけどな
あ」

などと軽い調子で言われ、咲月は口に含んだスパゲッティを危う
く吹きそうになり、慌てて口を押さえた　　が、すんでで惨事を防
ぐことに成功した咲月の向かいで、朔海がゲホゲホと思いい切りむせ
返っていた。

それを見て、青彦がしてやったりといった様子で笑う。

少し涙目になりながらも、凄まじい殺気の籠った視線で青彦を睨
みつけながら、苦しげに咳き込む朔海に、

「お、もしかして想像しちゃった？　ふうん、やっぱり坊ちゃんも
一応男だったんだな、安心したよ」

ニヤニヤ笑いながら、更なるからかいの言葉を投げかける　　が、
咲月にとってはセクハラ発言以外の何物でもない。

フォークに巻き取った次の一口分のスパゲッティの塊がどんどん
膨らみ、既に一口では収まりきれない量になりつつある事に気付い
けないまま、咲月は必死で今の台詞を聞かなかった事にしようと奮闘
していた。

なにせ、今晚は襖一枚で仕切られただけの部屋で寝なければなら
ないのだ。しかも、襖の上は欄間になっている……と、いうことは、
遮られるのは視界だけで、それ以外は、僅かな物音さえ遮られる事
なくフリーパスでお互いに聞き取れてしまう。

今、下手に意識してしまえばきつと今晚は眠れなくなるだろう。

……何のためにここへ来たのかを考えれば、それは絶対に避けなけ
ればならない。

……聞かなかつたフリ、という事なら幸いにも慣れている
というか十八番である。

咲月は必死に無心を装い、フォークを口に入れた。

……もとい、入れようとした……が、ゴルフボール大にまで膨ら

んだスパゲッティの塊は、咲月の口には到底収まりきらなかった。

結果、口に含めたのはフォークの先つちよの方のスパゲッティだけで、その他の大半をポロポロ取り落とすという、見目も行儀も悪い事をする羽目になってしまい、咲月の乙女心はいたく傷ついた。

……ちなみに、料理の味は素晴らしかった。そこらのレストランのものよりずっと美味しい。あさりのダシの旨味と、スパイスやハーブの香りの割合が絶妙で、薄くもしょっぱすぎもしない程良い味。たかがボンゴレ、と侮る事の出来ないレベルの味だ。

料理の腕前に関しては、もはや咲月は白旗を上げて思い切り振りまわしてもまだ足りないレベルだと確信せざるを得ない。というか、よくテレビに出てくる料理の達人相手でも充分勝負できるのでないかとすら思う。

だが、葉月も朔海も料理に関しては食べ慣れていているという顔で、特にこれといった感想などは浮かばないらしい。

(そういえば、料理のできる男の人はポイントが高いつて言うなあ……)

等と、詮のない事をひたすら考え、頭の中から余計なものを追いだす。

スパゲッティだけでなく、サラダもスープもどれも美味しく、皿はあつという間に空になる。お腹が満ちれば眠くなってくるのは生き物としての性だろう。

僕が片付けるから、と言う朔海の言葉に甘え、自分の食器だけを流しに運んだ咲月は自室に充てられた和室にそそくさと引つ込み、押し入れの襖をあけた。

四組ある布団のうち二組を隣室に運んでから、自分の分の布団を敷き、すぐさま横になった。

「食べてすぐ横になるのは良くないって言うけど……やっぱり気持ちいい」

温泉につかり、ソファで寛ぎ、食事を楽しみ。時計はそろそろ十時を回るうとしている。ここに着いたのが七時過ぎだったから、も

う車を降りて三時間ほど経った計算になる。

充分休み、移動の疲れはだいぶ取れたと思っていたのだが、やはりこうして横になってみると、丸一日を費やした車での移動は思った以上に疲れるものだったらしいと知れる。

襖一枚隔てたダイニングキッチンから、何やら青彦の悲鳴が聞こえてくる気もするが、咲月はあえて聞かなくなったフリを決め込み、心地の良い布団の感触を存分に楽しみながら部屋の天井を眺めた。

大義名分はともかく、こんな風に旅行に出かけるなんて初めてなのだ。聞こえてくる喧騒も、咲月にとっては心地よいものだった。

……その内容が、自分に対する青彦のセクハラ発言を糾弾するものであるのは少タイタダケナイけれど。

一応、咲月とて年頃の少女だ。……彼の発言に、思う所がないとは言えない。だがその内容に、悪意……というか、本気で咲月を貶め辱めようという意図がなかった事はよく分かっていた。

全てにおいて淡々としがちな咲月をかき乱し、何かと臆病になりがちな朔海を焚きつけて、ふとするとまったりと落ち着きがちな場の空気を敢えて攪拌かくはんしている気がする。

『好きだった女が吸血鬼なんかを好きになったって知った時、そいつらの気持ち思いやる事もせず、ただ自分の正義だけを信じて、葉月こいつを殺そうとしたんだ』

青彦が言っていたセリフ。

『時間はある。考えるべき事はこれからゆっくり悩めばいい』
と、彼はそう言ってくれた。

あと、一年間。

長い様で、しかしうかうかしていればあっという間に過ぎ去ってしまう短い時間である。

さすがに礼を言う気にはなれないが。しかし、彼のおかげで再認識させられた部分は確かにあった。

彼が、一人の年頃の“男子”である、というある意味当たり前ながら、吸血鬼だの王子だの300歳だのといった特殊すぎるキーワ

ードの前に霞みがちだった事実。

気だるい眠気にゆるゆるとほどけていく思考の中、それは咲月の心に小石を投げ込み、一際大きな波紋を描いた。

神の縁

「……っ、な……、何で……」

縦に細長い紙切れをつまむ朔海の両の手の親指と人差し指とがぶるぶる震えている。

だがそれは、咲月からすればもうだいぶ前から繰り返し頭の中で自問し続けて来た台詞だ。何とも言えない気持ちを抱えながら、自分の分のそれに目を落とした。

「ケケケツ、今時神社のみくじで大凶当てるって……、坊ちゃんてばホント、そういうのハズさないよなあ」

ここは、草津温泉。言わずと知れた温泉地で、つまりは名のある観光地なのである。見て回れる様な所など、探せばいくらでもあるだろうに……。

ちらりと、先程大分苦労して登って来た急こう配の階段の前に立つ鳥居に書かれた「白根神社」の文字を見やる。

「ふむ。私は小吉ですね。……まあ、良くも悪くもなく、まあ無難な所……、む、勝負事『難あれど励めば勝つ』ですか。……成程、悪くない」

長い階段を、えっちらおっちら上り、拜殿の鈴をガランガランと派手に鳴らし柏手をパンと打ってしっぴかり拝んだ後で、おみくじ百円の看板を見つけたのは青彦だった。

宿の周辺と同様、時期や曜日の関係で人数は少ないものの、それでも有名な観光名所であるらしいこの神社には、自分たち以外にも観光客はそれなりにいる。

だが、異様な瞳の色を有した猫達を見とがめる者は誰一人いない。が、その主である葉月と、連れ立って歩く朔海には、やはりいっつか何というか、浮足立った雰囲気視線が集中している。

「このみくじにあたる人は、災いあるが、励み努めれば転じて路が拓ける。待ち人『来ない。努めて待つべし』、勝負事『努めを怠

ければ負ける』、旅立ち『熟考した上即断すべし。長引けば悪し』。
……縁談『己が身を疎かにすば後破談する』、……………、
」

ぶるぶる震える指でつまんでいるせいでやっぱりぶるぶる震えるくじの紙面を朔海はボシヨボシヨと小声を震わせ読み上げた。

「んー、まー、とにかくあれだな。不幸になりたくなきや……っーか、あの娘とよろしくやりたきや、とつとと覚悟を決めて、全力で踏ん張れよって事だろ？」

そう言う青彦は、実に楽しげな笑みを浮かべる。人目のあるこの場で、下手に手が出せないのを良く知っている青彦は、恨みがましい目で睨み下ろしてくる朔海をからかいを多分に含んだ目で見上げ返し、

「葉月の場合の勝負事ってのはまあ、奴さんやつことの決着って事なんだろうけど、坊ちゃんの場合はなあ。連中のこと以上に例の策の成就って方の意味のがでかいだろうからなあ」

引いたくじを小さく丁寧に折りたたんでポケットにしまいこむ咲月をちらりと横目で盗み見ながら小声で言った。

「……………あの、」
みくじの大吉に落ち込んだ様子の朔海に、咲月がおずおずと声をかける。

「大丈夫、ですか？」

見目の良い朔海が集める視線の数は刻々と増す一方で。見るからに気落ちしている様子の朔海に、声をかけたそうになっている女性達の数も徐々に増えつつある。

「あの、ありきたりな事しか言えないですけど。大吉って、今が一番最悪だっという意味で、それはもうこれ以上悪くなり様がないって事で。だから、この後は少しずつでも、運は上向いてくるはずだつて。……………それはそういう事にして、あそこに結んで来れば良いと思うんです」

と、くじの紙片がたくさん結びつけられた木を指した。

「ああやってにおみくじを結んで帰ると、神様と縁が結べるって言われて……」

四方から刺さる、軽い嫉妬が多分に含まれた刺々しい視線に心を突かれるのを一生懸命にしないようにしながら、

「……あ……、と……でも……」

社と鳥居と朔海の手のみくじと彼自身とを見比べ、

「神様との縁……、つて……えっと……要り……」

言いかけて、困ったように視線を泳がせ、

「ま……せん、よ、ね？」

聞きとるのがやっとという位の小声でボシヨボシヨと呟いた。

そんな咲月を、朔海は目をぱちくり瞬かせて見た後で、

「要る、要るにきまつてるじゃないかっ！ ああもちろん、僕自身の努力が必要だなんて事は百も承知だし、当然頑張るつもりじゃないけどさ。だけど、困ったときの神頼み位はあってもいいじゃないか？」

必死の形相で言い募ると、キツと神の木の枝を睨みつけ、

「……結んでくる」

と言い置き、ダツと木の元へ駆けていく。

「……えっと……その……が神頼みって、アリなんですか？」

他人ひとが多くいる場で、大っぴらに吸血鬼、などとはさすがに言えずに言葉を濁しながらも、咲月は尋ねた。

「んー、まあ、ここは日本だからなあ。一応、無くはないんだよ」

足元で、青彦が答えてくれる。

「この国じゃ昔から、妖怪変化の類を神様として祀ってる場合も少なくないからな。よっぽど潔癖な神様を祀ってる社でなきゃ、大概は問題ないんだよ。……まあ、純粋な人間様に比べりゃ、加護してもらえる確率は落ちるかもしれんがね」

この白根神社が祀るのは、日本武尊。古事記や日本書紀などに登場する 妖怪変化どころか、大変由緒正しい「神様」である。

「でも、まあ、そこはあの坊ちゃんだから。他の同族連中にも無理

でも、あの坊ちゃんだからこそなしえる事もある」

青彦は、ニヒルな笑みを口元に浮かべ、朔海の背を眺めて言う。

「くじの卦はともかく、書かれてた事は結構的確だったたる？ とりあえず、真面目なアドバイスがもらえる位には気に入られたって事なんだろうさ」

一生懸命、大真面目に木の枝に籤を結び付ける朔海の顔に浮かぶのは真剣な表情。神様にも好かれる吸血鬼。彼だからこそ、という青彦の評価に咲月も頷いた。

と。葉月が手招きしているのが見え、咲月は彼の方へ駆け寄った。……最近のお守りって、随分色々あるんですねえ。ほら、これなんか随分可愛い。よければ、お一つどうぞです？」

可愛い和柄の布地で作られた小さな守り袋に小さな鈴が付いていたり、干支の動物や、天然石がついていたり。ペンダントやキーホルダー、ストラップになっている物もある。

「あー、と。ちょっと待った」
戻って来た朔海が、ひょいっと会話に割って入った。

「昨日渡すつもりでいたのに、色々あつてついうっかり忘れてたんだけどさ」

「ごそごそと、パーカーのポケットを探り、取り出したの小さな包み」
「開けてみて」

促されるまま、包みを開ける。中から出て来たのは
「ポプリ、ですか。ファティマ ですね？」

「うん。……ああ、ファティマ って、僕たちが鼻肩ひこきにしてる魔女でね」

疑問符の浮いた咲月の視線に、朔海が答える。

「ああ、魔女って言っても悪魔と契約してるようないかがわしいのじゃなくて、古来から継がれてきた由緒正しい魔女の一族の、ね。

天然石とか香草ハーブとか香辛料スパイスとか、そういうのを扱う店をやっつてさ、一度ここのを買ったら、よそではもう買えないってくらい、ホントに質が違うんだ」

「私も、かねてからお世話になってましてね。……正直、ハーブやらスパイスやらに用があつた事はないのですが。占星術なども修めている方で、色々相談にのつていただいたりしているのですよ」
「そうそう、水晶玉であちこち覗き見してたりね。……ここ最近の事情、全部お見通しだつたよ、ホント文字通りつてやつでさ」

参つたよ、と朔海は頭を掻きながら苦笑する。

昨夜の夕食も、今朝の朝食　　鮭の醤油漬けを焼いたのと焼き海苔と温泉卵にワカメのみそ汁という純和風の献立　　も実に美味しかった。

朔海の料理の腕ももちろんだが。使つていた素材が良い物だつたという事なのだろう。

鮭を漬けた醤油に混ぜ込まれたガーリックの香りが食欲を誘い……。咲月は平気な顔でそれを食べ進める彼ら二人の様子から、吸血鬼の弱点の一つがにんにくである、というのが全くのガセネタであつたらしい事実を察した訳なのだ。

そういえば……、流れる水も……水道水をごくごく普通に使つて料理をしていたし、釣りが好きでよく川などで釣りをするとも言っていた。と、言う事は、これも弱点などではないのだろう。

咲月は、空を見上げる。

今日の天気は……かなり雲が多いが、ぎりぎり晴れだと言えるだろう。そろそろ朝というよりは昼に近い時間帯になりつつある今、太陽も空の一番高い所へ近づきつつある。

彼ら自身から、実際に弱点であると教えられた唯一のもの。

そして、咲月はもう一度視線を鳥居へ向ける。

日ノ本と呼ばれるこの国で、一番偉いとされる神は、伊勢に祀られた天照大神　　太陽の女神である。彼女が隠れば太陽が隠れ、この世は常闇となる　　天の岩戸の物語は、日本神話の中でもよく知られた話だ。

「そういえば、そろそろお昼時ですよ。今日は初日ですし、この辺で引き上げましょうか。明日は、白根火山の湯釜まで足を伸ばそ

うかと思っっているので」

葉月の言葉に朔海が観光ガイドの冊子をパラパラめくり、

「ああ、これ？　　白根山頂にある世界有数の強酸性火口湖。直径約300m、水深30m。エメラルドグリーンの湖水をたたえ、底から湧き出す硫黄泉のため冬期でも凍結しない。湖面が覗ける釜のふちの展望台へは、遊歩道が整備されている。高山なので気温、強風対策として夏場でも羽織れるものを持っていったほうがよい」

そこに書かれた文章を読み上げた。

「山の上まではロープウェイで行けるらしいので。頂上の乗り場から湯釜まであるけば良い運動になりますからね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7307f/>

Need of Your Heart's Blood 1

2011年12月29日16時49分発行